

創立50周年 記念誌



東日本建築教育研究会

創立50周年記念誌 訂正・追加

- p. 32 5行目 当然藤森局長 → 藤森校長
- p. 45 地図内 都南村 → 盛岡市
久慈市 → 野田村
- p. 46 県立白石工業高等学校（全） → 県白石工業高等学校（全）
県立古川工業高等学校（全） → 県古川工業高等学校（全）
- p. 49 福島県地図訂正



- p. 50 白 大学足利高等学校（全） → 白鷗大学足利高等学校（全）
地図に小山市追加
- p. 54 日本工業大学附属東京工業高等学校（全）
→ 日本工業大学付属東京工業高等学校（全）
- p. 56 県立向の岡工業高等学校（全） → 県立向の岡工業高等学校（全・定）
- p. 57 横浜市立工業高等学校（全） → 横浜市立工業高等学校（全・定）
- p. 58 県立葛南工業高等学校（全） → 県立葛南工業高等学校（定）
千葉経済大学附属高等学校（定） → 千葉経済大学附属高等学校（全）
- p. 59 県立甲府工業高等学校（全） → 県立甲府工業高等学校（全・定）
- p. 61 県立長野工業高等学校（全・定） → 県長野工業高等学校（全・定）
県立池田工業高等学校（全） → 県池田工業高等学校（全）
県立上田千曲高等学校（全） → 県上田千曲高等学校（全）
県立飯田長姫高等学校（全） → 県飯田長姫高等学校（全）
- p. 62 県立小松工芸高等学校（全） → 県立小松工業高等学校（全）
- p. 64 名古屋工業高等学校 → 名古屋工業高等学校（全）
- p. 73 10行目 委員会でまとていき → 委員会でまとめていき
- p. 74 13行目 この10年間に2階の → この10年間に2回の
- p. 75 表の内 鉄骨原寸図 → 鉄骨現寸図
東日本建築教育研究会のあゆみ 追加
- p. 85 昭和45年 全国工高製図コンテスト実施（昭和45年～56年）
- p. 87 昭和55年 創立30周年記念式典
会員名簿発行
- p. 89 平成6年 全国高等学校建築教育連絡協議会発足
- p. 90 平成8年 第1回 建築施工技術者試験実施
第1回 CAD作品展実施

目 次

創立50周年を祝って

稲見辰夫（会長・都立墨田工高校長）	7
-------------------	---

創立50周年記念誌発刊に際して

北島敬己（前会長・都立蔵前工高校長）	8
--------------------	---

祝辞

佐藤義雄（文部省調査官）	9
--------------	---

祝辞

杉田一仁（西日本工高建築連盟会長・岡山県立岡山工高校長）	10
------------------------------	----

思い出（建築技術者の育成に思う）

清水守男（元会長・都立田無工高校長）	11
--------------------	----

創立50周年を祝う

故松村篤躬（元会長・都立小石川工高校長）	12
----------------------	----

思い出

故加曾利政男（元会長・都立小石川工高校長）	13
-----------------------	----

思い出

故吉村義弘（元会長・都立工芸工高校長）	14
---------------------	----

研究会の思い出

五十嵐永吉（元副会長・国立東工大附工高）	15
----------------------	----

研究会発足の頃の思い出

森安四郎（元副会長・都立田無工高）	17
-------------------	----

回想

堀越喜与志（元副会長・都立小石川工高）	18
---------------------	----

研究会雑感

赤地龍馬（元副会長・製図コンクール運営審査委員長・都立田無工高）	19
----------------------------------	----

思い出

佐藤賢吉（元副会長・都立江東工高校長）	20
---------------------	----

研究会の思い出

古 谷 勉（元副会長・都立府中工高校長）	21
----------------------	----

総会の思い出

伊 藤 鷲 二（神奈川県立小田原城北工高）	22
平 孝 幸（宮城県仙台工高）	23
久保田 幸 正（新潟県立直江津工高）	24
江 口 功（茨城県立下館工高）	25
長 岡 信 浩（山形県立米沢工高）	26
佐 藤 哲（元副会長・千葉県立市川工高）	27
中 野 剛 史（愛知県立名古屋市立工芸高校）	29
土 屋 博 一（長野工高）	31
沼 田 勲（北海道札幌工高）	32
高 橋 義 則（秋田県立大曲工高）	34

会員の声

村 井 茂 敏（青森県八戸工大第一高）	35
木 村 隆（青森県立弘前工高）	36
加 藤 紘 三（愛知県立豊橋工高）	37
大 野 悦 夫（静岡県立天竜林業高）	39

学校紹介

分科会報告

製図分科会（菊池貞介・千葉県立市川工高）	66
計画分科会（大庭孝雄・神奈川県立小田原城北工高）	70
構造分科会（大久保健・都立葛西工高）	71
施工分科会（内藤美雪丸・日工大付属東京工高）	74

委員会報告

教材委員会（松井貞二・都立蔵前工高）	76
編集委員会（古賀昌之・都立墨田工高）	77
資格取得推進委員会（長島佳久・埼玉県立春日部工高）	78
製図コンクール運営委員会（塩沢泰・関東第一高）	80

研究会のあゆみ

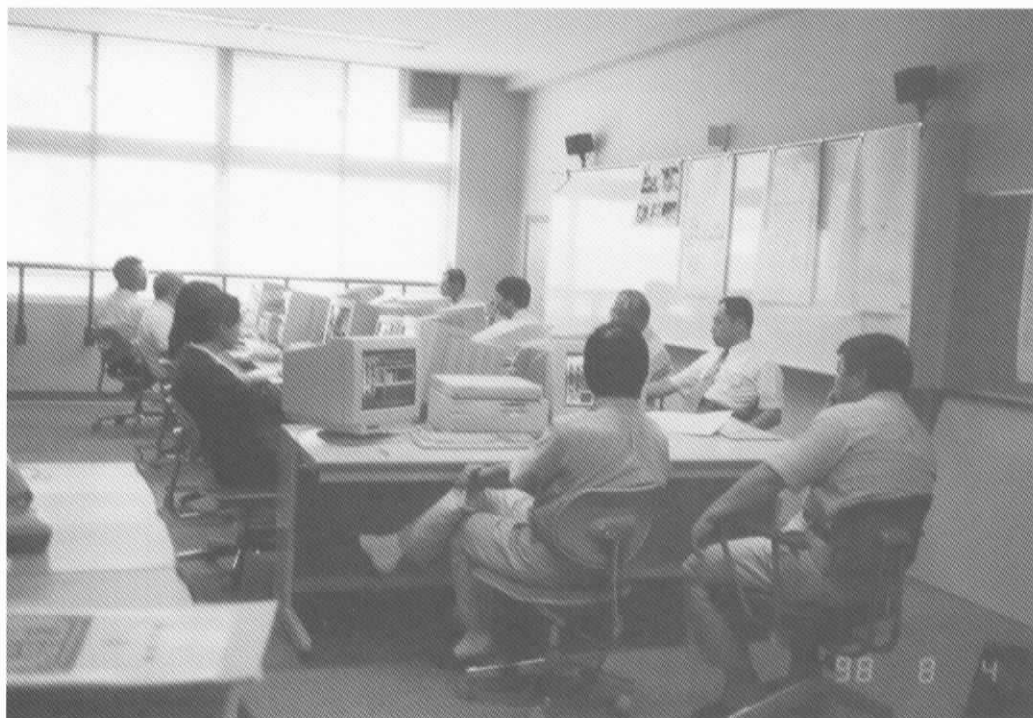
50周年記念事業協賛企業一覧	92
----------------	----

編集後記

（土田裕康・元副会長・都立蔵前工高）	94
--------------------	----



第49回 秋田大会



製図分科会 98年（平成10）8月 夏期研究協議会
 （JW-CADの基本操作の体験と授業への活用）
 （市川工高にて）



東京小さな船旅

吾妻橋—駒形橋—観橋—蔵前橋—両国橋—新大橋—清洲橋
隅田川大橋—永代橋—中央大橋—佃大橋—勝どき橋

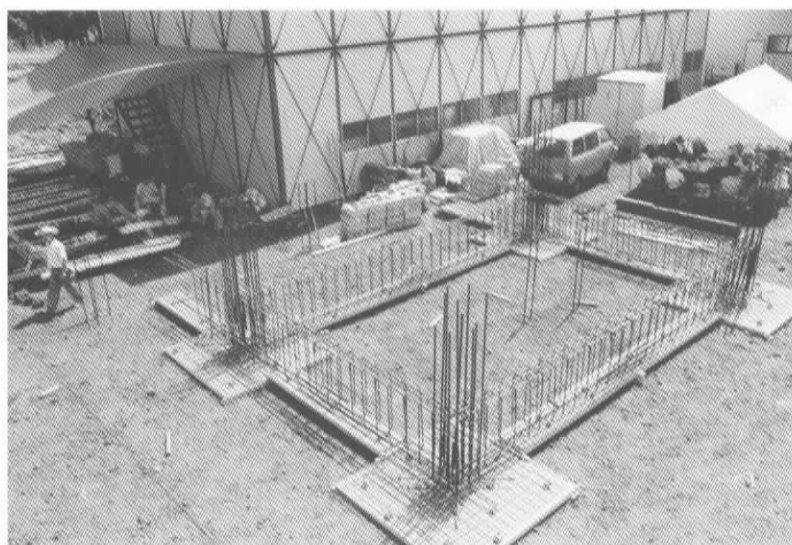
計画分科会 99年（平11）夏期研究協議会（浅草、浜離宮にて）



構造分科会

「ランドマークタワー」建設工事現場見学会

平成4年2月7日



施工分科会 92年（平成4）

夏期研究協議会

越生高校怪井沢研修センターにて

（鉄筋組立実習）

東日本建築教育研究会の50周年を祝って

全国工業高等学校長協会理事長

東日本建築教育研究会会長 稲見辰夫

東日本建築教育研究会が結成され、ここに50周年記念号を発刊できますこと、会員の皆様と共に喜びたいと思います。

また、50年の長きに渡って、建築関連の諸機関や業界の皆様からの心温まるご支援を賜りましたことに対し、深く感謝申し上げる次第であります。

本研究会は昭和26年に蔵前工業高等学校校長の伏見三郎会長を中心に「関東地区建築教育研究会」が設立されたのが始まりです。現在の東日本建築教育研究会となったのは昭和28年のことです。

本研究会が現在も輝かしい研究を続け、その研究の成果が各界に期待されるに至ったことは、諸先輩方が、並々ならぬ努力と熱意を傾け、技術発展の著しい激動期を50年間にわたって、建築に関連する学科の教育課程と学習指導、施設・設備などの在り方について研究成果をあげ、東日本地区のみならず広く我が国工業教育の発展に大きく貢献してこられたからであります。今後とも先輩諸氏の実践と伝統を受け継ぎ、継承、発展させなくてはなりません。

では、現在のモノづくりの現場の状況はどうでしょうか。

皆さんも、平成4年5月に東海道新幹線「のぞみ」のボルトが脱落した事故を覚えていると思います。原因は初歩的な技能ミスということでした。このことから技術の人的基盤が弱体化しつつあると報道され、評論家の内藤克人氏は、「匠と呼ばれた熟練技能者が現場から消えつつあるため」と指摘しました。

平成8年の毎日新聞紙誌上では、作業現場から溶接や機械加工、研削などの熟練技能者が減り、八割の職場で将来、技能者を確保する見通しが立っていないと危機感を抱いていることが、報道されました。

平成9年に労働省に設置された、「高度技能継承委員会」でも述べられておりますように、我が国の経済発展を支えているのは、多くの熟練した技能者であります。しかしながら、近年、企業の生産拠点の海外移転による産業の空洞化や若年層を中心としたモノづくり離れが顕著になっております。

今後は、ハイテク化や省力化が進行しても、熟練技能の必要性は失われることなく、むしろ技術革新による製品の小型化、複雑化が一層多様なニーズを生み、これまで以上の高度な熟練技能が必要とされてくるものと思われます。

そのためには、工業の学科を持つ学校においては、社会の要望している将来のスペシャリスト、すなわち高度熟練技能者を育成する一方、単なる「モノづくり」の技術者を育成するだけでなく、我が国の置かれている国際的立場を考え、モノづくりに新しい付加価値が付け加えられる生産を育成することが何よりも大切になると思います。

例えば、モノづくりと芸術。モノづくりと伝統。モノづくりと心。モノづくりと福祉。モノづくりと量産。モノづくりと個性。などモノづくりと他の価値と統合させたモノづくりに付加価値を付けることが大切です。

創立 50 周年記念誌発刊に際して

前東日本建築教育研究会会長 北 島 敬 己

東日本建築教育研究会が創立 50 周年を迎えたことに心からお祝い申し上げます。私は平成 8 年度の名古屋大会において研究会の会長を引き受け、9 年度の長野大会、10 年度の北海道大会及び平成 11 年度の秋田大会までの 3 年間、その職にありました。

平成 8 年度は、7 月に第 15 期中央教育審議会（以下、中教審）の一次答申が公表され、これからの教育は「ゆとり」の中で子供たちに「生きる力」をはぐくむことが大切であるとされました。さらに、平成 9 年 1 月には、国が従来から進めてきた行政改革等、五つの改革に新たに教育改革を加え、教育が国家的問題として取り上げられることになりました。これを受けて文部省は「教育改革プログラム」を策定し、これに沿った教育改革がその後実行されてきていると考えます。

この 8 年度には、懸案であった「建築施工技術者試験」が開始されました。これは全国工業高等学校長協会等の支援を受け、全国各ブロックの建築教育研究会が全国高等学校建築協議会のもとに結束して要請した成果です。特に、本研究会はその中心となって関係官庁との折衝に当たり、その実現に努力しました。さて、この試験の合格者は 2 級施工管理技術検定試験において、学科試験のうち二科目が免除されます。平成 12 年度からは、合格して三年間の実務経験を経た者が、2 級施工管理技術検定試験を受けてくると思います。追跡調査等で施工技術者試験を評価して、この資格が建築科の生徒にとって有意義なものとなっていくことを期待しています。

平成 9 年度は、6 月に第 16 期中教審の二次答申がなされ、これからは、一人一人の能力・適性に応じた教育を進めることが大切であるとされました。この年には、教育課程審議会（以下、教課審）と理科教育・産業教育審議会の中間まとめが公表され、学習指導要領の改訂に向けて、急ピッチな審議が行われました。

平成 10 年度は、7 月の教課審答申で、完全学校週五日制の下で「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開し、生徒に自ら学び自ら考える「生きる力」の育成が強調されました。平成 11 年 3 月、新しい高等学校学習指導要領の発表、6 月に移行措置の発表と続きました。この間は、建築教育の内容について文部省から本研究会に対して意見聴取がしばしばあり、多くの方々にご協力をいただきました。

さて、本研究会の特徴は分科会が活発に活動していることにあります。これからも①指導技術の研究開発及び普及、②将来を展望した教育内容の検討、③魅力ある研修会の企画等、研究会の隆盛に努力してほしいと思います。

終わりに、最近の雇用情勢に危惧しています。建築科だけの問題では無いのですが、就職に強いのが専門高校です。もし、生徒の就職が困難な状況が継続するようであれば、その学科の存在意義が問われます。普通高校と専門学校があればなどならないためにも、インターンシップの導入等、新しい発想で地域や企業等の連携を図り、もっと産業界と学校が密接な関係になっていくことが必要と考えます。

東日本建築教育研究会創立 50 周年を祝う

文部省初等中等教育局職業教育課 教科調査官 佐 藤 義 雄

東日本建築教育研究会が、昭和 26 年に発足し、本年、創立 50 周年を迎えられましたことを心から御祝い申し上げます。

貴研究会は、「産業教育振興法」が制定された昭和 26 年 11 月に、建築課程に関する研究を行い、その向上・改善を図るとともに、会員相互の親睦を図ることを目的として発足されました。

以来、貴研究会は、50 年の長きにわたり、幾多の先輩諸賢の御尽力により、建築に関する学科の教育課程と学習指導、施設・設備などの在り方について研究を行い、その研究成果は東日本建築教育研究会のみならず、広く我が国工業教育の発展に大きく貢献してられました。

近年、我が国においては、通信技術などの技術革新や製造業の国際化が一層進展するとともに、人間の生活や地球環境に配慮した技術が強く求められ、様々な改革・改善が行われています。

建築分野においては、昭和 25 年以來の建築基準法が改められ、従前の仕様規定中心から、安全性、修復性、使用性などの性能を規定する性能規定に改められました。

教育分野においては、昨年 3 月に新しい高等学校学習指導要領を告示しました。この改訂のねらいは、社会の状況が大きく変化する中で、21 世紀を生きる人材を育てるため、豊かな人間性をはぐくむとともに、一人一人の個性を生かしてその能力を十分に伸ばす新しい時代の教育を実現するため、完全学校週 5 日制の下で、各学校が「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開し、生徒に豊かな人間性や基礎・基本を身に付けさせ、個性を生かし、自ら学び自ら考える「生きる力」を培うこととしています。

工業教育についてもこの方針に沿って目標を改めるとともに、各科目の内容を基礎的・基本的な内容に厳選するとともに、原則履修科目を従前の 6 科目から 2 科目に改めるなどにより、従前にも増して柔軟な教育課程の編成を可能とし、特色ある教育課程の編成と特色ある教育活動ができるように改めました。このことにより、専門性をより高める教育についてもその実現を可能としたところであります。

本年からは、新しい学習指導要領の移行措置が実施されますが、各都道府県においては、特色ある教育課程が編成され、実施に向けた実践教育が行われているところであります。

21 世紀を目前に控え、新時代の建築教育の展開に当たっては、貴研究会の果たす役割は益々大きく、その研究成果に御期待申し上げます。

東日本建築教育研究会が本年の 50 周年を契機として、会員各位の御尽力により一層発展されますことを御祈念申し上げます。

祝 辞

西日本工高建築連盟会長 杉 田 一 仁

東日本建築教育研究会が創立 50 周年を迎えられますことを心からお祝い申し上げます。 私達の連盟は、以前は近畿工高建築連盟と称しておりましたが、昭和 55 年度に現在の名称になり、貴研究会と同様に、平成 12 年度に創立 50 周年を迎えることになります。創立のきっかけは、大阪の先生方が必要に迫られた自然発生的なものと聞いています。貴研究会の生い立ちとの違いはあっても、建築教育を推進する上で同じ目標を持つ団体としてお互いに協力しあい、工業教育の一層の向上を図っていききたいものと考えます。

本年 3 月、文部省は 21 世紀初頭を見据えた新学習指導要領を発表しました。その中で、「情報」や「総合的な学習の時間」など時代にマッチした新教科の導入や「インターンシップ」の推進が示されました。また、平成 14 年度からの完全 5 日制の下、豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自觉の育成、自ら学び自ら考える力の育成、基礎基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実、各学校が創意工夫を生かし特色ある学校づくりの推進などが重視されています。

工業科の目標も、今までの基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、現代社会における工業の意義や役割を理解させるとともに、環境に配慮しつつ工業技術の諸問題を主体的、合理的に解決し、社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てると改訂されました。建築の科目では、特に科目名称の変更はありませんが、これらの目標に沿ったカリキュラムを作成することとなりました。また、卒業に必要な修得総単位数は 80 単位以上から 74 単位以上に縮減され、専門学科における専門教科・科目の必修単位数を 30 単位から 25 単位以上にするなど改訂されました。そして、原則履修科目は、現行の 6 科目から、「工業技術基礎」と「課題研究」の 2 科目となります。

さて、西日本工高建築連盟は、先般 5 月 21 日岡山市の「まびき会館」にて、平成 10 年度の総会を開催し、貴会からも都立蔵前工業高等学校の堀内仁之先生をお迎えしました。今後の運営については、スリム化の声も強く、本連盟もできる限り縮小予算に徹することとなりました。しかし、従来からのデザイン展や各分科会、委員会活動は、西工連の重要な活動と位置づけねばならないとの意見もあり、今後の課題となりました。平成 12 年度から連盟年会費を 1 万円に増額し、事務局校を 2 年任期として本部校と庶務担当校に分け、かつ、総会と作品展を開催する総会当番校を設けるなど新しい動きが承認されました。

最後に貴会の創立 50 周年をお祝いし、今後益々のご発展と加盟校の先生方のご健勝とご活躍を祈念しごあいさつさせていただきます。

(岡山県立岡山工業高等学校校長)

東日本建築教育研究会の創立 50 周年を祝う

元会長東京都立田無工業高等学校長

清水 守 男

東日本建築教育研究会が創立され、ここに 50 周年を迎えますことに心よりお祝い申し上げます。この間、多くの業績を残された本研究会の会員の皆様、ご協力いただいた関係機関、業界の方々に深甚なる敬意を表します。

顧みますと、私の在任いたしました年代は、奇しくも創立 40 周年の年でした。平成 2 年 7 月 25、26 日に神奈川県箱根町のホテル「おかだ」で創立 40 周年記念式典および総会、研究協議会が盛大に開かれたことが、昨日のことにように思い出されます。ご来賓の文部省の



清水守男会長あいさつ
(湯本ホテルおかだにて、平成 2 年 7 月 25 日)

岩本宗治先生はじめ県教育委員会、歴代の会長先生のご臨席を仰ぎ、ご指導ご激励を賜りました。とりわけ役員の方々、地元神奈川県の先生方が総力をあげて準備、運営に当たられ大きな成果をあげられたことが今も強い印象として残っております。その中に今は亡き山室滋先生がおられたことも悲しい記憶の一齣として蘇ってまいります。

さて、当時の教育をめぐる課題を振り返ってみますと、科学技術や経済の発展と共に、情報化、国際化、高齢化が進み教育への対応が求められた時代でした。

学習指導要領では

- ・心豊かな人間の育成
- ・自己教育力の育成
- ・基礎基本の重視と個性を生かす教育の充実
- ・文化と伝統の尊重と国際理解教育の推進

が示され、この目標に向かって教育現場での推進が図られておりました。

この趣旨に沿って 40 周年の記念大会も、多くの研究や実践が発表されました。「インテリジェントスクールの試み」「コンピュータを授業にどう取り入れたらよいか」など意欲的な取り組みが発表されました。工業教育の先駆的なこれらの事例研究は参会者に多くの賛辞をいただき、学校現場への実践に活かされていたと信じております。

また、当時「建築施工技術者試験」の高校への導入が役員・会員から提言されておりました。西日本工高建築連盟とも連携をとりあって推進を図られていたことが記憶に残っております。その後、歴代の会長先生はじめ役員、会員の方々のなみなみならぬご尽力によって、現在は実現し大きな成果をおさめられていることはご同慶の至りです。本研究会が誇れる一つと思います。

この様に本研究会は多くの業績を残し 50 周年を迎えました。あらためて敬意を表し、お祝いを申し上げます。

さて、今日 2000 年の新たな世紀を迎え本研究会の役割、期待はますます大きいものがあります。少子、高齢化、国際化、情報化は当時には予想もしない急速な進展を遂げています。特に IT 革命といわれる情報化の進展は目覚ましいものがあります。技術の高度化への対応と、生徒が自ら学び、自ら考える教育、まさに「生きる力」を育む教育が求められています。この変革の時代にあつてますます本研究会の活躍が期待されます。

今後とも、東日本建築教育研究会が我国の未来を担う人材育成に、工業教育の中核として 21 世紀に向けて更なる発展を遂げられることを祈念しお祝いの言葉とします。

建築技術者の育成に思う

元会長 東京都立小石川工業高等学校校長
故 松 村 篤 躬

本年度も当研究会の建築ニュースが発刊され、会の益々の発展を心からおよこび申し上げます。

第38回の総会・研究協議会も6月10日・11日の両日、大宮ソニックシティにて埼玉県立春日部工業高等学校校長松本昭二氏を中心に、県教委の方々をはじめ県内の建築関係各位のご協力により盛会裡に終了できましたこと大変うれしく思っております。

この会が実り多き大会になったのは、運営委員会の皆様方の並々ならぬご準備とご熱心な会員の方々の日頃からの研究のたまものと厚く感謝申し上げるとともに、これからも東日本建築研究会の今後の発展のためご協力下さることをお願いいたします。

さて、工業界は社会の進展と共に激変して先端技術が開発されつつあることは、会員の皆様もご承知のことと思います。それにともなって私達職業人を育成する者はこのことにどう対応すべきかが問われています。

私はこれからの工業人の育成にあたって最も重要なことは、「人間教育」と「情報化時代に対応できる教育」であると考えます。

すべての職業学科の卒業生が進む職業分野において情報機器が導入されているということから、建築科で学ぶ生徒にとっても、パソコン、CADシステムなど情報処理に関する教育が重要視されなければならないと思います。新しい学習指導要領も教育課程審の答申を受けて、情報処理に関することが大きくとりあげられており、技術に関する資格や検定制度の開発と共に、課題研究など生徒に学習意欲をもたせ興味と関心を抱かせることにより、創意・工夫を喚起させようとしています。

特に建築科に入学してくる生徒の多様化を考えると、これからの建築技術者の育成にあたって、効果的な指導法は如何にあるべきかが問題になっています。

現在まで工業教育の先駆者として他教科をリードしてきた建築教育をになっている私達は、我が国の工業教育の将来を深く洞察して、これからの若者の指導方法を策定して、なお一層の研究を進めたいと思います。

元会長 東京都立小石川工業高等学校長
故 加 曾 利 政 男

40年の歴史と伝統のある本会会長にご推薦を受け、その責任の重大さを痛感致しております。もとより浅学非才である私の任ではありませんが、お引き受けした以上は微力ではありますが全力をあげ、本会の研修活動の一層の推進に努力致したいと考えておりますので、会員の皆様方の一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

お陰様で、平成元年度東日本建築教育研究会の総会並び研究協議会は、静岡県立島田工業高等学校を中心とした静岡県のご尽力により6月9日・10日の両日にわたり、展望絶景な地に会場を設定していただき盛会のうちに充実した大会を持てましたことを、衷心よりお礼申し上げます。

さて、時を同じく新学習指導要領が告示され、また4月には第14期中央教育審議会が再開され、まさに教育改革元年の感を深める時代になりました。我々教育現場をあずかる者として今後の研修の重要性がますます大きくなってきました。

建築の教育に於いても情報化が高まり、先端技術の導入や多様化した生徒の個性をいかした指導方法を取りいれたり、時代に対応しなければならぬ努力をしています。この時期に先般、全国工業高等学校長協会創立70周年式典記念行事として行われた「生徒研究成果発表大会」の最優秀賞・優秀賞の中に建築科関係作品が入っていたことは、大変喜ばしいことです。これもひとえに日ごろの先生方の指導の賜と思っています。言うまでもなく建築物は人間生活を営む際の基盤であり、生活をエンジョイする場であり、心の休まる空間です。この設計や製作の学習をすることは、今日言われている心の教育、豊かな心を持つ教育にもつながります。毎日毎日の指導のなかに情操教育も行われているわけです。まさに今日求められている理想的な教育を実践しているのでその責務は重く、大きなものがあります。

目を世界に向けた時、教育問題は万国共通な問題があるようです。過日、フィンランド国会議員の文教委員19名が本校に見学にみえましたとき、質問された内容は、生涯教育のこと、職業高等学校卒業後の進路問題、資格取得のこと、学校と地域社会との関連等全く我々が今日検討し、実践しつつある問題を鋭く追求された感じがしましたが、これは自国で問われている問題であり、日本の現状を知り参考にしたいとのことでした。

このような体験をすると、世界は1つの感をますます強められると同時に国際理解教育の必要性を感じました。

終わりに、本会会員の諸先生方の一層のご発展、ご活躍をお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。

元会長 東京都立葛西工業高等学校長
故 吉 村 義 弘

奈良時代に使われた天平尺は、一尺が29.6cm。飛鳥時代に法隆寺に建てた高麗尺で35.5cmといわれています。古代中国では王朝が変わるごとに度量衡も変わったと聞きます。大和の平安京の造営にもその影響を受けたことでしょう。

現在は長さを表すのにすべてメートルが基準。私が記憶している尺貫法が残っていた時代でも、一尺の物差しは二通りありました。曲尺なら30.3cm、鯨尺なら37.9cmと違っていました。

違った物差しで人や生活を測るのですから少々ややこしくなりますが、そこに人の英知とロマンを感じてしまうのですから不思議でもあります。

平安京は中央の朱雀通りをはさんで東側は中国の洛陽風に、西側は長安風に作られたと聞きます。今年はこの地で全国産業教育フェアが開催されました。建都1200年の平安京は、どのような物差しを使うのでしょうか。

去る6月16日（木）～17日（金）の両日、平成6年度第44回東日本建築教育研究会総会・研究協議会が山形県天童市において文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官岩本宗治先生ほか多数のご来賓をお迎えして盛大に開催されました。

緻密な計画、流れるような運営に感服すると共に運営に携わっておられる先生方の、温かい対応に感涙を覚えるほどでありました。

熱心な研究協議、素晴らしい講演、壮大さと優雅を兼ね備えた山寺地区の研究視察など地域に根差した文化に触れ、山形が心にしみた二日間でもありました。

山形県の皆様が、長時間をかけて綿密に計画をねり、一条乱れぬ運営をしていただきましたことに心から感謝申し上げます。

さて、この度「建築施工技術者」試験の実施につきまして建設省へ要望書を提出することになりました。平成7年度から本格的に実施されるものと期待されます。

要望書を提出することができるようになるまでには多くの方々のご苦勞がありました。まず、資格申請の必要があるかどうか建築のある全国の高校へアンケート調査。その結果97%の賛同を得てゴーサイン。

建設省では資格申請者は全国規模の団体の申請でないと受け付けないとのことでした。そこで、西日本工高建築連盟の先生方と相談の上、「全国高等学校建築教育連絡協議会」（以下、ここでは全建教と呼ぶ）を結成することになりました。

担当の先生方の懸命な努力によって全建教の姿が完成。平成6年9月1日を発足の日と致しました。

この全建教を母体として全国工業高等学校長協会（全工協）にお願いし、全工協から建設省に資格設置を要望することになりました。

この間、十数回に及ぶ建設省、全工協との折衝と指導、業界への陳情、他の地域の建築教育研究会との打ち合わせなどが繰り返されました。西日本と東日本がお互いに打ち合わせのため訪問も致しました。

今後は、「2級建築施工管理技士」試験程度の内容について模擬テストなどを行い、試験の準備にかかる事が大切となってくるものと考えられます。

在学中に資格を取得できる希望が適えられそうになってきたことを喜びつつ、次のステップへの準備をも怠ること

なく、随所に働きかけて行きたいものであります。

最後に、ここに至るまでに、ご指導いただいた関係諸団体、事務を進めてくださった担当の皆様、無理に役員などをお願いしました方々に心から御礼申し上げます。

社会はますます複雑になって参ります。人への評価も単純なものでなく、尺貫法の二つ程度の物差しをはかるに凌駕して豊かな人格、個性、能力、知力、体力、免許資格など多くの物差しで測られるようになりました。また、いろいろな尺度で測った個性が尊ばれるようにもなりました。

今後とも建築を通した活力ある人材の育成と東日本建築教育研究会の一層の発展を目指して微力を注ぎたいと存じます。皆様方のご支援を切にお願い申し上げます。

研究会の思い出

元副会長 国立東工大附工高

五十嵐 永吉

昭和59年3月、急に東工大附属工高を退職して、15年目を迎えました。一時、1年近く専門学校に勤めて居りましたが、その後はまったく教壇を離れ、すっかり昔のことを忘れてしまいました。お便りをいただき大変なつかしく、うれしく思います。同封の年譜に目を通し、思い出すまま、綴ってみました。

私が要請を受け、山田晃一先生が主任であった東工大附属工高建築科に着任したのは、昭和28年9月、当時の学校は校舎も荒れ果て、教科書も薄っぺらで資料・参考書もなく、手探りの授業、勿論、求人も無く、手持ちの参考書の図を手書き、その後、複製機を購入して原画を作り、日曜日・夏休みは、額縁を総動員して屋上で天日焼き、手造り現像液で生徒数だけ複製、すっかり日焼けしたのを思い出します。資料の必要性和その入手を痛感していたとき、山田先生から建築法規の学習書の作成協力を依頼され、初めて東日本建築教育研究会の存在を知りました。伏見、中江、浅野、富塚、宮島、池田、岡登諸先輩等との出会いもこの時以来であり、池田先生を除いて既に故人、そのほか歴代の会長さん、共に助け合い、苦勞し、折りあれば酒を酌み交わした多くの先生方も亡くなりました。大変悲しく、寂しいことです。

昭和30年に入ると教科書の編修・出版も盛んになり、先生方の多大なご協力のお陰で立派な教科書がそろいました。私も執筆・編集・校正に携わり、大変勉強になりました。法規の学習書で、分かりにくい高さ制限などを理解しやすくするため、初めて見取り図にした手法を取り入れ、構造の納まり図などに用い、現在も数多く使われ、他社出版物にも使われております。大変うれしい反面、著作権の厳しくなった昨今、登録しておけば良かったと悔やまれますが、公務員としての責務と割り切っておりました。昭見堂から学習書も多数出版しましたが、当初の目論見もはずれ、なぜか採択校も少なく、労多くて益少ない結果となることが多く、昭見堂には大変ご迷惑をお掛けし、申し訳なく思っております。

教科書の整備・充実に伴い、学習指導書の改定、教科書の見直し・統合・実験実習に関する手引書の作成等、文部省の委員として参画することも多かったのは、出張手当も交通費もかからない、しかも距離的にも最も近かった国立の工業高校の現場にいたためでしょうか、年譜を見てびっくりしています。

校長の許可を受け、芝浦工大附属工、関東第一など、私立校の非常勤講師として応援にいくことも多く労働省の訓練校用建築教科書の作成に参画したことから、品川高等職業訓練校講師として特別に許可を受け、研修日を利用して永い間通ったものです。異なった環境の学校の運営、校風、気風等を垣間見ることができ、大変勉強になり、貴重な財産ともなり、仕事の上でも大変役立ちました。

産業教育振興法の施設・設備基準の改定では、専門委員として参画、台帳金額は機械科の約1/5、全教科中最も低く、納得ある答弁もなく大いに憤慨、校長先生委員を前に大奮闘、機械科の約1/3に引上げ、万能製図器一式1クラス分、歪み計、非破壊試験機、環境測定器具の充実を図りました。湖沼・河川の水質、窒素化合物、ダイオキシン等による大気、有害物質による土壌の汚染、騒音・日照等が社会問題になっておりますが、大いに役立っていることと自負しております。

各校卒業設計の在り方から生まれたのが研究会の「製図コンクール」であり、「透視図のかき方と着色実技」等、研究会でも度々取り上げ、それなりの成果をあげ、製図コンクールにもその効果があらわれ、引き継がれているようです。

また、工高生の地位を高めるため、あの手、この手と努力し、協力してきました。建築士の資格についても、大学卒が二級建築士の資格をとることなく、一級建築士試験を受験できることに異をとえ、他方、工業高校で学習し、習得した法規、計画、構造、設備、製図については、一定の基準を設けて各校の学力認定に委ね、学科試験から免除するなどの方策を立てることをいい続けてきました。学力認定については、不十分ではありますが、工業校長会の全国学力テストが実施されておりますが、学科試験免除はとうとう実現せず、1・2年制の専門学校に一級建築士試験を受験できる資格を与える方向に進んでしまいました。

東京オリンピック、大阪万博で建築界好景気になった反面、高学歴を願望する社会風潮を反映し、さらにコンピュータの普及に伴って、内勤者を重視し、工高生を軽視する風潮が蔓延し、大学進学者が増大、逆に工高生の地位は低下し、活力を失い、さらに進学を高めるといふ悪循環を繰り返して来たように思えます。教師の自覚と向上心を高めるとともに、研究会の日々の活動、資料の整備、総会維持のための財源の確保・保持は、重要関心事であり、研究会の全国統合は日々高まっているように思えます。近畿連盟（西日本工高建築連盟）の先生方にも、全国統合のためには、まづ近畿連盟が近畿圏のみに止まらず、西日本を含めてまとめるよう強く要望してきましたが、西日本と改名し、活躍されている由、大変喜ばしいことであり、今後は統合に向けて、問題を解決するよう頑張ってください。

事務局長のとき、30周年のけじめとしての総会を、地元の要望の強かった北の端、札幌で行うことになりましたが、大半の人が事前調査では航空機利用であり、交通費が参加費を大きく上回ることが予想され、参加者の激減も考えられ、引き止め策として、北海道でも訪れる機会の少ない道東旅行の抱き合わせを考えるなど、苦勞しました。本部役員の費用の補助又は全額負担、文部省係員の謝礼・交通費の負担、記念誌の発行等、多くの費用が見込まれ、寄付金を集めることになりましたが、予想外に研究会の知名度が低く、全国的組織でないことも災いして、集まりが悪く、結局、周辺各校にお願いして、日頃お世話になっている地元業者から集める羽目になりました。地方に総会をお願いし、懇親会の費用も含めて、その費用の大部分を集める学校のご苦勞をしみじみ味あうとともに、地元業者との日頃のお付き合いの大切さを痛感しました。全国の先生方のご協力で56年出版した、大変図の多い貴重な「図説建築用語事典」も専門学校生、受験生を中心に売れ行きも伸び、当時の責任者富塚先生のご尽力で、印税の一部が実教出版から支払われていると思いますが、現在、内容を補充、改正するための作業が4年越しに進められ、50周年には間に合わせたといと頑張っております。私がなんとなくリーダ格になっておりますので、多くの印税が研究会に入るよう頑張ります

ので、そのときは、大いに利用、購入するようお願い致します。

今までは、文部省、研究会が中心になって全てが進められてきてましたが、学習指導の独自性、単位制、組み合わせの自由など、各地方、各校の特徴を生かした授業の進め方が認められてきたようです。建築技術の向上・進歩も地方に浸透し、定着し、大都会に出て就職する時代は過ぎ去ったようです。青森、北海道でも縄文時代の大規模古墳が発掘され、歴史観も塗り替えられようとしています。都会は都会、地方は地方なりに身近の問題に取り組み、これに新技術、知恵を組み込んで研究し、お互いの情報を伝達・交換し、利用し合う体制を作りたいものです。その土地特有の技術風習を高く評価し、誇りを持って受け継ぎ、世界のなかで見劣りのしない若者になるよう、若い人達を励ましてやって下さい。今日あるのは、皆様方のお陰と紙面を借りて心からお礼申し上げます。

研究会発足の頃の思い出

元副会長 東京都立田無工業高等学校
森 安 四 郎

研究会発足時の初代会長の勤務校に勤務した関係で、事務局を長く引受けその後も東京都立の工業高校の教員であるとのことで、常任理事として研究会の手伝いをして参りました。当初は東京都を中心とし近県の学校が集り、名称も「関東地区建築教育研究」として昭和26年設立総会を東京都で開催しました。

発足の頃は戦後5年ぐらいで、文部省は新制の高等学校制度を発令（昭和21年）しましたが、学校現場では教科書や満足した教材も無く暗中模索していました。各学校での指導法、教材などを持ちより、意見を交換するなど活躍しました。その後全国的にも反響が大きく、東北地方の学校も参加を求める声があり、昭和28年に現在の名称に変更しました。

総会・研究会も各県で持ち回りということになりましたが、交通機関も不便で地方大会の参加には、夜行寝台（ブルートレイン）を使用したものです。

地方での総会後の見学会などでは、当番校の先生方のご尽力により個人では見学できない社寺、史蹟などをご案内頂き懐しく楽しい思い出として残っています。

山形県の総会后米沢市に伝わっている民芸品（郷土玩具）として有名な笹野一刀彫の職人さんの工房を案内して頂き、独特の刃物を用い、白色の木材（コシアブラなど）を削り彫るもので、手さばき、工具の使い方とスピードに驚きました。お土産に“お鷹ぼつぼつ”を頂いて帰りました。これも地方を旅をしての懐しい思い出です。

終わりにあたって、新しい学校制度や生徒の多様化など問題点を多々かかえていると思いますが、ますますの研究会の発展と先生方のご活躍を祈っております。

回 想

元副会長 東京都立小石川工業高等学校
堀 越 喜 与 志

昭和26年に本会設立総会が開かれ発展途上の昭和33年、私は東京都教員となったが、新米には縁の遠い存在だった。しかし、昭和36年、中江先生が2代理事長に就任され、事務局が静岡工だけでは不便ということで、東京事務局が小石川工に設けられ、岡登先生が昭和36～43年まで、スピーディに事務処理をされていた姿を思い出す。その頃、会運営に協力いただく賛助会のお願いには、大変苦勞されていた様である。そのあと、田無工（森安先生）が昭和42～49年、次は葛西工（松本先生）が昭和49～54年と続いたが余り期間が長いと当番校が大変ということで、都立校を主とした輪番制（3年交代）となった。

また、長谷川先生（5代）のとき、理事長が会長に改称された。なお6代までは、東京近郊の建築科出身の校長先生に会長をお願いして来たが、諸般の情勢から、当番校の校長先生にお願いすることになり、会長を補佐する副会長制をとることになった。

また、総会開催県に対するお願いは悩みの一つであったが、池田会長（6代）が、開催県案を提出され、皆様のご協力により大よそその線に沿って総会が継続されていることは喜ばしいことである。

以上が本会变遷の一部の側面である。初めに戻るが、敗戦後の混乱期を乗り越え、工業教育の胎動に呼応して、産振基準の設定、学習指導要領改訂、教科書執筆などがあり、それに関係された先生方が核となって、“お互に協力して建築教育を発展させて行こう”と意気投合、障害を乗り越えて、他工業科に先がけて、本会を設立された。その頃関西では、既に近畿工高連盟が意欲的に活動されていたので、それもよい刺激になったようである。

設立趣旨を反映して、本会書記の活動は、産振、教科書、指導の手引き、研究授業、見学会、講習会などの項目が並ぶ。やがて、日常授業に役立つ情報交換と相互研修を目的とした分科会が発足、製図コンクール、コンピュータ利用などが続く。

今後も時代に即した、そして自由な研究活動の続くことを期待している。

第1回 製図コンクールの回想

元東京都立田無工業高等学校 製図コンクール運営委員長
赤 地 龍 馬

創立50周年の今年、第19回目を迎える製図コンクールも、昭和57年（1982）発足以来、発展的に毎年継続実施されております事に対して、発足時の運営・審査委員長として、コンクールの運営を支援する皆様に感謝申し上げ、第1回実施の当時に回想し、コンクールの発足と発展にご尽力いただいた皆様にも感謝とお礼を申し上げます。

製図コンクール実施の発端は、昭和45年（1970）から実施の（株）トンボ鉛筆主催の全国工高製図コンテストが昭和56年（第12回）主宰者の都合で中止することが、昭和55年に決定したことでした。

また、創立30周年（昭和55年）を期に製図分科会主査を、五十嵐永吉先生（東工大附工高）から引き継ぎ、新主査として「何かやらねば！！」という気負と全国工高製図コンテストに関係していたという自惚れから「学年毎に全生徒が参加できるこのコンテストは、1年間たりとも休むことなく当研究会が継続することが、製図教育に効果的である！！」を理由に、全国工高製図コンテストの応募要領をベースにした実施案を製図分科会、主査会、理事会に提出し、運営費については、十分な裏付けもない無茶なお願いでしたが、昭和57年2月の理事会で、昭和57年度の研究会事業として承認されました。

コンクールの運営委員会は、会長・副会長・事務局長・製図分科会委員。委員長は製図分科会主査で組織されましたが、常任理事の白石四郎先生（千葉市川工高）から「コンクールの内容には口を出さないから、渉外係として参加させて欲しい」との好意的な申し出により、（株）建築資料研究社との太いパイプ役としてご協力をいただき、今日までのコンクール継続の大きな原動力となっていました。

また、第1回目の運営費として、全国工業高校長協会からもご支援をいただきました。

このようなご支援により、運営費の目処が立ちましたが、応募作品について各校の先生方のご協力が得られるだろうかということで、応募要領を昭和57年の総会通知に同封の後、6月1日・9月21日の計3回、各校に発送しました。

以上のような次第でスタートした第1回でしたが、応募参加校72校、課題1、107点。課題2、75点。課題3、62点の応募があり、蔵前工高の和室の大広間で、畳の上に各作品を並べて、応募にご協力いただいた先生方に感謝しながら、運営委員の先生方と審査したこと、そして事務局長の高山英一先生（蔵前工高）のデザインによる研究会の賞状が、参加生徒全員に運営委員の先生方により荷作りされ発送されたことが思い出されます。

研究会および製図コンクールの益々のご発展と、会員の皆様のご健勝を祈願して、感謝をこめた思い出の記とします。ありがとうございました。

研究会雑感

元副会長 東京都立江東工業高等学校長
佐藤 賢吉

研究会との係わりは、昭和38年4月に東京都の教員（都立小石川工業高等学校勤務）となって以来、30数年間にわたり教員生活の殆どは本研究会（理事、計画分科会主査、事務局長、副会長）とともに過ごしてきたことになりました。

当時、建設業界は東京オリンピック（昭和39年）の影響もあり非常に活気のある時代で、建築教育に関する各種教材開発、施設・設備、の充実・改善に関する調査研究の基礎資料もこの頃から整備・推進されるようになった。日本が高度経済成長へと向った頃で社会のニーズに対応すべき全国的に工業高等学校の新設・増設の多かった年代でもあった。

とにかく、工業高等学校全体に、とりわけ建築科には質・量ともに勢いがあったことを覚えている。

さて、本研究会の運営面・活動面での記憶としては、まづ毎年6月に開催の総会・研究協議会では、都道県理事・会員校には、いつも多大なるご支援・ご協力をいただいたこと。つぎに昭和43年度頃から研究会の組織として、理事会（常任・都県）、四分科会（製図・計画・構造・施工）および教材委員会編集委員会、その後には、製図コンクール委員会、資格取得推進委員会なども設置され、現在のような組織となった。

このような組織・構成のもとに本研究会活動の活性化および会員・委員相互の交流も一層深化し、中でも夏期研究協議会（夏期講習会）では、各分科会が中心となり企画・運営をするようになったこと。また一方、全国高等学校建築教育連絡協議会を設置し、祈願の「建築施工技術者試験」実施への原動力となったことがあげられる。

また今回の学習指導要領（平成11年3月29日文部省告示第58号）では、平成14年度から完全学校週5日制のもとと教育界・社会全体が大きなうねりの中で各学校がこれまで以上に特色ある教育の展開を求めている。（生きる力を育むことを基本的なねらいとしている。）

以上限られた紙面にて、創立50周年にあたり、今後とも関係各位のご指導ご支援のもとに東日本建築教育研究会の益々のご発展を祈念し、回想のペンを置くことにする。

研究会の思い出

元副会長 東京都立府中工業高等学校長
古 谷 勉

創立50周年おめでとうございます。未熟な私の力量を高めてくれた研究会に心より感謝申し上げます。古川工高体育館を主会場とした総会が初めての大会参加で、1966（昭和41）6月です。教科調査官の文部行政の講話や会員の優れた研究発表に新鮮な刺激を受け、広い視野を持つ必要性をもちました。

縁あって1968（昭43）年度から1981（昭56）年度までの14年間、構造分科会委員を務め、分科会活動を手伝う機会を得て、教材研究に取り組む意欲の増進になりました。この間、全国工業高等学校校長協会の1970（昭45）年度の事業に派遣され、大和ハウス工業KK、建設省との三者協同による教育映画「プレハブ建築」を製作し、視聴覚教材づくりを始めるきっかけになったことを記憶しています。若い時期の多種多様な体験の積み重ねは、自らの教育心や研究心の滋養に大きな力となりました。

1982（昭57）年4月からは、構造分科会主査として感動と充実感の溢れる6年間でした。分科会主催の研修会に出席した会員からのお礼の手紙に返信を書いたり、新耐震設計法の研修会では講師を兼務したりしました。参加会員の真摯な姿勢は、次のステップへの活力源になり、忘れることができません。

1989（平成）年度、教頭職に就きましたが、40周年記念誌編集中のため特別にご配慮で、加盟校以外の会員にならず、副会長を委嘱していただき、編集委員会主査の任務を継続し、完成できた嬉しい思い出もあります。意は尽くせませんが、思い出の一端を述べさせていただきました。

本研究会の創立50周年の成功とこれからも会員のために更なる発展を期待しています。



40周年記念誌のための座談会風景
（都立蔵前工高にて、平成元年12月2日）

総会の思い出

第40回（平成2年度）神奈川大会・総会の思い出

神奈川県立小田原城北工業高等学校

伊藤 鷲 二

暑い夏だった、と思う。請われて拙文を綴る今、暑かったあの年の夏がよみがえって来る。何年も前に読み終えた小説のあらすじを思い出すように、最後のページから最初のページへと逆に繰り返す。

野手の間を白いボールが抜けて外野を転々としている。歓声が上がる。勝利を確信したスタンドがテレビ画面に大寫しになる。これで決勝進出は間違いない、と喜ぶ同僚の声を聞いたと思う。

昼食後の控室で、神奈川工業高校の同僚たちと高校野球の中継を、私はぼんやりと眺めていた。今しがた幕を閉じた「東日本」が、まだ頭の中でゆれている。

40周年の記念大会を神奈川で開催することが正式に決定されたのは、いつだったろうか。準備委員会を経て、大会開催の前年（1989年）の4月からは藤沢工業高校落合校長のもとに実行委員会が組織された。

それ以前の何度かの打合せでは、事務局を神奈川工業高校に置くというのが、委員会の雰囲気であった。また、科内での話し合いの結果でも、20数年間、ただ神工でのほほんと過ごしてきただけの私を実行委員から逃してはくれなかった。馬鹿を重ねただけの私に事務局の仕事がどれほど出来るのであろうか。

県下の建築科設置校から全日制は各2名（事務局校である神工は3名）、定時制からは1名の総勢18名の委員で構成された実行委員会は、こうして船出した。

丁度20年前に神奈川が当番県で箱根で記念大会を開催しているのだが、当時の経験者の多くの先輩たちは既に現場を退いていて、手探りの状態からの出発であった。

大会はどの程度の規模になるのか。とりわけその裏づけとなる予算をどう組んでいくのか。参加費だけでは運営できないことは誰でも分かっている。県や横浜、川崎、横須賀市からどのくらいの補助金が頂けるものなのか。企業からはどのような形で協賛金の協力が得られるのか。全てがわからないことばかりであった。そんな時にTさんが同級生の伝手で埼玉大会の詳細な資料を手に入れた。また他の研究会の全国大会の資料をも目にする事が出来た。時代もバブルがはじける前で好況を維持していた。

実行委員会のメンバーには主査を務めるYさんやOさんも加わっていて、本部との連絡や何やかやで力強いことこの上もなかった。先が明るくなり、確かな手応えを感じながら作業を進めることが出来た。

前年の静岡大会にはメンバーの多くが参加することになった。それぞれの分担に応じた下見であった。

県教委や横浜市教委をはじめ、建設業協会、建築士会などの後援・協賛団体を落合校長と訪れたのも夏の暑い日であった。並行して各校では各企業への協賛金依頼の文書を発送している。秋口になると会計担当のSさんは毎日のように会計簿をチェックするようになった。40周年記念大会の全体像が見えてきた。骨格に見事な肉付けがされている。

県下の建築科の先生方がほぼ全員揃っている。東日本建築教育研究会創立40周年記念神奈川大会が、今始まろうとしている。

翌日、私は決勝戦を応援するため横浜スタジアムにいた。残された「東日本」の処理のことを思いながら……。暑い、暑い夏であった。

第41回（平成3年度）宮城大会・総会の思い出

宮城大会実行委員会事務局

宮城県仙台工業高等学校 平 孝 幸

昭和63年9月東日本建築教育研究会本部事務局より、第41回宮城大会の開催依頼を受けた折りは、宮城県開催は二度目となるので、出来れば他県にお願いしたい気持ちであったが、県内関係工業高等学校（古川工高、仙台工高、仙台第二工高、白石工高）での協議の結果受諾し、事務局を仙台工業高等学校に置くこととなり、早速関係教育委員会に承諾を頂き共催をお願いしました。しかし、大会の運営、準備、協賛関係、その他のことで当時は、何をどのように進めるのか全くわからず困惑していたものでした。

幸い、本部事務局はじめ、静岡、神奈川の大会運営にあたられた諸先生のご指導をいただき、おぼろげながらその方向が見え、総会、研究協議会、研究視察など実りある大会にと思ったとき、過去の大会などを参考に宮城県を見ていただこうと言うこともあって、仙台七夕、松島視察、学校見学の案が実行委員会において企画されました。この案で会場を仙台、松島等のホテルに問い合わせると8月5日は七夕のため予約の観光客でいっぱい、どこのホテルも団体の予約はできないとのことであり、最初からつまづき途方に暮れていました。そんな折り幸いに知り合いの旅行社を通じ松島方面のホテルで大会会場について検討をさせて欲しいという連絡があり、祈るような気持ちでなかば強引に会場の引受けをお願いしたものでした。

このような状況で日程と会場は決まりましたが、次に企業協賛について依頼をどのようにしたらよいか悩んでおりましたが、あるとき宮城県建設業協会との懇談会の席上、会長の奥田和男氏に、第41回東日本建築教育研究会宮城大会が、平成3年8月、松島で開催される由のことをお願いしたところ「わかりました。協力しましょう」と言う言葉をいただき、私は心からありがたく思い、その場で後援と協賛をお願いしました。このときの奥田氏の力強い一言はいまだに忘れることができず感謝しております。

お陰様で協賛企業も百社を超えあとはいかに充実した大会にすることということで事務局および関係学校等の先生方と毎日遅くまで協議を繰り返したものでした。

大会が近づくにつれ、例年仙台七夕には雨が降ると言われていたので特に大会二日目の研究視察の事が気になり、雨天時の対処に思いをめぐらしておりましたが、幸いに二日間にわたる大会当日は快晴となり大過なく運営することができ、本部及び関係学校等の先生方と共にやっと肩の荷がおりたという安堵感で大会の成功を喜んだものでした。

41回宮城大会は、工業教育が大きな曲がり角にきている時に新しい工業教育のあり方を模索する大会であったと思われ、研究発表として「課題研究」実践のための試行的研究の主題で県内関係工業高等学校の代表の先生方より研究が進められ、忙しい合間をぬって夜遅くまで打合せを行い、研究のまとめとして大会資料の冊子を作成したことがきのうのように思い出されます。その後、全国の関係専門高等学校で履修され数年たった今その成果が問われています。



第42回（平成4年度）新潟大会・総会の思い出

新潟県立直江津工業高等学校
久保田 幸 正

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。」これは有名な川端康成の小説「雪国」の最初の一節である。現在は新幹線でトンネルを抜けると越後湯沢駅のホームに滑り込み、東京から2時間ほどで新潟に着いてしまう。このような雪国新潟で平成4年6月第42回東日本建築教育研究会が行われた。会場の月岡温泉は、豊浦町の東に位置し、新潟市から東北へ約35キロあまりの所にあり、新潟の奥座敷と呼ばれるにぎわいを見せている。温泉は大正4年、石油を掘っているときに湧きだしたもので、湯は硫化水素泉ですべすべの肌をつくる「美人になれる温泉」として知られ、人気の高い温泉である。

平成元年、本部から平成4年の第42回大会は新潟で行うとの連絡が理事校に入った。新潟県は建築科を置く学校が3校であり、早速各校の校長と科の代表者が集まり主幹校を何処にするか話し合いがもたれた。その結果、新発田南高校が当番校になった。平成2年からいよいよ準備に入った。新発田南高校は、この数年前に土木の研究大会を当番しており、その時のマニュアルをもとに作業を開始した。

さてここで少し裏話をしておこう。まず資金についてである。「大会を成功させるにはお金が集まれば半分成功したようなもの。」ということで予算書を作り、県建設業協会へ再三再四足を運んだ。おかげで県内の各企業は業界でとりまとめていただいた。また3校での取り組みも、卒業生を中心に協力をしていただくことができた。平成3年の秋、本部よりあまりお金を掛けないでやろうという話があったときにはほぼ予定に近い金額が集まっていた。

会場については、新潟市内にするか月岡にするかでかなり論議を要した。交通の利便を考えると新潟、ゆっくりくつろげるのは月岡。最後は温泉に浸かりゆっくり新潟の銘酒を楽しんでいただくということになった。当時は新潟の酒というと「越の寒梅」「雪中梅」「八海山」等が有名で、新潟でもなかなか手に入らない幻の酒であったが、当日はこれらの酒を並べることができた。

大会運営に当たっては、平成3年度の宮城大会では、写真を細々撮る、役員会に出席させていただく等情報収集しながら、来年は新潟でやる図式を頭に描きながら参加させてもらった。少し個人的になるが、宮城大会から新潟大会の間にも準備委員会等で役員の先生方と席を共にしながら、親戚関係や大学同窓の先生であつたりを始めて知り、感激したり緊張したりの大大会であった。

研究発表では、新潟工業から「F C A I の実践報告」、高田工業から「課題研究の実践報告」と当時の新しい課題で発表していただきました。

東日本建築教育研究会も50年を迎えることになりました。この会を支えてきた役員の皆さん、大会を運営してきた各県の皆さん、それぞれご苦労が多かったかと思います。しかしこの会では、新しい教育課程に取り組み、新しい教科に取り組み、それぞれの実践を通しての研究発表等は建築を教える先生方に自信と力を与えてくれます。また、分科会等での取り組みも夢と希望を与えてくれます。この会が今後ますます発展し、良きエンジニアを世に送り出せるよう希望しております。

第43回（平成5年度）茨城大会

茨城県立下館工業高等学校 建設工学科主任
江口 功

東日本建築教育研究会第43回総会・研究協議会（茨城大会）は、平成5年6月10～11日間の2日間にわたって開催されました。茨城県大洗町のパークホテルへ全国から181名の参加がありました。

大会は清水守男会長の挨拶に始まり、予定された議事案件も協議承認され、その結果新会長として吉村義弘先生が選出されました。新旧会長の挨拶で総会を締めくくりました。

講演は、文部省教科調査官岩本宗治さんによる「工業教育と総合学科」でした。概要は、総合学科の紹介と工業学科の今後について、ドイツのマイスター制度を例にしてお話がされました。総合学科の特徴の要点は、自己の進路への自覚を深めさせることと、個性を生かす教育にある。総合学科における工業系列の内容は、軽装備の工業教育といえることができる。従来の工業科は、さらに専門性を高めることが要求されてくる。将来的に工業教育は明るい。産業界の大きな課題として、情報化・国際化による高度な技術習得の必要性や、若年労働力の減少、地域における人口減などがある。これらを受けて工業教育にはその内容の充実と継続教育による上級者の育成が求められる。一つの例として専攻科の設置などが考えられる。というものでした。

また、建設省桑田俊一さんから「中央建設審議会答申」についてお話をいただきました。建設業界における人材対策に関して、特に教育機関と産業界の連携と資格取得誘導の部分についてお話がありました。若年建設労働者入職促進協議会はさらに充実強化して行きたい。総合学科は大いに期待を持っている。2級土木施工管理技士について、高校在学中に受験出来るようにして、合格した者は3年の実務経験の後に受ける本試験では、学科試験が免除される方向でまとまる見通しである。というものでした。

続いて研究協議会に入り、製図・計画・構造・施工の4分科会に分かれて熱心な協議が行われました。研究協議会終了後は、建築CADの機器実演と製図コンクール作品展示があり、教育懇談会をもって第一日を終了しました。

第二日は研究協議会の全体会であり、最初に分科会での協議内容の報告がなされた。つづいて、甲府工高の天野善幸・辻好文先生による「専攻科に関する実践報告」と、宇都宮工高の岡田義治先生による「課題研究に関する実践報告」という内容豊富な研究発表がなされました。講評・指導助言をいただき大会を終了しました。

研究視察は、旧水戸藩の歴史のにおいをそのままに残す偕楽園「好文亭」と水戸藩校「弘道館」であり、幸い天気にも恵まれて談笑しながらの散策ができた。



第44回（平成6年度）山形大会・総会の思い出

山形県立米沢工業高等学校 建築科
長 岡 信 浩

本研究会が創立50周年を迎えるにあたり、これまでの運営・発展にご尽力をいただいた先輩諸兄に対し、深甚なる敬意を表し、感謝申し上げます。

第44回大会は平成6年に山形県が主管で実施することとお聞きしたのは新潟大会の席であり、帰校して県内4校の建築科に連絡を取り準備委員会設置やら役割分担など急いで行ったことを改めて思い出している。

準備段階では県教育委員会に現文部省教科調査官の佐藤義雄氏が指導主事としておられ、ご尽力いただけたことも大会準備に心強い限りであった。

大会運営は新潟大会や茨城大会を参考にさせていただきながら本部会議にも出席し、進捗状況などを報告しながらの刷り直しを行った。

大会開催は約30年に一度しかないと考えると山形でしかできない内容を盛り込むこと、山形らしい歓迎をすることを柱として準備にとりかかった。

前者は卒業生に対して建築士資格取得への支援を長年行っている山形工業高校の「地方都市における建築教育に関する報告」という研究発表と風土にあった屋根の軸線の捉え方に一つの建築理念を確立し、設計活動をしている本間利雄氏からの「風土と建築」と題して御講演をいただいた。また、昭和30年代から続いている建築士会主催の卒業設計コンクール平成5年度入選作品を展示して見てもらった。

見学会は懸崖造りでも有名な山寺の立石寺とその山懷に建設された講師の代表作の一つ「風雅の里」を対象とした。

また、後者は「さくらんぼ」の時期として「将棋の駒」で知られる天童を研修会場と選定した。参加者にはこの企画で満足していただけただろうか。

事務局の準備段階でもっとも慌てたことは研修会場がほぼ決まってから、ホテルが全面改修を開催時期にすることになったとの理由でキャンセルされたことである。幸い、滝の湯ホテルで引き受けていただいた。時節柄さくらんぼ狩りとかち合う形で教育研究会ということで特段の御配慮をいただいたことも忘れられないこととして感謝しているところである。

一方総会に係る費用の捻出は苦勞の一つでもあったが、各校の割合を決めてほぼ予定通り協賛いただけたことはあの当時だったからと懐古している。

最近では県からの旅費配当が低く、総会にも出張できない現状であり残念であるが研究大会の運営費用もスリム化が進んでいるのだろうと推察し、そうあるべきだと思っている。

山形開催から5年が経過し、米沢工業高校も括り募集で建築科という名称は建設系建築コース、建築設備コースと変革し、卒業生を輩出するに至っている。

時代の要求に沿った学科改変が更に多くの高校で進んだときに東日本建築教育研究会の在り方も変わるのだろうか。

第45回（平成7年度）総会・大会の思い出

元千葉県立市川工業高等学校

佐藤 哲

平成7年度東日本建築教育研究会総会・研究協議大会が6月8～9日の2日間にわたり、千葉県成田市「ホリディ・イン東武成田」を会場として、文部省佐藤義雄調査官をはじめ来賓、会員合わせて185名の参加により盛会のうちに開催された。

日 程：第1日 6月8日（木）

理事会 10:30～12:00

1. 開会式 13:00～13:50

- | | | |
|-----------------|----------------------|-------|
| (1) 開会のことば | 市川工業高等学校長 | 佐藤 英幸 |
| (2) 千葉大会実行委員長挨拶 | 東総工業高等学校長 | 大仁田拓三 |
| (3) 挨拶 | 東日本建築教育研究会会長 | 吉村 義弘 |
| | 千葉県教育庁学校教育部指導課長補佐 | 徳之内義昭 |
| (4) 来賓祝辞 | 文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官 | 佐藤 義雄 |
| | 千葉県教育委員会教育長 | 中村 好成 |
| | 全国工業高等学校長協会理事長 | 渡邊 光男 |
| | 千葉県高等学校工業教育研究会会長 | 渡辺 貞雄 |
| | 西日本工高建築連盟代表 | 狩野 源二 |

(5) 来賓紹介

2. 総会 14:00～15:20

- (1) 開 会
- (2) 議長選出
- (3) 議 事
 - ア 平成6年度事業報告及び決算報告
 - イ 会計監査報告
 - ウ 役員改選
 - エ 平成7年度事業計画・予算案
- (4) 本部事務局諸連絡
- (5) 各委員会報告



3. 研究協議会 I（分科会） 15:30～17:30

共通テーマ：「建築施工技術者試験（仮称）の指導法について」

製図分科会：主査 古賀 昌之 ―新教育課程における製図指導をめぐって（単位数減への対応とCAD教育）―

計画分科会：主査 大庭 孝雄 ―建築法規の指導法について―

構造分科会：主査 本間 正明 ―興味がわく構造関係の課題研究―

施工分科会：主査 山崎 敏弘 ―単位数減にともなう施工の指導法について―



4. 教育懇談会 18:30～20:00

- | | | |
|------------|-----------------|-------|
| (1) 開会のことば | 茂原工業高等学校長 | 大木 茂 |
| (2) 歓迎の挨拶 | 千葉県教育庁学校教育部指導課長 | 鈴木 健生 |

- (3) 会長挨拶 東日本建築教育研究会会長 吉村 義弘
 (4) 祝 辞 千葉経済大学附属高等学校長 佐久間勝彦
 (5) 教育懇談
 (6) 閉会のことば 葛南工業高等学校長 小林 文夫

日 程：第2日目 6月9日(金)

1. 研究協議会 II (全体会) 9:00 ~ 11:30

(1) 分科会報告 9:00 ~ 9:40

(2) 研究発表 9:40 ~ 11:00

ア.「建築と子供達カリキュラム」(アメリカ・アンテラ教授)から学ぶもの

敬愛学園高等学校 加倉井砂男

イ. 歴史的建造物の実測調査及び模型製作

千葉県立市川工業高等学校 江口 敏彦

2. 講評 11:00 ~ 11:30

文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官
 佐藤 義雄

3. 閉会式 11:30 ~ 11:45

(1) 会長挨拶

東日本建築教育研究会会長 吉村 義弘

(2) 次期開催県代表挨拶

名古屋市立工芸高等学校長 坂野上 義

(3) 閉会の挨拶

千葉大会実行委員長 大仁田 拓三

4. 研究視察 12:15 ~ 15:00

視察場所：幕張新都心住宅地区



午後からは幕張新都心の住宅地区を視察した。幕張メッセを核とし、わが国の新しい国際交流拠点の形成をめざしている住宅地区である。日本の集合住宅には珍しいヨーロッパの沿道型の街並や、これに隣接した教室に壁の無いオープンスクールの打瀬小学校の見学は、見学に参加した方々の好評を得ることができたようである。



5. 解 散 J R 京葉線 海浜幕張駅

第46回（平成8年度）総会・大会の思い出

名古屋市立工芸高等学校

中 野 剛 夫

平成8年度東日本建築教育研究総会・研究協議大会が6月6～7日の2日間にわたり「名古屋国際会議場」を会場として、文部省岩本宗治視学官をはじめ来賓や会員合わせて195名の参加により盛会のうちに開催された。

理事会の後総会が開催され、坂野上義実行委員長、吉村義弘会長の挨拶に始まり、大会実施要項に従い議事案件が審議され、新役員として北島敬己会長が承認された。

研究協議会では東海ブロック研究発表として、岐阜県から「紙を活かした課題研究の取り組み」・静岡県から「本校におけるCAD教育」・愛知県から「建築積算の指導法について」・「建築教育におけるマルチメディア」の発表があった。分科会として製図分科会から「新教育課程のもと単位数減における設計製図の指導法について」・計画分科会から「建築法規学習ノートと分科会活動状況」・構造分科会から「単位数減に伴う教科指導法について」・施工分科会から「建築施工技術者試験の指導法について、及び単位数減にともなう建築施工の指導法について」・「工業高校生の建築現場実習についてアンケート報告」以上の発表があった。研究発表後愛知県の堀口通安指導主事の講評があり第1日目の日程を滞りなく終了した。

2日目は名古屋工業大学名誉教授宮野秋彦先生の「私の環境論」というテーマ講演が行われ、その後文部省岩本宗治視学官による第15期中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育について」という内容で講演をいただき、2日間にわたる大会を閉会した。

午後からは明治建築を保存展示する野外博物館として、昭和40年3月開村した「博物館明治村」を見学した。

期 日：平成8年6月6日（木）～7日（金）

会 場：名古屋市「名古屋国際会議場」

日 程：第1日 6月6日（木）

理事会 10:30～12:00

〔1〕開会式 13:00～13:40

- | | | |
|------------|---------------------|-------|
| (1) 開会のことば | 東海地区建築教育研究会副会長 | 杉田 博 |
| (2) 挨拶 | 東海大会実行委員長 | 坂野上 義 |
| | 東日本建築教育研究会会長 | 吉村 義弘 |
| | 東海地区建築教育研究会会長 | 寺島 博 |
| (3) 来賓祝辞 | 愛知県教育委員会高等学校教育課長 | 野々部幸蔵 |
| | 名古屋市教育委員会指導室長 | 加藤 友昭 |
| | 全国工業高等学校長協会理事長 | 井口 茂 |
| (4) 来賓紹介 | 東海地区工業高等学校長会教育研究会会長 | 鈴木 義雄 |
| | 愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事 | 堀口 通安 |
| | 名古屋市教育委員会指導室主任指導主事 | 神谷 尚男 |
| | 西日本工高建築連盟会長 | 石川 俊一 |
| | 愛知県高等学校工業教育研究会会長 | 永屋 達夫 |
| | 愛知県産業教育振興会理事 | 越山 定明 |
| | 愛知県教育振興会常任理事 | 三林 貞夫 |
| | 愛知県教育公務員弘済会理事長 | 磯部 了 |
| (5) 閉会のことば | 東海大会実行副委員長 | 稲葉 一八 |

〔2〕総会 13:50～14:40

- (1) 開 会
- (2) 議長選出
- (3) 議 事
 - ア 平成7年度事業報告・決算報告
 - イ 会計監査報告
 - ウ 役員改選
 - エ 平成8年度事業計画・予算案審議
 - オ 会長吉村義弘先生へ感謝状贈呈
- (4) 本部事務局諸連絡
- (5) 各委員会報告
- (6) その他
- (7) 閉 会



〔3〕研究協議会 …………… 14:50～16:50 講演会 宮野秋彦先生

(1) 東海ブロック研究発表

ア 岐阜県「紙を活かした課題研究の取り組み」	大垣工業	若尾 泰明
イ 静岡県「本校におけるCAD教育」	天竜林業	名倉 斉志
ウ 愛知県「建築積算の指導法について」	半田工業	桑田 隆行
エ 愛知県「建築教育におけるマルチメディア」	名市工芸	石原 正道

(2) 分科会発表

ア 製図分科会「新教育課程のもと単位数減における設計製図の指導法について」	墨田工業	古賀 昌之
イ 計画分科会「建築法規学習ノートと分科会の活動状況」	小田原城北工業	大庭 孝雄
ウ 構造分科会「単位減に伴う教科指導法について」	田無工業	本間 正明
エ 施工分科会「建築施工の学習指導法について」「工業高校生の建築現場実習について」	神奈川工業	山崎 敏弘

(3) 質疑応答

(4) 講 評 16:50～17:10

愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事 堀口 通安

日程：第2日目 6月7日（金）

〔1〕講演会 …………… 9:30～10:30

テーマ「私の環境論」

名古屋工業大学名誉教授 宮野 秋彦

テーマ「21世紀を展望した我が国の教育について」

文部省初等中等教育局視学官 岩本 宗治

〔2〕閉会式 …………… 10:40～11:00

(1) 会長挨拶	東日本建築教育研究会会長	北島 敬己
(2) 次期開催県代表挨拶	長野県長野工業高等学校長	藤森 弘
(3) 閉会の挨拶	東海大会実行委員長	坂野上 義

〔3〕研究視察 …………… 11:20～14:30

視察場所「博物館明治村」

〔4〕解 散 …………… 15:30

「JR名古屋駅」

講演会要旨

講演は建築環境学に関する初期の主な著書、渡辺 要「建築計画原論」(昭和9)から昭和40年位までの時代と先生の環境学に対する考えを紹介。次いで建築学における「環境」について、先人の研究と功績について説明。そして環境工学という言葉について、昭和26年8月日本建築学会の中に「建築設計計画基準委員会」という名称の委員会が設置され、それは建築設計計画委員会と改称し「計画各論」と「建築原論」の両領域に属する研究者により構成されていた。

その後原論分野の研究者を中心とした「環境委員会」が発足し、「建築計画原論」という呼び名が「建築環境工学」と改められ今日に及ぶ。

そして最後に最近環境を話題にするととき良く用いられる言葉に言及され「アメニティ」とか「共生」という言葉について先生の長年にわたる学識経験を交え解説された。

第47回(平成9年度)長野大会・総会の思い出

長野県 長野工業高等学校
土 屋 博 一

確か平成2年だったと思いますが、私がまだ飯田長姫高等学校に勤務していた時、当時工業教育研究会建築分科会での席上、長野県理事であった長野工業高校の大脇先生から「平成9年度東日本建築教育研究会は長野県で開催という方向で決まりかけてる。というより、辞退できない。」というお話がありました。当時冬季オリンピック開催が長野県と決まり、オリンピック施設の見学を兼ねて是非にとのこと。県都から200km近く離れているこの飯田の地ではオリンピックも「何のこと？」位の他人事のような状況でした。ですので、東日本大会が長野県でやるということになっても「長野工業が事務局でやってもらえるんだろうな」と全く安易に考え、心より「ご苦労様、資金集めだけはがんばってやりましょう。」という程度の気持ちでいました。それがまさか、私が、こともあろうに事務局をやる羽目になるうとは全く考えてもいませんでした。

実は、何の因果か、私は東日本大会事務局をやるのはこれが2度目なのです。私は初任が長野工業高校の土木科でした。採用された2年目に東日本土木研究会をやったのでした。教員になった1年目から先輩に連れられて、会社回り、広告取り、業者との打ち合わせ、等事務局長の言われるままに動いたことを覚えています。この大会が終わってから事務局長の主任の先生が、「これであと50年、退職までは二度と大会は来ない。」といわれたことを思い出します。門前の小僧何とやら…ではありませんが、この経験が今回の長野大会の企画、運営に大変役に立ったのは言うまでもありません。

まず、大会を運営するに当たっては先立つものは資金です。幸いなことに県下の学校が快く協力してくれまして、大



変動がありました。また、本校においては、土木・建築科同窓生からなる（長工そばな会）という組織がありまして、そこへお願いに行きましたところ、ここでもまた快く協力していただけることになり、ひと安心しました。

大会中のエピソードといえば、文部省の佐藤教科調査官のお迎えに、藤森校長が向かったのですが、待てど暮らせど戻ってこない。どうしたのか心配していると調査官がひょっこりいらしたのではありませんか。どうも長野駅出口で行き違いになったらしいのです。当然藤森局長も調査官がお見えにならないで時間は迫ってくるは、お腹はすいてくるはで、気をもんでヤキモキしていたそうです。結局、校長先生の昼食は立ち食いそばだったようです。私たちの中華風幕の内弁当はとても美味しかったのを覚えています。

さて、大きな混乱もなく、無事大会を終了できたのは、本県の先生方、本部の方々、資料を提供していただいた愛知、千葉各県の方々、教育委員会など多くのみなさまのおかげだと思います。本当にありがとうございました。この場をおかりしまして、感謝とお礼を申し上げたいと思います。



第48回（平成10年度）北海道大会・総会の思い出

北海道 札幌工業高等学校

沼田 勲

平成7年に北海道大会の開催が決り、平成10年にむけて準備に入った。北海道大会は昭和53年30回記念大会以来2度目の開催である。何とか期待に答えられる大会にしたいものと、北海道高等学校建築教育研究会あけて取り組むことになったが、当時の北海道経済は大変厳しいものがあって、北海道拓殖銀行の営業譲渡、そして、企業の相次倒産などが先行きの見えない手さぐりの準備であった。

大会開催時期の6月は丁度観光シーズン真っ最中となるため相当混雑が予想される。参加人数、各分科会の有無等々不確定のままで、ホテルの予約が先ず急れた。ホテルライフオーツ札幌は当時建設中で平成9年3月オープン予定で空間の実感がつかめないまま不安があったが、立地的には札幌市街中心で利便性がよく、札幌コンサートホールキタラ、文学館、日本庭園（八窓庵）などが建つ、札幌を代表する中島公園に隣接していて、環境的に満足できた。予算編成面で参加人数を少な目に、130名に抑えたが、大会では一般参加が170名を超え、役員、来賓を加えると200名にもおよぶ予想以上の大きな大会となったことは担当校として安堵したが、全体会場、分科会の規模で最後まで調整が必要であった。

大会のもう一つのイベントとして、生徒の製図作品の展示の企画では、本会からは製図分科会のCAD製図作品そして特に製図コンクール作品はさすがに優れたものが多く回を重ねてきた成果があらわれていた。北海道の建築教育を知ってもらう意味で、日本建築学会北海道支部主催の卒業設計作品、北海道庁主催の高校生建築デザインコンクール作品、鯉魚盛んな時代の鯉御殿（花田番屋）の模型など大会会場後方に展示した。同一会場ということもあって、研

究協議のあい間にかなり、多くの方にみていただくことができた。

大会の共通テーマは「厳選に伴う学習指導法」2003年からの完全週5日制を視野に入れたもので、新教育課程編成上、座学最低2単位におさえた場合の授業内容、展開について、各分科会とも、各自の持参資料をもとに熱心な協議がなされていたことに共感をおぼえた。特にこのことについて、全工協理事長山下省蔵氏から部会協議の取り組みについて、お褒めいただいていたことは、会場担当校として有難かったことを覚えている。

夕食会はささやかなものであったが各地から参加いただいた皆様との和やかな親睦が忘れられない。

この会の雰囲気づくりに、一週間前に終えたばかりのYosakoiソーラン祭の紹介ビデオを流しムードアップに努めたが、これらをかき消すほどの熱気が感じられた。

2日目の研究発表「北海道の建築教育」と題し、札工高 高崎 格、伊藤茂樹、室工高 山本悦徳各氏の発表はいずれも北海道建築教育を理解していただく上で貴重な発表となった。

文部省教科調査官、佐藤義雄氏の講話では新しい教育の枠組、学習指導要領、総取得単位数、資格取得など、新しいカリキュラム編成、これからの建築教育のあり方を示唆されたものであった。次いで各分科会報告、閉会式と順調に運ぶことができた。午後の研究視察北海道開拓の村へはバス3台、大勢の参加をいただいた。生憎の小雨であったが、現地では少し肌寒さが感じられるものの心配された雨もなく、予定された全日程を終わらせていただいた。何かと不便をお掛けした大会でしたが全面的に協力いただき、新ためて感謝申し上げます。



第49回（平成11年度）秋田大会・総会の思い出

秋田大会事務局長

高橋 義 則

50周年の節目を迎えた東日本建築教育研究会、誠におめでとうございます。今日ある建築教育の充実発展に向けて取り組んでこられた歴代諸先輩のご苦労とご尽力に対し心から感謝申し上げます。

昨年、1999年6月に第49回の東日本建築教育研究大会をみちのく秋田で開催させていただきました。20世紀最後となりました研究大会は「盛大で充実した研究会となりました」と閉会式において稲見新会長からお誉めの言葉をいただき、無事成功裏に終了することができました。お忙しい中を遠路秋田まで駆けつけてくださった会員の皆さんに厚く御礼を申し上げます。

第49回の研究大会を振り返り、若干感想を述べたいと思います。研究大会が秋田県で開催されるのは27年前の昭和47年以来2回目になります。私が初めて参加したのが昭和43年の栃木大会、それから31年が経過、会員の顔触れや大会の運営方法も代わり、初めての大会開催の思いで準備致しました。

平成10年4月に実行委員会を結成、6月に北海道大会に参加視察し貴重なご意見とアドバイスを頂きました。会場・宿泊・懇親会・研究発表・研修視察・予算等の問題点から秋田県では「何ができるか」を検討した。特に予算の問題では全国的に財政が乏しくなり、公費の適正使用、情報公開条例等で各都道府県や各校で参加料の捻出で苦慮された事と思います。現下の状況下では企業の協賛を得ることは非常に困難であるとし、出来るだけ参加料で実行することにしました。そして不透明だった参加料の内訳を明示して、昼食費と懇親会費は別途に申し受けることにしました。また、本部事務局の取り計らいでマインメンタルヘルス研究所所長山崎友丈氏の特別講演も行うことができました。秋田大会の参加状況と日程・内容は次の通りであります。

[会員校数 154校]

参加校108校、参加会員 157名、

懇親会参加者 135名、見学会参加者 78名、

第49回 秋田大会の日程

第一日目 6月17日（木）

1. 開会式 13:00 ~ 13:50
2. 総 会 14:00 ~ 15:20
3. 特別講演会 15:30 ~ 16:30
演題：「思春期の心の理解」講師：山崎友丈
4. 研究協議会Ⅰ（分科会） 16:40 ~ 18:00
4分科会：「製図」・「計画」・「構造」・「施工」
5. 教育懇談会 18:30 ~

第二日目

1. 研究協議会Ⅱ（全体会） 9:00 ~ 10:20
1) 研究発表 (9:00 ~ 9:40)
県立大曲工業高校：黒沢一元
- 2) 各分科会の報告 (9:50 ~ 10:20)
2. 講評 10:30 ~ 10:50
文部省：佐藤義雄
3. 閉会式 11:10 ~ 11:30
4. 研究視察 12:30 ~ 15:30



会員の声

平成4年度 夏期研究協議会（施工）に参加しての体験記

八戸工業大学第一高等学校 村 井 茂 敏

7月27日、28日、29日、夏の厳しい日差しのなか、本校職員1名と、東北新幹線や信越本線などを乗り継いで、軽井沢へと向かいました。私達は、建築科の教員として12年、夏期施工実習研究協議会にはじめて参加した。施工実習など教科書ではわかっている、いざ実習となると疑問な点もいくつか出てくる。先輩の先生からは、「施工分科会は研修内容や日程が一番きつい、中途半端な気持ちで研修に臨むな。」と釘を刺され、うれしさと不安でいっぱいでした。いくつかの列車を乗り継ぎ、標高1000メートルのところまで来たときは、都会とはまた違う暑さを感じることができました。

越生高等学校軽井沢研修センターは、6万2千㎡の大きな敷地の中に立派な研修センター、グラウンド、及び宿泊施設があって全体が良く整備されて広くゆったりとした所です。芽吹いたばかりの新緑が美しく別天地の感じです。

研修第1日目は、開会式直後、一同の写真を撮って、班編成を行ない1班が15～16名程度の構成で、全員が実習服に身を包み暑い日差しの中で麦藁ぼうしをかぶり旅の疲れも見せずにスタートについた。

我々の班は、RC構造実習の鉄筋の組み立て作業からスタート。商店設計図を基にして、基礎ベース筋組み立て作業、柱筋の組み立て作業、基礎ばりの鉄筋の組み立て作業と、スムーズにことは運んだ。この研修は、本校でも、前回参加した職員が参考に、実習の中に取り入れたことがあり、手際よく動くことができたが、鉄筋の配置する順番、結束の仕方や結束をあまり強くしめすぎると切れるなど、理屈ではわかっている、実際の行動になるとやや不安が残った。鉄筋を支える道具や現寸図を書いたコンパネなど、気が付かないところに、何気ない工夫がされていた。約3時間の研修に汗を流した。

夜は、研修センター内において、教育懇談会を行ない、各先生方の各学校の実習内容などについて意見がくみかわされ、教師が自ら手を汚して休得する洗練された授業をしなければならないなど、夜遅くまで意見を交わしていた。

研修第2日目は、朝早くからグラウンドにてラジオ体操を行ない、気合を入れた。朝は涼しかったが、研修が始まるにつれて、次第に暑さが増してきた。午前中の建築測量研修では、最新の測量機器「メモリーカードを搭載したトータルステーション」を利用して、現場で測量を行った。さらにデータは、電子野帳、パソコン、自動製図機械と一貫したオンライン処理を行う研修であった。現在、どこの会社でも、このトータルステーションを使っているということで、高校でも、すでに使っている学校もあった。本校でも早期準備が必要であろうと思った。気になる値段のほうは、100～200万円、それに、反射プリズム6～10万円、ソフト120万円の付属品が必要となる。しかし、高価なだけあって精度も高く、また距離も自動的に光波で測ってくれ簡単に測量ができてしまう。正直いって最初は、本当に大丈夫なのかと疑ったくらいである。

午後からの基本研修では、本校でもすでに実施している内容の水盛りやりかたについて実施した。ここでも、レベル測量機器においては、本校にはないオートレベルを使用して同じ高さを求めた。普通二人は必要な作業もオートレベルでは一人で出来てしまう。今回の現場は、火山灰のためなかなか杭が打ち込めず、どの先生も苦労した。研修内容も、我が校での水盛りやり方とはほとんど同じ内容であったので、自分の実施していることの確認が出来た。実習場所も2面以上取れるため、見本を基に次の作業ができるなど場所的に恵まれていた。

研修第3日目は木造研修で、過去数回の協議会でできなかった一部加工を伴いながら、小屋ばりの墨つけを主とした実習を行った。組編成を1組2名で編成し、尺づえ及び板図は材料を無駄なく利用して、あらかじめ準備しておき時間の短縮に努めた。はじめて使った道具もあり、使い勝手については、指導の先生にマンツーマンで指導をいただき、自然に興味も増し身体もスムーズに動き始めた。最終日だということもあって忘れてついつい先に進み、いろいろな方法を学ぼうと、みんなの目の色が変わっていた。

研修では全員が装備の器具を大いに活用。使い勝手も良く、研修の内容が予定より進み濃い内容となった。役員の方々の研修に対するご指導も、暖かく感激いたしました。

今回の、夏期研修には70名の参加者があり、噂には聞いていたが、研修内容としては、大変充実したものであった。また、他の学校では、どのような内容を実施しているのか、どのような問題点があるのか、各先生方と話し合えるチャンスもあり本当に良かった。その中で、特に本校に欠けているのではないかと感じたのは、各専門教科、特に実習関係における設備や予算の少なさを痛切に感じた。また、実習場所の問題等があげられておりました。この研修は、毎年欠かすことなく我々若い先生方が簡単に参加し、現場でのいろいろな問題点や自分の実施している実習内容の確認をするもっとも良いチャンスと思われます。

今回の、設備及びここまでのいろいろな準備については、越生高校及び役員の先生方の1年以上に渡るご苦勞があったと思われます。本当にありがとうございました。

平成5年度 「夏期研究協議会（構造）に参加して」

青森県立弘前工業高等学校 木村 隆

平成5年度東日本建築教育研究会夏期研究協議会が、7月27日、28日に両日、東京都立葛西工業高等学校において開催されました。今年は構造分科会の主催で、「振動模型の製作とそれを使用した振動実験」という内容で行われました。建築設計を担当している私は、構造系ということで教職経験11年目にして初めて夏期研究協議会に参加することになりました。

前日の昼に弘前を出発した私は午後6時前に東京駅に着き、新幹線からホームに出た途端にサウナ風呂の中にいるような暑さを感じ、宿に着くまでにシャツは汗でビショビショになってしまいました。どうしてこんなに暑いんだと思ひながら、明日からの研究協議会がとても億劫になっていました。

当日は、朝から天気が良く会場の葛西工業高校に着くまでに又してもシャツは汗で濡れていました。受付で学校名と名前を言うと、「遠い所を、ご苦勞さまで。」と言う温かい言葉を頂き俄然やる気が湧いてきました。と同時に普段の生徒への言葉掛けがいかに大切であるかを改めて感じました。開校式が行われる視聴覚室へ行くまでに、校舎が新しくとてもきれいなことに驚きながら歩いて、部屋に入った途端に涼しい風・・・なんと、エアコンが入っていました。先程の温かい言葉といいエアコンといい、前日の億劫さがどこかへ飛んでいってしまいました。

開校式の後に、今回の講師である仙台工業高校の益野英昌先生による「課題研究における振動実験例」という内容で、振動に関する一般事項・・・[力学モデルについて、振動実験法について等]を大変わかりやすく説明していただきました。その後、益野先生の授業時のビデオを見ながら振動台を使った実験の方法とその様子や結果等について説明を聞き、初めて今回のテーマである「振動模型の製作とそれを使用した振動実験」の内容とその狙いがわかったような気がしました。また、益野先生の資料の中にあった「世界の地震の1/3は日本で起こり、その1/3は東北地方で起こる」という内容には、同じ東北に住むものとしてもっとそのことを意識して、生徒に対しては地震という言葉だけではなく、視覚的に訴える必要があると痛感しました。

昼食、休息を挟み午後からは、いよいよ振動実験用模型の製作となりました。参加者を全体で4つの班に分けて模型を製作することになり、私は1班になりました。しかし、私の知っている先生は同じ県の八戸工業大学第一高校の大久保先生だけで他の8名の先生方は今回が初対面でした。

振動実験用模型の材料が配付され、その説明がありました。使用材料は燐青銅というもので、燐と青銅の合金なのだそうです。燐青銅を使用した理由は、鉄板やアルミニウム板に比較すると弾性域が大きく塑性域に達しにくいことから、復元性を保てるためということでした。模型は6層で柱と梁から構成されたちょうど力学模型のような形をしていました。柱と梁のみを模型化した理由は、模型全体の振動性状が比較的単純化されるためで、(複雑な揺れ方をしない)生徒が振動を観察するのに適していると考えられるためということでした。

続いて、作業手順の説明や注意事項があり実際に製作することになりましたが、各班ごとに明日の実験のため最低1個を完成し、他は各自持ち帰って完成させることとなりました。こうなると初対面同士の共同作業ということになりますが、そこは皆さん同じ建築科の先生ということで、八戸工業大学第一高校の大久保先生の「各自、分担してやりましょう」という一言で10人が一斉に自分の仕事を見つけて動き始めました。さすがに皆さん工業高校の先生だなと思いながら私は、梁材のけがき・ボンチング・ボールを使っての穴開けなどを行いました。一緒に作業している1班の先生方とは、もう何年も前から知っているような一体感が生まれてとても楽しく作業ができました。

そして、梁材・柱材・仕口材・柱脚サイドアングル・ベース板の各材料の加工が終了し、いよいよ組立に入りました。梁に仕口アングルを取付け、柱と梁の取付けを行い、それをベース板へ取付けて、ついに高さ60cm、幅20cm、の振動模型の完成です。私は何とも言えない充実感で一杯になりました。と同時に、生徒がこんな気持ちになれる授業をしなければいけないんだ！と強く自己反省をしました。

その後、場所を変えての教育懇談会は各校の先生方との情報交換等で大いに盛り上がり、宿に帰る時間がつつい遅くなってしまいました。

2日目は前日に作った模型を使って、益野先生のビデオで見た実験を私達が体験してみました。実験は振動台の上で模型を固定し、正弦波で振動台を振動させ周波数を変化させます。その値をFFTアナライザーという測定器で読み取り、模型の固有周期と周波数が一致すると共振現象を起こし模型が急に大きく揺れだしました。理論では分かっている目でも目の前で実際にその様子を見てみると、あまりの迫力に驚いてしまいました。また、液化化現象やパソコンを使った地震シミュレーションも行われ振動実験は終了しました。

閉校式の後、昼食を挟んで葛西工業高校の見学を行いました。昨年竣工したばかりの校舎と現在新築中の校舎を見て大変羨ましく思いました。

以上が今年度の夏期研究協議会で私が体験した内容ですが、私自身とても勉強になることばかりで、学問的にも精神的にも充実した2日間を過ごすことができました。是非、次の機会も参加したいと思っています。

最後に、この素晴らしい夏期研究協議会を開催してくださった構造分科会委員の先生方と葛西工業高校の先生方に心から敬意を表します。ありがとうございました。

平成6年度 夏期研究協議会（製図）に参加して

愛知県立豊橋工業高等学校 加藤 紘三

平成6年度東日本建築教育研究会夏期研究協議会が、7月26日、27日、28日の3日間、新潟県六日町にある関東第一高等学校の白銀山荘において開催されました。今年度は製図分科会の主催で「ログハウスの現状とログテーブルの製作」という内容で行われました。私事で恐縮ですが、自宅の新築が11年前でした。次の目標に、ログハウスを自分の手造りで建てようと、その3年後には白樺湖、蓼科周辺の別荘地探しに3回ほど1人で車中泊しながら出かけました。茅野駅から車で30分の所で300坪の土地が400万円と手頃な物件が見つかりました。妻に相談したところ「これから子供の成長にお金が必要なのにそんな別荘地を買う余裕がどこに有るの！」と猛反対され、断念しました。そこで月刊誌「Woody」とか「ウッディライフ」の読書で我慢しました。そして4年前の文化祭で面積6帖程度のドームハウスを、三ッ割材を骨組として製作しました。使用した材が細い事もあって物置倉庫ぐらいにしか使えないだろうという建物になってしまい、現在はばらして古材として他使用となってしまいました。雑誌に紹介されている「ログビルディング・スクール」に参加したい時も有りましたが、それも費用の関係で実現できず現在に至っていましたところ、今回の「間伐材を使用したログテーブルの製作」テーマに私は心がとてもはずみました。もしかしてログテーブルを1人で製作できるかも知れないという期待感でした。しかし資料費が安いから5～6人で1つ製作するのではないかと思いつつ、7月26日午前7時30分に豊橋を出発して東京経由、越後湯沢駅を下車。そしてバスにてミナミスキー場前に到着しました。スキー場の有るところなら平地より涼しいだろうと思っていましたが、御存知のように猛

暑で、避暑気分で出かけて来たつもりの考えが甘かったのです。開校式では会長の吉村都立葛西工業高校長が激励とねぎらいのお言葉を述べられました。続いて今回の研究協議会を開催するにあたって御尽力いただいた関東第一高等学校はじめ関係者先生の紹介がありました。そして香亜奈工房の栗田宏武氏の「ログハウスの現状」という講演を拝聴しました。その後山荘の空地にて講師の栗田氏がチェーンソーの種類・取扱い方を説明しました。そして栗田氏と関東第一高等学校の松本先生が模範演技をしました。やはりチェーンソーが稼働すると実に大きな音がしますので用意していただいたスポンジの耳栓をしました。第一線で活躍されているだけにチェーンソーの手さばきは堂に入っていました。又、関東第一高等学校ではログテーブル及びログハウスの製作を授業に取り入れているとの事で今回は生徒3人も私達の指導に参加していただきました。実際に取り組んで居られる松本先生はじめ諸先生及び生徒の情熱とパワーを初日に肌で感じました。同時に来年度から私も授業に取り入れてみようという意欲が湧いて来ました。さて、いよいよチェーンソーの起動という事ですが、実はチェーンソーたる道具を扱うのは初めての体験でしたので、心の不安と何かおそろしい凶器のようで自分ながらおどおどしているのを感じながらエンジンをかけました。そして手に取ってみると意外と軽く扱いやすいと思いました。長さ50cm位の間伐材にてチェーンソーで切断加工練習するわけですが、ただ真っすぐ切断するだけなら簡単ですが、斜めに切断しようとする抵抗を受けて思うようにはいきませんでした。ケガもなく無事に初日を終了しました。長旅と緊張感の疲れから熟睡することができました。2日目は関東第一高等学校で準備していただいたタイコ挽き間伐材を使つての製作です。水平器付のコンパス状のスクライバーは雑誌では知っていたのですが、実際にどうやって使うのかは知りませんでした。スクライバーの幅を5cmにセットして直角に交差する下段の材の断面を上段の材に作図するわけですが、水平器の気泡が微妙に変化するので持っている手の動きが固くなって作図がうまくできませんでした。栗田氏に「柔らかに扱う事が大切」とアドバイスしていただきましたが何度も繰り返し作図しました。次に作図した線に沿って浅くノミで彫りました。そしていよいよチェーンソーで切り彫りました。まずは垂直に5cm深さまで数ヶ所切断し、カナヅチでたたき取ります。次に曲面状(凹状)に沿ってチェーンソーでアイドリングするわけですが、これがどうしてどうして難しいのです。部分だけに気を取られていると切断してはいけない所まで切断してしまったり、木の抵抗により思わぬ方向へチェーンソーが動いてしまうので、相当な緊張感で、余分な力が腕や肩に入っているのがよくわかりました。3日間でログテーブルを1人で製作する事はとても大変であることに気がつき、5～6人で共同製作が妥当であると思つづく思いました。夢中で作業をしていたのか、耳栓を取り外したためか後日耳鳴りが1週間ほど続きました。4段積みぐらいで2日目は終了しました。夜は広場でバーベキューをして参加者の皆さんと懇親を深めました。せめて1年に1回ぐらいは他県の方々と懇親ができないだろうかと思つづく思いました。いよいよ最終日です。ログテーブル完成を目指して頑張りました。前日の続きで2段積み上げ6段になりました。ドリルで垂直に穴をあけボルトを通しました。そして積み上げた材の両辺のカットで曲面線状にしました。次に天板ですが、板と板のスキ間をなくす為に板を並べて、板と板の接触線に沿ってチェーンソーで切断してそろえました。そしてサンドペーパーで表面を磨き完成です。出来上がってみるとかなりの大きさにびっくりしました。今回の「ログテーブルの製作」は本当にすばらしかったと思います。企画及び準備をしていただいた方々に深く感謝する次第です。本当に有り難うございました。……今回の参加で私も東日本建築教育研究会の手助けになる題材はないだろうかと欲張りな事を考えてしまいました。もし日本の城の模型作りに興味が有る方がいらっしゃれば手助けをしたいと思います。課題研究で城の模型を毎年造っています。特に地元の城を手がけています。

平成 11 年度 夏期研究協議会に参加して

静岡県立天竜林業高等学校 大 野 悦 夫

平成 11 年度東日本建築教育研究会夏期研究協議会が、7 月 23 日、24 日の 2 日間、鹿島建設㈱の鹿島 K I ビル及び東京都立蔵前工業高等学校において開催されました。今年の計画部会の内容は、建築計画と設計および建築史に関する見学会という事で、首都圏での建築計画のツールや設備設計の現状、そして東京の建築史等の見学など多くの企画が盛り込まれておりましたので、是非この機会に、と思い研究会に参加させていただきました。

7 月 23 日、連日豪雨に見舞われ不順だった都内の天候も朝からカラリと晴れ渡り、まさに夏期研究会にふさわしい日よりとなりました。3 年ぶりの東京も、やはり暑いというイメージで東京駅を降りて地下鉄駅へ、そして千代田線赤坂駅を出ると、なんと最近マスコミ等で話題になっている、T 放送局のビルが目の前に現れる。いつの間に新しくなったんだろう、などと感心して歩いていると本日午前中の研究会場である鹿島 K I ビルに到着。予定時刻より若干早く着いたのでエントランスホールのソファに座り周辺を眺めていると、そこに続くアトリウムがトップライトの光を受け、妙に自然環境をかもしだしていることに気が付きました。受付けを済ませ会議室に入り着席、さあ今から研究会の始まりだ、と気持ちを引き締め、どのような講演内容か期待心が高まる、司会者の一声により開講式が始まり、2 日間の夏期研究会がスタートしました。開講式では、開会のことば、会長挨拶、日程説明などの定例進行の後、早速講演会に入りました。

講演会は「建築意匠設計」という内容で、鹿島建設の玉井氏による講演で、とくに自社設計部における C A D 導入の基本理念と設計思想、また社内での C A D オペレーター教育の方法や、D B - C A D (データベース C A D) の概念や C A D の属性や共有化のしくみ、3 D C A D のメリットなどの内容でした。特に社員への C A D 教育では、インターネット、ホームページといったより多くの情報の中で各自のセンスを見出し、みがき、発展させていく方針が採られていました。その話の中で、C A D を使えばセンスの無い者でも図面やバースが描けるが、より多く経験することによりさらにセンスが身につく。センスのある者でも使わなければ衰退する。したがって常に自分を鍛えることだ。という言葉が非常に印象的でした。今、学校での製図授業そして C A D 製図を考えたときどうだろう。私たちはどうしても手書き製図が基本だ、という概念が頭を離れないわけですがこれから企業で働く、今の工業高校生にとって C A D 製図の在り方をよく考える時期に来ていることを痛感しました。

鹿島建設では現在ハンガリーのグラフィーツソフトと呼ばれる C A D ソフトが使われているそうですが、このソフトは導入にあたり大変苦勞されたもので、数々の条件をクリアでき将来性も考慮し、あらゆる面で対応が可能な、C A D ソフトだそうです。やはりこのあたりは大手建設企業だけであり、図面から構造計算、設計計画といった一環した C A D 設計システムの構想がなされていました。

講演終了後、この K I ビルの施設見学をさせていただきましたが、実に驚いたことにこのビルは業務効率を高めるために人間環境に基づいて建築された、インテリジェントビルだったのです。朝ホールに入った時、妙に落ち着いた気分にしたくれたのはこのためだったのかと、この時初めて知りました。このアトリウムは風が香り、蝶が舞う、そんな雰囲気の中での商談や設計打ち合わせといった、新しいオフィス環境を追求して設計されたそうです。空調はもちろん、音響、そして微香設計まで考慮されていて、さすが我が国トップクラスの建設会社のオフィスビルだ、と思わずにはいられませんでした。そのほかにも耐震設備、ルーフガーデン、周辺と外観調和など随所に人間と環境の調和を考えた設計がなされていました。

さて、そんなインテリジェントビルを後にして、午後の研究会場であります都立蔵前工業高校に向かいました。途中電車を乗り継ぎ、昼食を済ませ、無事会場に着きました。

午後からの講演は、三建設備工業㈱の鈴木氏による「施工会社の建築設備設計の現状」という事で、特に施工現場からみた設備設計についての内容でした。低迷が続く建設業界ですが、建築設備業者もいかにそこを抜け出すか懸命

の様子がわかります。もちろん設計管理においても主な基本テーマが掲げられ、一つひとつの工事が行われていますが、私たち人間と環境が最も親密な関係がこの建築設備関係だと思います。特に都会では排気ガスやスモッグなど、かなり早い時期からその対策に頭を痛めてきたとは思いますが、ここへきてあらためて地球規模での環境対策の必要性というものが叫ばれ、ISO規格、リニューアル、コージュネ、新冷媒など、設備施工会社での大変さは痛いほどよくわかりました。大気汚染、温暖化、オゾン層、環境破壊などと頭を廻らせていると、午後の講演も終わり本日最後の予定であります見学会となりました。

見学は江戸東京博物館です。4本の大きな柱と2本の大梁に支えられた建物はまるでロボットのような感じです。その中に吸い込まれるように、まるで300年の歴史を遡るかのような長いエスカレーターを昇ると、そこには日本橋と江戸の町並みが展開されていて、その時代にタイムスリップしたような錯覚さえ感じました。展示物がというよりは、建物の平面計画が順序よく整えられてその時代の特徴などが大変わかりやすく表現されていて、当時の江戸の都市（町）計画の概要を知ることができました。

研究会2日目。今日は見学会のみという事で随分と気持ちは楽になりました。都会にいく機会の少ない私には、このような見学会も有り難く、雷門、浅草寺などの建築物を準備していただいた資料を見ながら見学しました。そしてその後水上バスで普段とは違った目線にて隅田川に架かる数々の橋の歴史をたどりながら下り、美しい造園計画された浜離宮を見学しながら閉講式を迎え2日間の研究会を閉じました。

最後に、今回の研究会にあたり会場設営や資料作成など、ご苦勞されました担当校の先生方に対しまして感謝を申し上げます。雑筆ながら参加感想といたします。

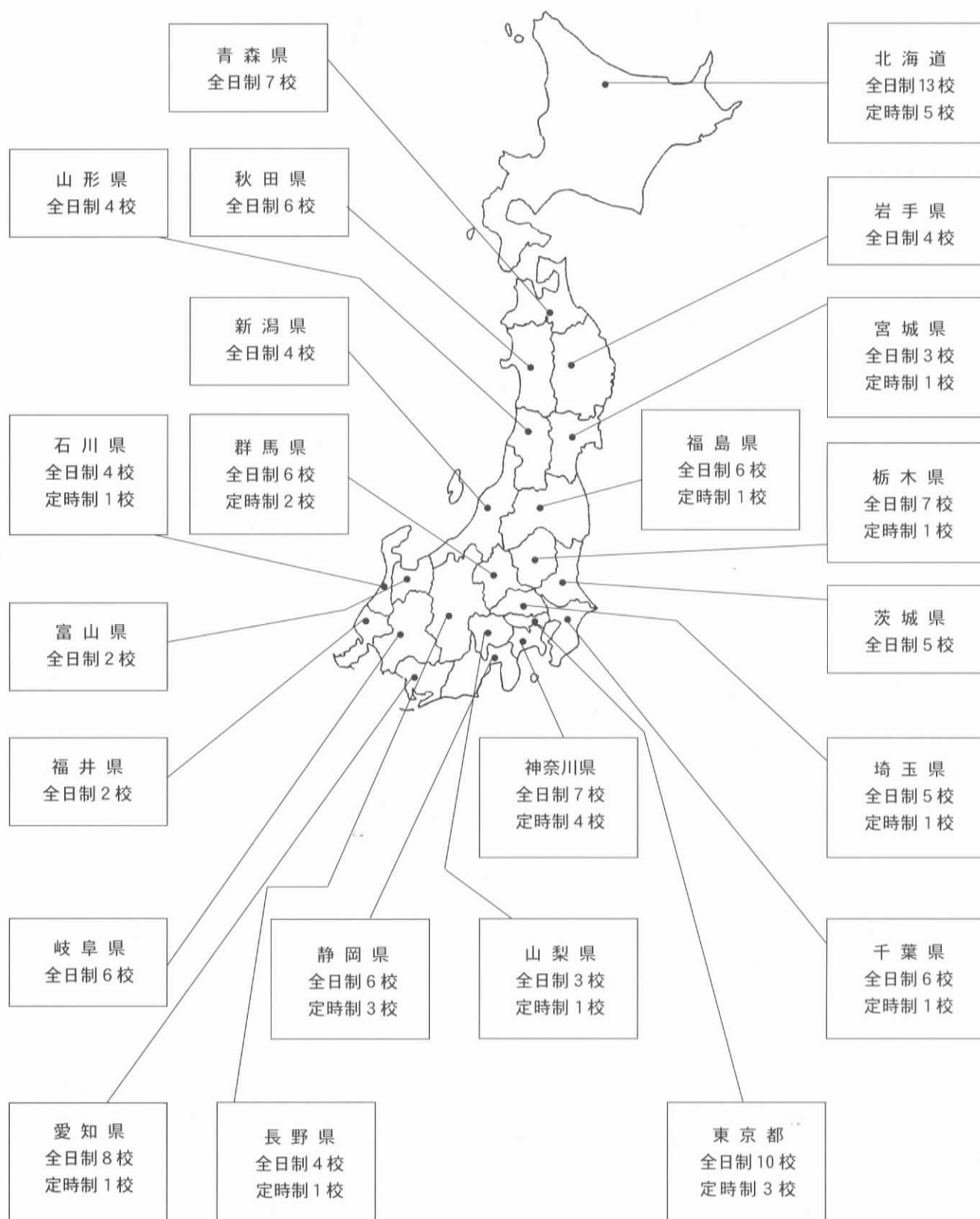


江戸東京博物館

會員校紹介

全日制 128 校

定時制 26校



北海道



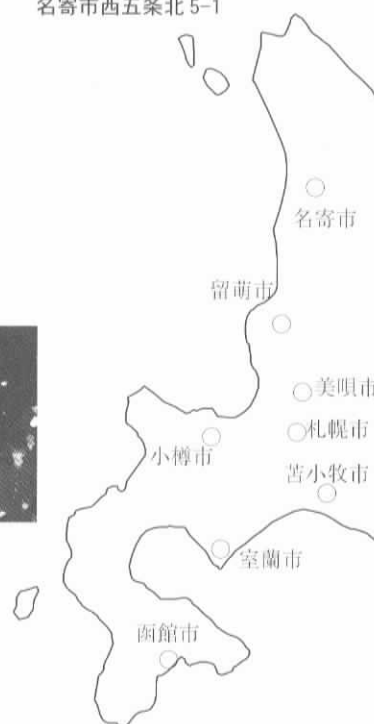
北海道小樽工業高等学校（全・定） 小樽市最上1-29-1



北海道名寄工業高等学校（全）
名寄市西五条北5-1



北海道札幌工業高等学校（全・定） 札幌市北区北二十条西13丁目



北海道留萌千望高等学校（全）
留萌市千鳥町4-91



北海道室蘭工業高等学校（全）
室蘭市宮の森町3-1-1



北海道苫小牧工業高等学校（全・定） 苫小牧市字高丘6-22



北海道美唄工業高等学校（全）
美唄市西二条北4丁目



北海道北見工業高等学校（全）
北見市東相内町 602



北海道旭川工業高等学校（全・定） 旭川市西神楽三線 5 号



私立旭川実業高等学校（全）
旭川市末広八条北 1 丁目



北海道釧路工業高等学校（全） 釧路市鶴ヶ岱 3-5-1



北海道函館工業高等学校（全・定） 函館市川原町 5-13



北海道帯広工業高等学校（全）
帯広市稲田町基線 14-7

青 森 県



県立青森工業高等学校（全） 青森市篠田 3-16-1



県立弘前工業高等学校（全）
弘前市馬屋町 6-2



県立十和田工業高等学校（全）
十和田市大字三本木字下平 215-1



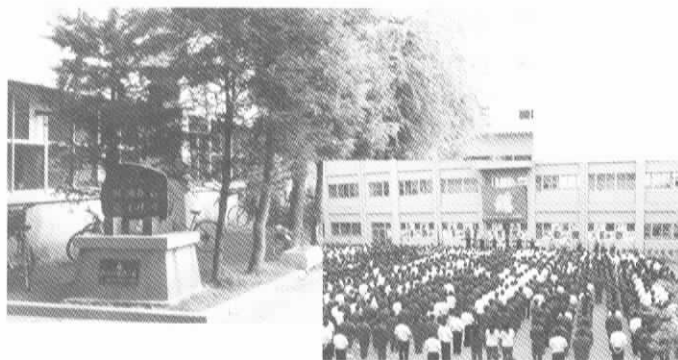
県立南部工業高等学校（全）
三戸郡南部町大字大向字佐野平 25



光星学院野辺地西高等学校（全）
上北郡野辺地町字枇杷野 51-6



光星学院高等学校（全）
八戸市湊町上新井田道 8



八戸工業大学第一高等学校（全）
八戸市白銀町右岩瀬通 7-10

岩 手 県



県立盛岡工業高等学校（全）
盛岡市羽場 18 地割 11-1



県立久慈工業高等学校
九戸郡野田村大字野田 26-62-17

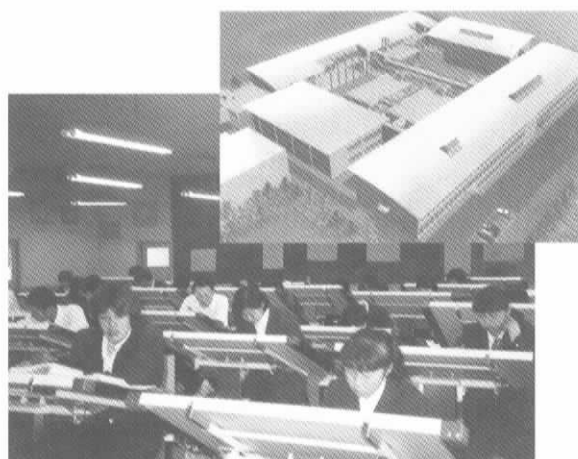


専修大学北上高等学校（全）
北上市新穀町 2-4-64



県立大船渡工業高等学校（全）
大船渡市立根町字冷清水 1-1

宮 城 県



県立白石工業高等学校（全）
白石市郡山字鹿野 43



県立古川工業高等学校（全）
古川市北町 4-7-1



市立仙台工業高等学校（全）
仙台市宮城野区東宮城野 3-1



市立仙台第二工業高等学校（定）
仙台市宮城野区東宮城野 3-1

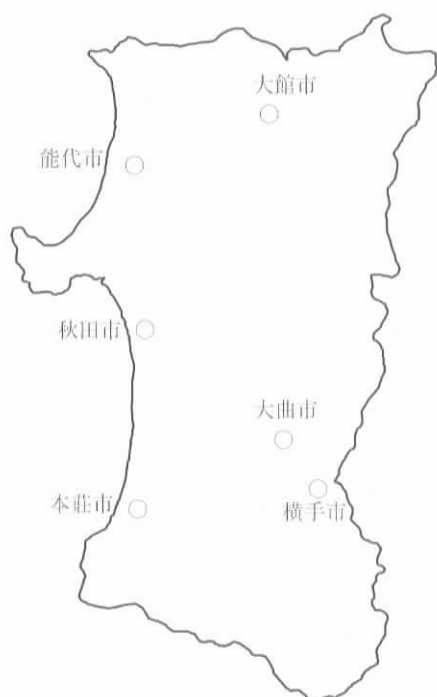
秋 田 県



県立能代工業高等学校（全）能代市盤若町 3-1



県立大館工業高等学校（全）大館市花岡町字アセ石 33



県立秋田工業高等学校（全）秋田市保戸野金砂町 3-1



県立大曲工業高等学校（全）大曲市若葉町 3-17



県立由利工業高等学校（全）
本荘市石脇字田尻 30

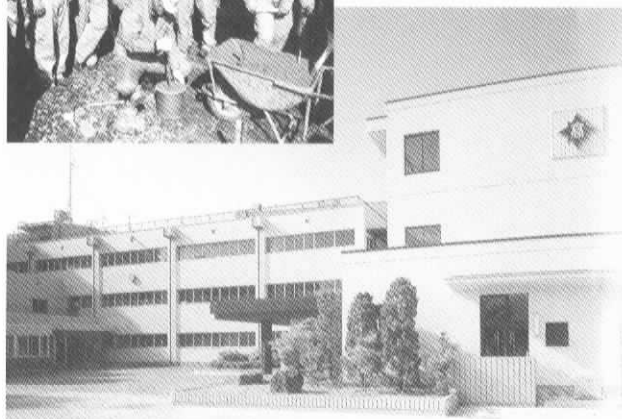


県立横手工業高等学校（全）横手市前郷二番町 10-1

山形県



県立鶴岡工業高等学校（全）
鶴岡市家中新町 8-1



山形電波工業高等学校（全）
天童市清池藤ヶ丘 556



県立米沢工業高等学校（全）
米沢市大字川井 300



県立山形工業高等学校（全）
山形市緑町 1-5-12



福島県



県立会津工業高等学校(全) 会津若松市徒之町1-37



福島高等学校(全) 郡山市御山町9-1



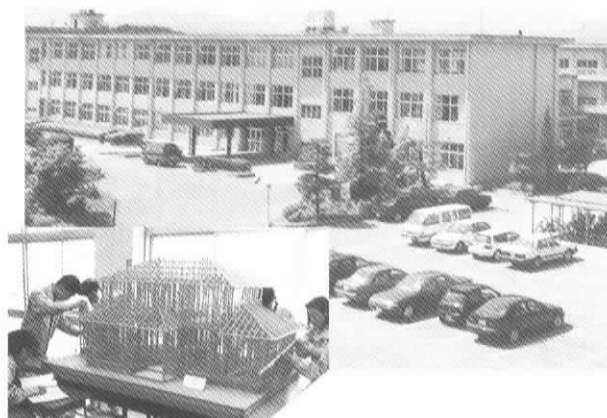
日本大学東北高等学校(全) 郡山市田村町徳定字中河原1



県立勿来工業高等学校(全) いわき市植田町堂の作10



県立福島工業高等学校(全・定) 福島市森合字小松原1



県立郡山北工業高等学校(全) 郡山市八山田2-224

栃 木 県



県立今市工業高等学校（全） 今市市荊沢 615



県立那須清峰高等学校（全）
那須郡西那須野町下永田 6-4



県立宇都宮工業高等学校（全・定）
宇都宮市京町 9-25



県立真岡工業高等学校（全）
真岡市寺久保 1-2-9



県立小山北桜高等学校（全） 小山市東山田 448-29



足利工業大学附属高等学校（全）
足利市福富町 2142



白 大学足利高等学校（全）
足利市伊勢南町 3-2

群馬県



県立長野原高等学校（全）
吾妻郡長野原町大字与喜屋 21-1



県立桐生工業高等学校（全）
桐生市西久方町 1-1-41



県立高崎工業高等学校（全・定）
高崎市江木町 700



県立前橋工業高等学校（全・定）
前橋市岩神町 2-23-22



県立藤岡工業高等学校（全）
藤岡市下戸塚 47-2



県立館林商工高等学校（全）
邑楽郡明和町南大島 660

埼玉県



人生はTry&Goal
の連続だ!!



県立熊谷工業高等学校（全）
熊谷市大字小島 820



県立春日部工業高等学校（全）
春日部市梅田本町 1-1-1



県立大宮工業高等学校（全・定）
大宮市本郷町 1970



武蔵越生高等学校（全）
入間郡越生町上野 167



県立川越工業高等学校（全）
川越市西小仙波町 2-28-1

茨城県



県立水戸工業高等学校（全）
水戸市元吉田町 1101



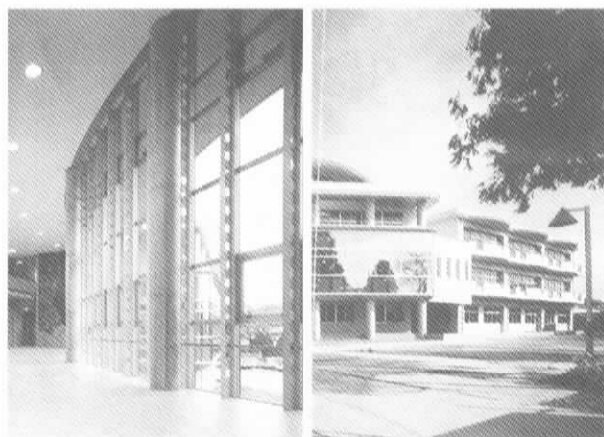
県立大宮工業高等学校（全）
那珂郡大宮町下村田 2296-2



県立下館工業高等学校（全）
下館市大字玉戸 1336-111

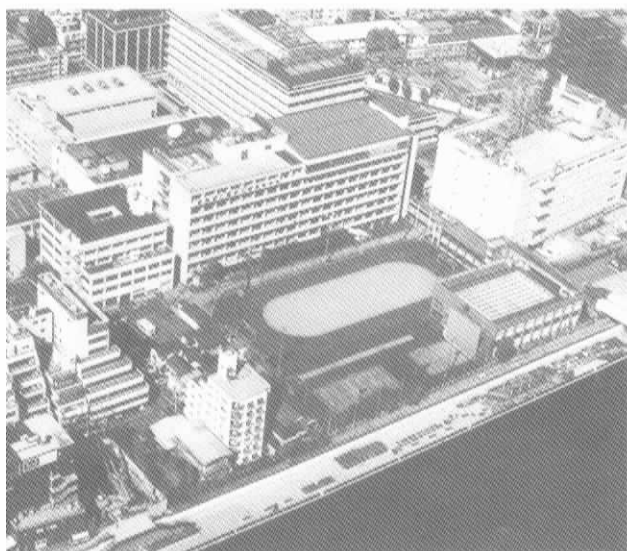


県立つくば工科高等学校（全）
つくば市大字谷田部 1818



県立土浦工業高等学校（全）
土浦市真鍋 6-11-20

東京都



都立蔵前工業高等学校（全・定）台東区蔵前 1-3-57



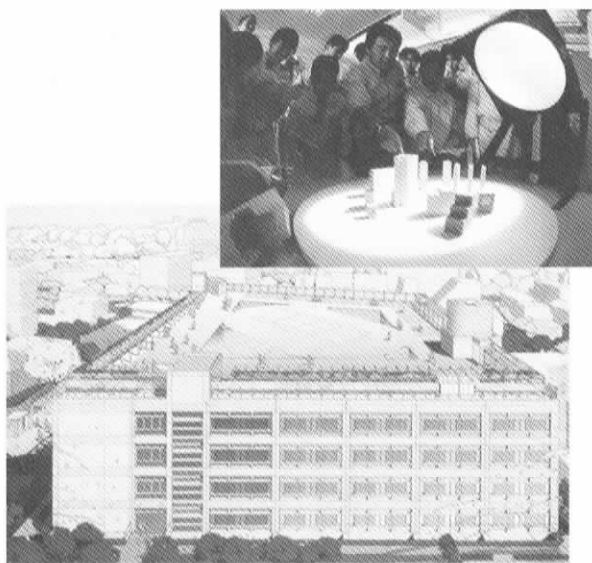
都立田無工業高等学校（全）
田無市向台 1-9-1



都立小石川工業高等学校（全・定）新宿区富久町 22-1



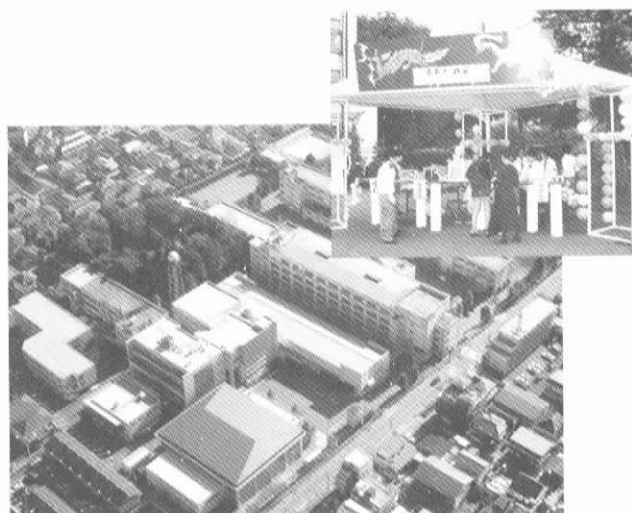
東京工業大学附属工業高等学校（全）
港区芝浦 3-3-6



日本工業大学附属東京工業高等学校（全）
目黒区駒場 1-35-32



安田学園高等学校（全）
墨田区横網 2-2-25



昭和第一学園高等学校（全）
立川市栄町 2-45-8



都立墨田工業高等学校（全・定） 江東区森下 5-1-7



都立葛西工業高等学校（全）
江戸川区春江町 4-9



関東第一高等学校（全）
江戸川区松島 2-10-11

神奈川県



県立向の岡工業高等学校（全）
川崎市多摩区堰 1-28-1



市立川崎総合科学高等学校（全）
川崎市幸区小向仲野町 5-1



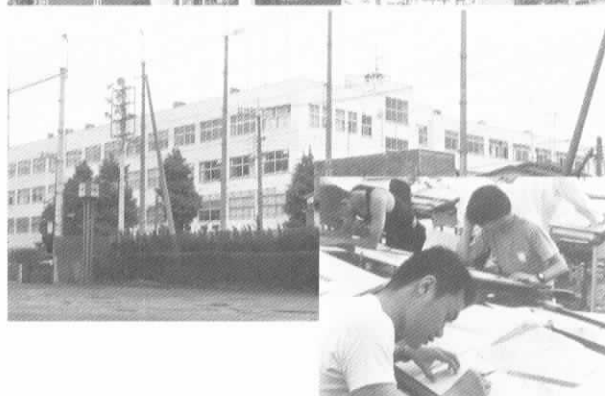
県立小田原城北工業高等学校（全）
小田原市栢山 200



県立藤沢工業高等学校 (全)
藤沢市今田 744



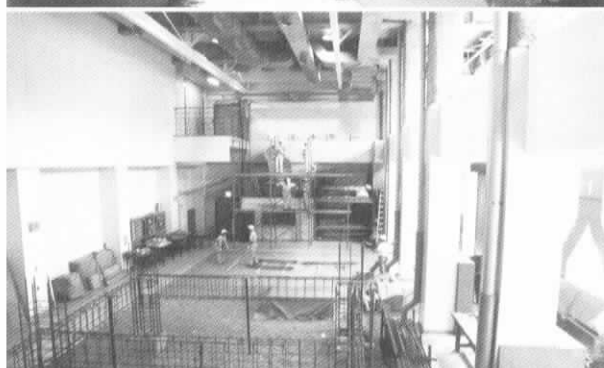
市立横浜工業高等学校（定）
横浜市中区翁町 2-9-10



横浜市立鶴見工業高等学校（全）
横浜市鶴見区下野谷町 4-146



横須賀市立工業高等学校（全）
横須賀市久里浜 6-8-1



県立神奈川工業高等学校（全・定）
横浜市神奈川区平川町 19-1

千葉県



県立市川工業高等学校（全）市川市平田 3-10-10



県立葛南工業高等学校（全）市川市平田 3-10-10



千葉経済大学附属高等学校（定）千葉市稲毛区轟町 4-3-30



県立京葉工業高等学校（全）
千葉市稲毛区穴川 4-11-32



敬愛学園高等学校（全）千葉市稲毛区穴川 1-5-21



県立東総工業高等学校（全）旭市鎌数字川西 5146

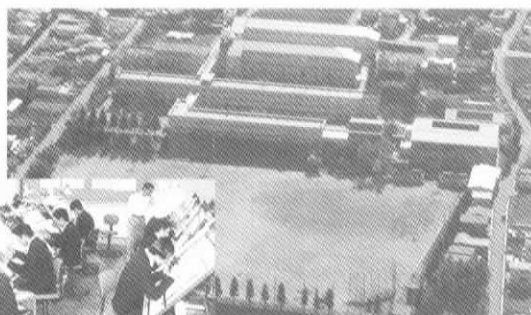


県立茂原工業高等学校（全）茂原市東郷 1901-3

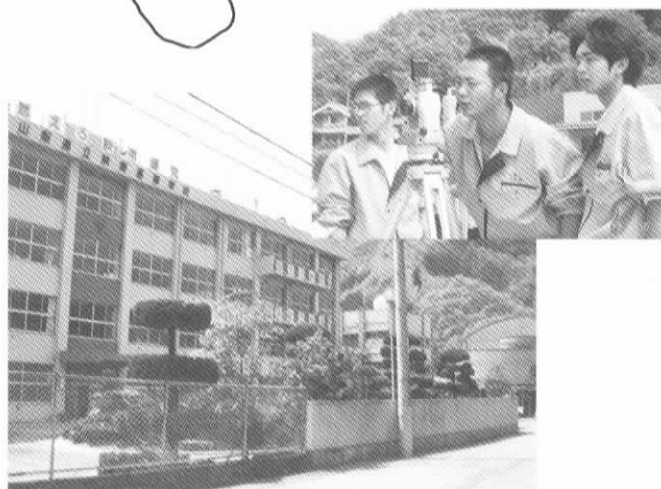
山 梨 県



県立甲府工業高等学校（全）甲府市塩部 2-7-1



県立北富士工業高等学校（全）富士吉田市新西原 1-23-1



県立峡南高等学校（全）西八代郡下部町三沢 2471



富 山 県



県立高岡工業高等学校（全）高岡市中川 1-1-20



県立富山工業高等学校（全）富山市五福 2238

新潟県



県立新潟工業高等学校(全) 新潟市小新西 1-5-1



県立高田工業高等学校(全) 上越市本城町 3-1



県立新発田南高等学校(全) 新発田市大栄町 3-6-6

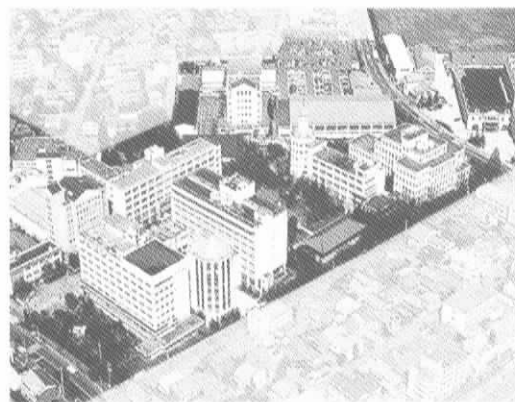


県立三条工業高等学校(全) 三条市東本成寺 13-1

福井県

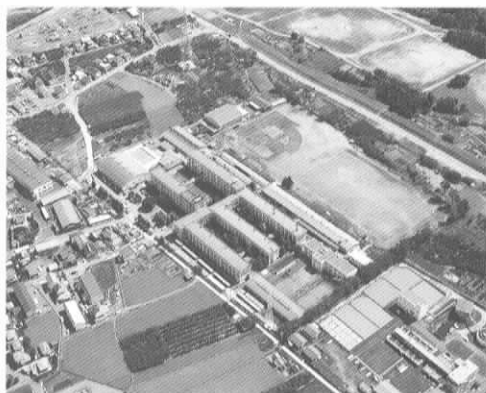


県立武生工業高等学校(全)
武生市文京 1-14-16



福井工業大学附属福井高等学校(全)
福井市学園 3-6-1

長野県



県立長野工業高等学校（全・定） 長野市差出南 3-9-1



県立池田工業高等学校（全）
北安曇郡池田町大字池田 2524

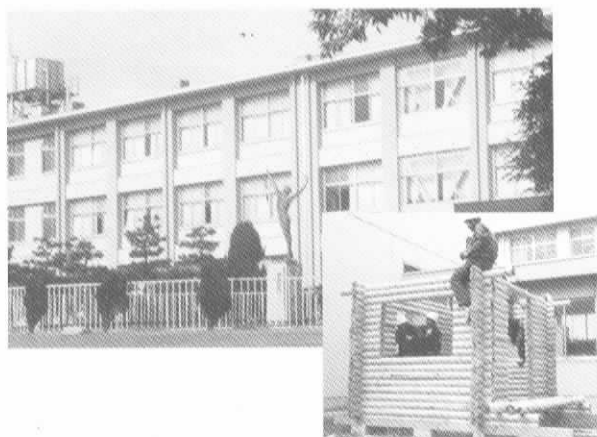


県立上田千曲高等学校（全）
上田市中之条 626



県立飯田長姫高等学校（全）
飯田市鼎名古熊 2535-2

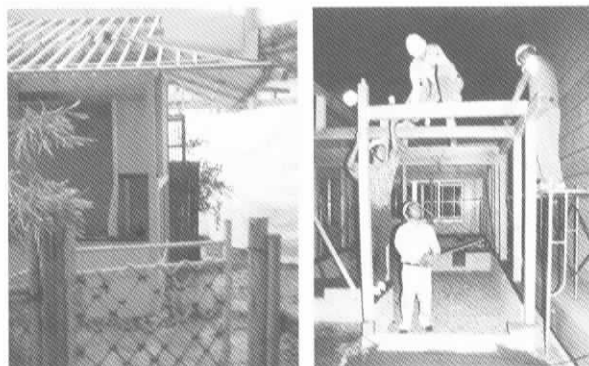
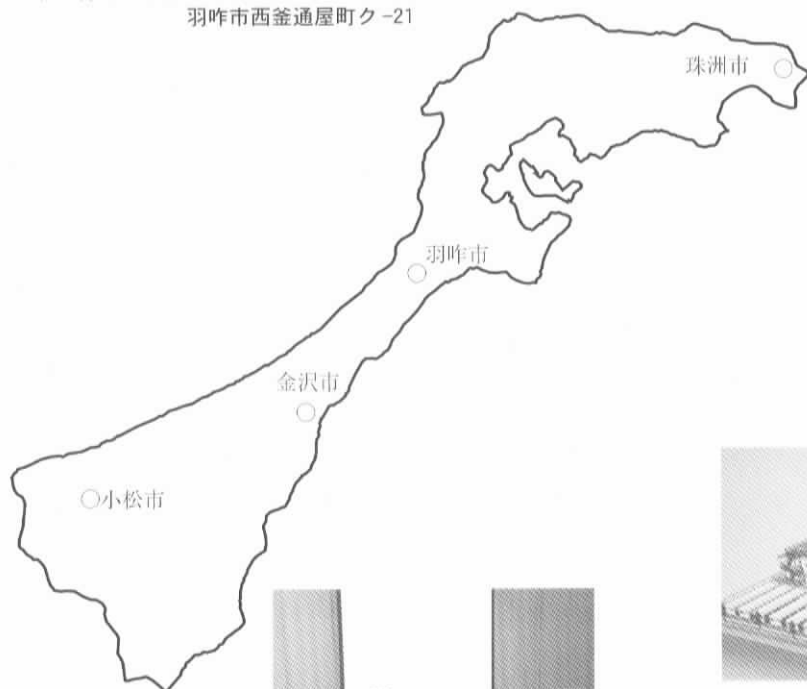
石 川 県



県立羽咋工業高等学校（全）
羽咋市西釜通屋町ク-21



県立珠洲実業高等学校（全）
珠洲市宝立町鶴飼 6-20



金沢市立工業高等学校（全・定）
金沢市畝田東 1-1-1



県立小松工芸高等学校（全） 小松市打越町丙 67

静岡県



県立天竜林業高等学校(全)
天竜市二俣町二俣 601



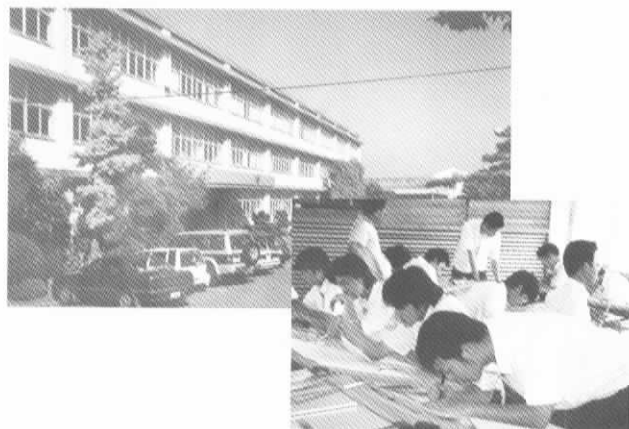
県立静岡工業高等学校(全・定) 静岡市太田町 24



県立浜松工業高等学校(全・定) 浜松市初生町 1150



県立沼津工業高等学校(全・定)
沼津市下香貫八重 129-1



県立島田工業高等学校(全) 島田市阿知ヶ谷 201



県立修善寺工業高等学校(全)
田方郡修善寺町牧之郷 892

愛 知 県



県立佐織工業高等学校（全）
海部郡佐織町淵高新田字陸島 1



名古屋市立工芸高等学校（全）
名古屋市東区芳野 2-7-51



名古屋工業高等学校
名古屋市昭和区円上町 22-38



県立一宮工業高等学校（全）
一宮市千秋町佐野字辻田 2112



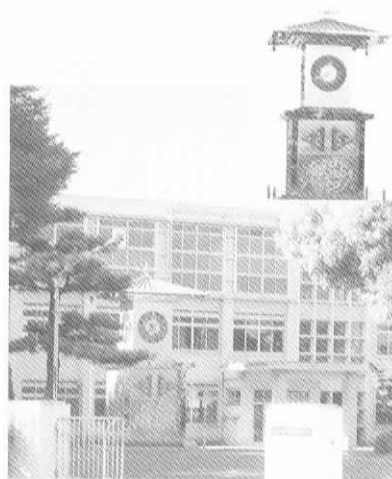
県立愛知工業高等学校（全・定）
名古屋市北区福德町広瀬島 350-4



県立半田工業高等学校（全）
半田市柊町 3-1

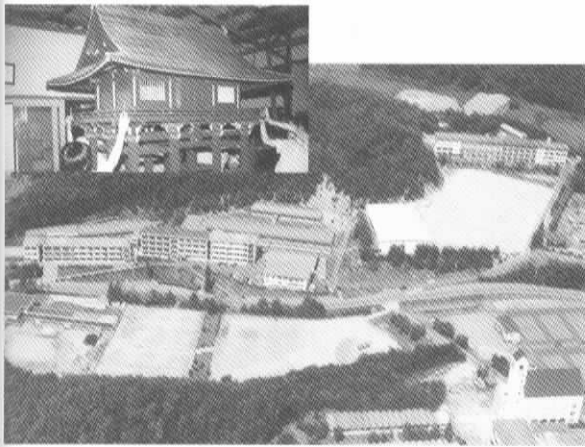


県立碧南工業高等学校（全）
碧南市丸山町 3-10

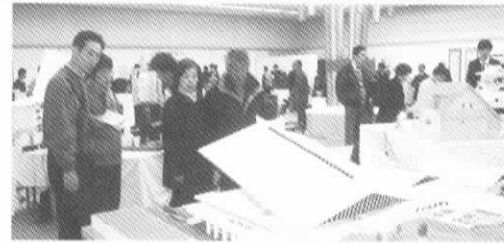
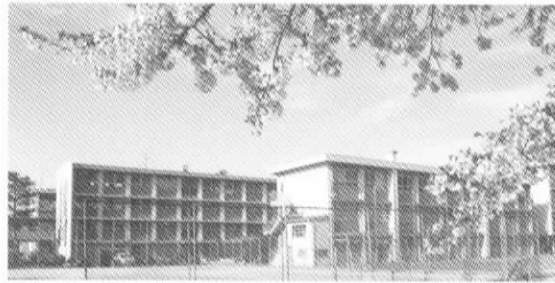


県立豊橋工業高等学校（全）
豊橋市草間町有地

岐阜県



関市立関商工高等学校（全） 関市倉知 4909-45



県立高山工業高等学校（全） 高山市千島町 291



県立岐南工業高等学校（全）
岐阜市本荘 3456-19



県立中津川工業高等学校（全）
中津川市千旦林 1521-3



県立大垣工業高等学校（全）
大垣市南若森町 301-1



県立可児工業高等学校（全）
可児市中恵土 2358-1

「分科会報告」

製図分科会報告

千葉県立市川工業高等学校 菊池 貞介

創立40周年記念神奈川大会（H2）から早くも10年が経ちました。その間、経済事情の大きな変動や教育界に向けて一層高まる関心と期待とに、専門教育に携わる私達も例外なく真剣な取り組みが求められてきました。当分科会も数々の課題に向かい、元主査の赤地先生や土田先生のご活躍により着実な歩みがしるされ、また前主査古賀先生に引き継がれて新たな展開を見ることができました。以下に活動のあらましを記しますが、任重く不足の点を先にお詫びして報告いたします。

◇製図コンクールの成果

赤地先生をはじめ当時の委員らでコンクール案を練り、翌年（S57）に記念すべき第1回の製図コンクール競技会が実施された。以来、製図分科会は実施母体として全面的に関わり、製図作品をととして会員各校の取り組みを広く紹介してきた。

地域の特徴が現れる作品に、設計製図の教育と豊かな地域性の結びつきにあらためて気付かされるものがあり、また参加のあった全作品に熱い手応えを感じている。現在では回数も重ね第18回を数える。コンクール委員の献身的な努力もさることながら、指導担当の先生方のご協力が戴けたからこそこの盛業に至ったものであると考えている。寄せられた生徒作品は別にまとめられる予定だが、他の研究会には見ることでない積み重ねられた成果に深い感動を覚えている。

◇調査・研究と実践

工業教育界の中でも当会の活動は、研究・実践の両面で高い評価を得ているように伺った。その一つが、タイムリーな課題を取り上げ会員諸氏への情報提供と意見交換の場を提供してきたことであると思う。

製図総則のJIS規格改正報告（S62、土田）や、CAD製図に関する調査（S63、塩澤）に示される「製図」教育の流れの変化をとらえた活動などが上げられる。早くも平成元年の夏期研究協議会では、CAD実技演習（大宮工）が開催されている。産業界の一層の合理化と標準化がその背景にあるが、これらを受けて、教科の指導事項の見直しを意識した検討課題が次々に取り上げられるようになった。基本となる教科書の製図例に関する調査（H4、塩澤・松本）などは、製図担当者の意識を高めたとともにいわば積極的な情報提供の姿勢を示している。ログハウスに関心が高まっていた頃には、ログテーブルを教材にしている実践校（H6、関東第一、松本先生）にお手伝いいただいて、汗を流した夏期研究協議会も開催し研修の幅を広げた。

◇情報の先取と共有

教育に導入されるコンピュータが増大する中で、CAIやCAD教育など新たな流れに対応する指導事例（H4、日工大付東京工：遠藤先生、他）を紹介し、さらに参加会員校の意見や実践例を引き出すべく、求められている検討課題の協議を継続した。CAD導入に際し有用な情報の不足が問題となっている点をとらえアンケート調査を実施（H4、菊池）、臨教審を受けた高校入試改革の声に、生徒の質的变化や指導法の改善などに関心も高まり、単位数削減とCADを含めた指導例（H5）について取り上げた他、委員校の事例報告を資料化（H6～、古賀）した。時宜を得た資料提供により、多くの出席者が分科会の限られた時間でありながらも大変熱心な討議を行えたのもよい思い出である。

当時の委員らの協議においても、学習指導要領改訂以来の単位数削減に加えて、学習力の幅が拡大する問題点や、建築製図への関心の低下、あるいは製図そのものに拒否傾向の顕著な生徒の存在などが上がり問題点をいかに共有して議論を深めるかが幾度も検討された。その成果が、秋田大会（H11）での本部事務局主催となった「思春期のころ

の理解」(山崎氏)と題する特別講演会を開催したことではないだろうか。

出張旅費の制限も深刻になり委員会の開催も厳しくなっているが、会員諸氏に少しでも有益な情報交換の場を提供したいと、工業教育界全般に広がる大きな問題も視野に入れながら現在も活動を進めてきている。

◇研究テーマと分科会協議

職業教育をとりまく厳しい見通しが印象に強かった長野大会(H9)を終えて、前主査古賀先生(墨田工)の御指導を仰ぎつつ諸課題の研究協議を進めることとなった。

北海道大会(H10)での積極的な発言を期待して、分科会テーマを「製図の指導現場における問題事例と対応策」と決定。委員校の事例研究報告を用意するとともに、参加希望者の全員にアンケート形式の事例報告書を持参するように依頼した。参加者には負担になったが、会場には予想を超える70数名が集い2時間を超える活発な協議となった。特に、教育全般にかかるLD(学習障害)の報告(土田/塩澤)や、北海道の概況(高崎、札幌工)、指導上の改善(金井、飯田長姫)、建築学会の動向(加倉井、敬愛学園)など積極的な実践報告と活発な発言は印象に深い。指導現場の問題意識が共有化され大変有意義な分科会協議となったが、これが秋田大会への展開につながったのである。

◇CAD実技講習会について

当番となった夏期研究協議会では、CAD実技講習「JWCADの基本操作の体験と授業への活用」(H10)を開催した。北海道から愛知県まで参加者45名、塩澤講師(関東第一)及び会場校の職員・生徒(市川工)を含め70数名が参加した。当初、初心者を対象としながらも経験者も多く進度に差が生じた一面もあったが、CAD製図の今後の進展を強く印象づけるものとなった。参加者の意見から、CAD講習会の継続とCAD製図コンクール開催の要望を取上げて検討を重ねた。

実技講習の継続を実現するのは予算的にもなかなか難しいものがあるが、翌平成11年度は、独自予算の特別講習会として開催を決定。快諾して下さった会場校(蔵前工)の先生方に大変お世



平成10年度夏期研究協議会CADの基本操作
市川工高

話になって実現した。塩澤委員を講師にJWCADの操作体験と、最適なコンピュータ環境を構築した堀内先生(蔵前工)の案内で、CAD(DRA-CAD for Win; 株式会社構造システム)及びCGソフト(Piranesi; 株式会社インフォマティックス)を用いた応用展開の方向を探り、CAD製図の今後を考えるよい契機を得た。また、中山先生(金沢市立工)からは、手づくりのJWCADマニュアルもいただき、そのご努力に大いに刺激を受けたことを付記したい。

この特別講習会の開催に当たっては、計画分科会主催の夏期研究協議会と時期的に近接した日程となり、また参加者数の増減による経費の問題が心配されたが、36名に達し内容も充実した研修会となった。どの学校でも出張研修に出にくくなっているが、少しでも機会が得られるよう関係方面と調整を進めている。

◇新しい教育課程への期待と建築設計教育

平成11年度は、新指導要領の告示を前にして、「今後3年先、5年先のことを考えて…」と現場での問題点を取り上げながら難しくとも楽しい討議を重ねた。

事例研究等で既に指摘されている生徒の質の変化や不本意入学、また専門単位数の縮減傾向の問題は、ともすると指導の限界を感じさせるものであった。一方、新指導要領にみる科目選択の幅を広げる方向性や「総合的な学習の時間」の多面的なアプローチは、教育課程の枠組みを大きくとらえ直しつつテーマの自由度を一層高めていると考えられる。分科会内では、社会的に関心の高まっている「高齢化」、「バリアフリー」、「環境」への視点が、生徒にとって親しみやすく楽しい建築教育を考えることにつながっていくテーマとして捉えた。

秋田大会の研究協議会では、「楽しくなる製図教育」のテーマのもと工夫を重ねた指導例をいくつも見る事ができた。特に「建築と子供たち」と題する小学生を対象にした実践報告（加倉井、敬愛学園）は、建築教育の可能性を広げていくものとして強く印象に残り今後の展開が注目される。

一例として、車椅子に乗って廊下を移動するだけでも、体の不自由な隣人への眼差しと、建築的には動作寸法の理解が確実なものになりその後の設計製図に大切な知識をもたらすもので、「建築」で考える楽しさを顕しているように思う。科目「建築設計」の豊かさを感謝せずにはおれない。今後も、他の学科にはない「楽しい建築教育」を考えていきたい。

◇CAD作品展の誕生とあゆみ

ここ10年の特徴的なテーマの一つにCAD教育がある。先行する機械分野とは異なる部分が多々あり、建築分野での研究が必要となっていた。

平成7年度千葉大会では、事前に参加者へ資料の用意（「自校の製図教育課程の実施状況」）をお願いし、当日の資料交換では単位数減に対処する方途を探った。その中にCADに対する関心の高まりをとらえて各校の実施作品を展示する場の必要性を確認し、担当者の指導のねらいや技術的な問題の意見交換を進めるべく製図分科会内にCAD小委員会を設置した。理事会の承認を得て作品募集を開始し（H8、4月）、東海ブロック大会に記念すべき第1回CAD製図作品を展示し発表することができた。

参加した8校23作品と指導担当者からのメッセージに、使用しているソフトの特性や限られた指導時間の問題を乗り越えた積極的な姿勢を感じることができた。東大寺南大門の作図（南部工）や風土性を色濃くあらわした住宅（新越中の家、富山工）、カラーパス作品（金沢市立工）など、目を引く作品が初回から集まり担当スタッフを驚かせた。このときは、予算的な裏付けも無く、必要経費のやりくりと担当者のボランティアに頼りつつ開催に漕ぎ着けることができたが、一步前進の喜びを得られなによりだったと思う。

第2回の長野大会（H9）会場を飾った9校18作品は、バリアフリーを意図した小学校（白石工）、野外施設のコンペ作品（関東第一）、ライトの落水荘立面図（富山工）など昨年に続く力作がそろった。このような作品を会場展示だけに終わらせるのはもったいないと考え、空き時間を工夫して手作りの作品集にまとめ、関係者に発送（H10）している。

CAD作品展の第3回目（H10、長野大会）は、新たに参加した学校も含め参加9校19点の作品となった。作品は会場内に北海道の力の入った手書き製図作品と並べられ注目を集めたが、この年は、フリーソフトのJW_CADを自在に使用した12作品（高田工、関東第一、春日部工など）と3Dの建築専用CADを高度に用いた作品（市川工など）が目立ち、各校のCAD担当の先生方の関心の高さと応用展開への熱意が十分に伝わってくるものであった。JW_CADに対する関心の高さを受け、そのまま製図分科会主催の夏期研究協議会「JW_CADの基本操作の体験と授業への活用」に移されていった。



東大寺南大門（青森県立南部工高 小笠原教人 他）



平成9年度長野大会CAD製図の展示（ホテル国際21）

◇本部事業となったC A D作品展

会場でのご意見や担当の先生方から寄せられた声に励まされて、C A D作品展を分科会事業から本部主催事業に位置づけ、第4回目（H 11、札幌大会）を迎えた。協賛企業のご協力も得られて、意欲喚起を求める意見に応えるよう出展された全作品に奨励賞等の賞状授与を実施する運びとなった。要領の一部を改訂し、校内選考を前提にして各校2点までの出展とする厳しい条件にもかかわらず、10校16作品の出品があった。展示発表の都合から締め切りまでの期間が短く、また卒業設計で取り組んだ作品も対象にしたいと考えたため、担当の先生方にはご迷惑をかけてしまったが、出展作品はできるだけ多方面からその成果を評価する事を考えて、プランニング賞やデザイン賞など作品の特長を各賞の名称に加味させるよう企画した。

協賛企業からの賞には、副賞としてC A Dソフトのプレゼントがあり、また作品を展示した会場では大会参加者に投票を求め大賞を選出した。投票の結果、大賞のC A D教育奨励賞は「KINDER GARTEN」（阿曾沼 義典；市川工高）に決まった。一部、賞状の発送など事務手続きに改善を要することとなったが、これからも、こつこつと取り組んでいる生徒の努力作品に、少しでもスポットライトが当たれば素晴らしいと考えている。

地域の技術者として、「建築」の面白さを身に付けた卒業生たちの活躍が見られることを願い、委員一同これからも精進を重ねたいと思います。会員の皆様から寄せられるたくさん声こそ、その原動力となっておりますので、より一層のご意見をお願い申し上げます。



平成 11 年度特別講習会
J W-C A D の操作体験
平成 11 年度 7 月 27 日
都立蔵前工高



計 画 分 科 会 報 告

神奈川県小田原城北工業高等学校 大 庭 孝 雄

創立 50 周年を機に最近 10 年の「計画」分科会活動を顧みるとき、「建築法規」を抜きには語れない程、研究活動の主流を占める結果となった。

「建築法規」は、平成元年度から平成 8 年度までの 7 年にわたる長い年月にわたり、計画分科会の活動の中心をなしてきた。かつて、指導要領の科目から除かれた「建築法規」が、平成 6 年度の学習指導要領の改訂によって、新科目として復活をとげることになったからである。

どちらかと言えば、建築学的な面から阻害されてきた法規の復活は、その実際的な指導法の研究やより所となる教材の必要を大きくクローズアップさせた。

そこで、まず、教材の作成が急務となって計画分科会では、年々の法改正を追いかけながらの「法規の手引書」の編集作業に悩殺されることになった。(正確には、昭和 63 年 4 月 26 日に、仮称「法規の手引書」執筆計画および刊行につきまして教材委員会に提示し、年度総会で承認された。)編集作業は分科会委員を中心に教材委員会の協力を得ながら、平成 4 年の 7 月の最終草稿の完成を目途に鋭意すすめてきた。

ところが、脱稿間際の平成 5 年には、建築法規の大改正が予告され、更には、平成 8 年度に向けて新教科書「建築法規」の発行が予定されることになった。

このことから、「法規の手引書」の刊行を、法改正や教科書の発行後に延期せざるをえない事態になった。このような紆余曲折を経ながらも、実に粘り強い編集作業によって、平成 7 年の 3 月には、新たな仮称「建築法規の入門書」として、教材委員会に草稿を提示することができた。

このようにして、1996 年 3 月 21 日付けで、(株)市ヶ谷出版社より「建築法規学習ノート」として、陽の目をみるに至ったのである。

次に、最近の分科会活動の動向を、年度総会における研究協議会や、この 10 年間に計画分科会が担当した 3 回の「夏期研究協議会」の概要を列挙して、回想してみたい。

●平成 3 年度：第 41 回総会・研究協議会（宮城大会：松島海岸ホテル大観荘）

協議題「新設科目・法規の指導法について」

●平成 3 年度夏期研究協議会（横浜：神奈川県勤労会館、参加者 87 名）

建築法規講演・演習、C A D 実演、建築史「横浜の近代建築」講演、横浜の建築物見学

●平成 4 年度：第 42 回総会・研究協議会（新潟大会：月岡温泉ホテル清風荘）

協議題「建築法規の学習指導について」

●平成 5 年度：第 43 回総会・研究協議会（茨城大会：大洗パークホテル）

協議題「建築計画系の課題研究について」

●平成 6 年度：第 44 回総会・研究協議会（山形大会：滝の湯ホテル）

協議題「新教育課程における建築計画の指導内容の検討」

●平成 7 年度：第 45 回総会・研究協議会（千葉大会：ホリデーイン東武成田）

協議題「建築施工技術者試験の指導法について・建築法規の指導法について」

●平成 7 年度夏期研究協議会（埼玉：県立川越工業高等学校、参加者 80 名）

「建築法規と教科書」「建築基準法と都市計画」「川越の町並・文化財」講演・見学会

●平成 8 年度：第 46 回総会・研究協議会（愛知大会：名古屋国際会議場）

「建築法規学習ノート刊行の報告」「研究課題：建築史の指導方の取組みについて」

●平成 9 年度：第 47 回総会・研究協議会（長野大会：ホテル国際 21）

協議題「厳選に伴う内容の整理・建築史の指導法について」

- 平成10年度：第48回総会・研究協議会（北海道大会：ホテルライフフォート札幌）

協議題「厳選に伴う内容の整理：建築計画2単位履修の場合の指導内容について」

- 平成11年度：第49回総会・研究協議会（秋田大会：秋田ビューホテル）

協議題「二級建築士受験対策と建築計画の学習指導法について」

- 平成11年度夏期研究協議会（東京：都立蔵前工業高校、参加者44名）

建築意匠設計・設備設計講演、鹿島K Iビル・東京江戸博物館・浅草寺・浜離宮見学

このように、最近の10年の動向は、何と言っても「建築法規」を巡っての活動に終始した感があるが、一方では、「建築計画」や「建築史」に割かれる単位数の減少が進むなか、如何なる指導法が効果的か、常に研究活動のテーマとして追い求めてきた。

今後は、2003年の学習指導要領の改正に向かって、今だから経験のない、極めて多様なカリキュラム編成に対応できる建築教育すなわち「21世紀の建築教育」の在り方を巡っての研究に、分科会としてもその一翼を担う気構えで臨みたい。



構造分科会報告

東京都立葛西工業高等学校 大久保 健

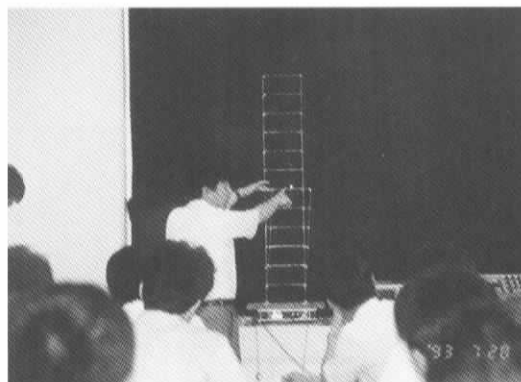
平成4年より、平成11年9月までの構造分科会活動状況の概略を報告します。構造分会主査は佐藤哲先生（市川工）本間正明先生（田無工）、そして11年度より大久保（葛西工）が担当しています。

- 平成4年度見学会（平成5年2月17日）「ららぽーとスキードーム・ザウス」の見学会を平成5年2月17日（水）14時に行った。見学会は、まず益山賢也所長より全体説明をいただき、その後、現場を見学した。規模的には、幅100m（先端68m）長さ497mと非常に大きく、平成5年7月オープンとのことである。

- 平成5年度総会、研究協議会（茨城大会）構造分科会報告。

構造分科会参加者29名、益野英昌委員（仙台第二工）より「課題研究の試み」のテーマで、実践報告がなされた。

- 平成5年度夏期研究協議会（平成5年7月27日（火）～28日（水）「振動模型の製作とそれを利用した振動実験」都立葛西工高建築科の先生方の強力な支援を得て開催かつ円滑な進行することができました。冷房完備の新校舎で快適な研修を行うことができた。また、参加者51名の先生方も、限られた時間内で献身的な協力体勢のもと模型作りに取り組まれた。



● 平成5年度見学会（平成6年2月4日（金））

江東区江東公会堂改築工事現場見学会、参加校19校、会長も含め33名の参加をもって盛大に行うことができた。
（株）久米建築事務所都世子一成工事監理室理事より、埋立地である軟弱地盤への対応策として①RC連続壁・ソイル柱列による山留及び地盤改良工法②逆打工法による駆体施工③地下鉄からの振動防止に対し、本駆体では防振ゴム、発泡ポリエチレンの使用、小ホール等では浮床工法④浮力に対し、カウンターウェイトや透水管の設置⑤メタンガス対策等について説明がなされた。

● 平成6年度総会・研究協議会（山形大会）構造分科会報告（参加者35名）

共通テーマである「新教育課程における、各科目の指導内容の検討」について協議を行った。

学習指導事例の発表（3題）

①川越工高・西村委員：静定ラーメンの応力

②田無工高・本間委員：構造設計に用いる単位＜S I単位＞

③市川工高・佐藤委員：コンクリートの中酸化現象と品質

● 平成6年度見学会（平成7年2月8日（水））

社団法人 東京建設業協会事業部、業務課長、石川泰雄氏のお世話を戴き東京オペラシティ建設工事現場見学を参加校17校24名で行う。見学は、地上24階部分の駆体工事関係、8階部分の仕上工事関係及び地下4階部分から基礎工事関係の各要所について行えた。殊に基礎工事においては1.1m厚の耐圧板とそれを含め6.2mにも及ぶ基礎の配筋状況をタイミングよく見学できた。

● 平成7年度総会・研究協議（千葉大会）構造分科会報告（参加者37名）

・建築施工技術者試験の指導法について

・興味が湧く構造関係の課題研究として「1995年兵庫県南部沖地震、1994年三陸はるか沖地震の報告を使った生徒に興味をわかせる導入について」

● 平成8年度見学会（平成9年2月7日（金））

国立西洋美術館「21世紀ギャラリー」建築工事及び本館免震補強工事現場における見学を参加者39名をもって実施した。今回「21世紀ギャラリー」を増設工事中に阪神淡路大地震に関連して免震補強工事が追加された。

● 平成9年度総会・研究協議会（長野大会）構造分科会報告

①参加者25名の紹介および構造関係授業におけるパソコン利用状況について報告。

②「単純梁を解く」をテーマとしたモデルソフトの発表川崎（墨田工）、榎本（安田学園）両先生。

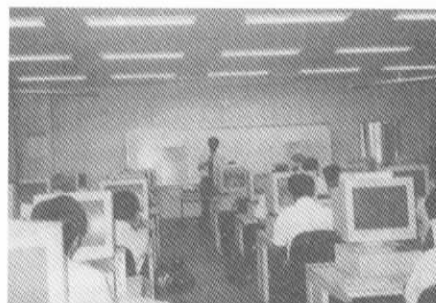
③JASS 5改訂の要点について発表。

● 平成9年度夏期研究協議会（平成9年7月24日（木）・25日（金））都立田無工業高等学校にて開催。

第1日：QUOVISの操作体験。

第2日：各種メニュー体験QUOVISの操作体験の続き、英語学習ソフト体験。「単純梁を解く」をテーマとした川崎（墨田工）、榎本（安田学園）両先生によるモデルソフトの体験を行った。

パソコンによる学習ソフト製作のための基礎操作（ソフマップ社「QUOVIS」の活用による）について、ソフマップ社、諸橋部長、三宅課長、藤井様のご助力ご支援及び構造分科会、田無工高建築科のご協力のもと、参加57名にて終えることができました。



● 平成10年度総会・研究協議会（北海道大会）構造分科会報告（参加者32名）

共通テーマ「厳選に伴う学習指導の具体化」を受け構造分科会で建築構造設計について最小単位として2単位で指導できる必要最小限の年間指導計画案をまとめた。

a. 資格取得（二級建築士等）受験にする基本事項を含む。

b. 「建築構造設計」として理解すべき最低限必要とされる内容のみとする。

全参加校より現状をふまえた報告、ご意見をいただいた。

● 平成11年度総会・研究協議会（秋田大会）構造分科会報告（参加者30名）

共通テーマ「21世紀の建築教育の在り方」を受けサブタイトル「建築構造設計の基礎・基本とは何かを考える」としてアンケートによる回答をまとめ分科会に提案し、意見交換を行った。

参加者よりアンケートを受け委員会でまとめていき、今後の建築構造設計の指導に役立てていきたい。

● 平成11年度実技講習会の研修会とも委員10名他5名の先生方で、講師片桐勝（片桐工務店社長）先生の指導、講演で行われた。



施工分科会報告

日本工業大学付属東京工業高等学校 内 藤 美雪丸

1) 施工分科会の構成と運営 平成3年(1991)～平成12年(2000)

施工分科会は、年間4～5回の委員会を開催しております。委員は会議に参加しやすい関東近県の施工や施工実習を担当されている先生方をお願いして居ります。会議は出来るかぎり委員校を順にまわりながら開催しています。それぞれの学校の施設、設備を視察しながら地域性に触れ、交流する事が会の発展につながると考えるからです。又、新工法や建築現場の雰囲気に触れることも重要なので、現場見学会も合わせて行うように心掛けて居ります。

成果は総会・研究協議会(分科会)の資料および建築ニュースや、4年に1回施工分科会で担当する夏期施工実習研究協議会で報告しております。

2) 10年間の主な活動内容

①「課題研究」の実践報告

課題研究に取り組んでいる学校がまだ少なかった頃、委員校で実践したさまざまなテーマについて指導案や時間配分の実践例を提案しました。又、発表会の企画や生徒たちの報告書をまとめた「課題研究概要集」も提案しました。

②夏期施工実習研究協議会

この10年間に2階の施工分科会主催の研究協議会を開催致しました。平成4年の施工実習研究協議会は、それ以前の3回の研究協議会の同一線上にあり、内容を充実発展させたものであり主な内容は・木造実習・鉄骨現寸図およびハイテンションボルト実習・鉄筋組立実習・墨だし実習・水盛りやりかた実習・測量実習を2泊3日で実施致しました。現場での経験のない先生には苦手とされる施工実習の指導法について、参考になったと言う声を多く聞きました。

平成8年度には度々、アンケート調査で希望が出ていた施工図作成と積算の実習指導法について実施致しました。実社会で活躍されている業界の方に講師をお願いした研究会でした。

③建築施工技術者試験の参考資料作成

建築施工技術者試験の施工分野に関して、施工の授業の中で利用出来るように内容を精選した資料を発表しました。

3) 思い出の夏期施工実習研究協議会の準備作業(於 武蔵越生高校・軽井沢研修所)

平成4年8月の猛暑の中、2日前より準備に取りかかった。当日は7テーマを時間内に実施するために水盛りやり方の水ぐいは予め打ち込んでおく必要があり、かけやを持ち出したが現場は火山れきの土地の為まったく打ち込めない。用意してきた鉄棒とハンマーで地表下の石を割りながら杭を打ち込んだが、1本の杭に30分もかかる程であった。また各委員校から持ち込んだ資材や道具は4トンにも達し、麦わら帽子にタオル姿の委員の設営に汗を流しすぎた脱水症状の体に夜のビールがしみ込んだ事が思い出されます。



平成4年施工実習研究協議会
水盛りのやり方(水ぐいの穴あけ)



平成4年第5回施工実習研究協議会
(新しく加わった測量実習)

4) 過去の夏期施工実習研究協議会

実施年度	テーマ	主 内 容	会 場
昭和47年	施工実習	木構造・鉄骨原寸図・ブロック造・RC造墨出し	横須賀工高
昭和49年	施工実習	木構造・鉄骨建て方・ブロック造	盛岡工高
昭和54年	資格取得	足場組立解体作業主任取得	横須賀工高
昭和59年	施工実習	木構造・鉄骨原寸図・RC造墨出し	向の岡工高
昭和63年	施工実習	木構造・鉄骨原寸図・RC造墨出し・鉄筋組立 ・水盛遣方	東京工高・赤倉研修所
平成4年	施工実習	木構造・鉄骨原寸図・RC造墨出し・鉄筋組立 ・水盛遣方・測量	武蔵越生高・軽井沢研修所
平成8年	積 算	積算・施工図	神奈川工高
平成12年	施工実習	クレーン取扱い講習会（予定）	石川島技術教習所



昭和47年第1回施工実習研究協議会
(於 横須賀工高)



昭和47年第1回施工実習研究協議会
RC造 墨出し実習 (於 横須賀工高)

※委員会として実践を踏まえた研究を進めて参ります。会員の皆様のご指導、ご鞭撻をお願い致します。

委員会報告

教材委員会の流れ

教材委員会委員長 東京都立蔵前工業高等学校
松 井 貞 二

この度、本会創立50周年の記念誌に載せるべく原稿の依頼を受けましたが、委員会の活動等についてどのようにまとめればよいのか戸惑いましたが、幸い1956年からの「建築教育ニュース」が本校に保管されておりましたので参考にさせていただき、取りあえず現状報告とこれまでの流れを探ってみました。

現在、教材委員会は、本会副会長（2）、及び製図・計画・構造・施工の各分科会主査と事務局長の7名で構成されており、常任理事会や主査会が行われる日を利用して委員会が開かれております。その主な活動内容は、各分科会関係の出版物についての書類・印税配分などの監理です。現在は、『新版建築の基礎問題』、『建築構造図集』及び『建築法規学習ノート』の3冊を扱っておりますが、今年度から『建築施工技術者試験テキスト』の印税の収入も見込まれております。

さて、「建築教育ニュース」から教材委員会の流れを遡ると《教材委員会》として名乗ったのは、昭和43年度、4分科会（現在の製図・計画・構造・施工）になったときではないかと思われます。

1970年11月発行の「建築教育ニュース」に、昭和44年度の行事報告として正式に教材委員会の名称が使われ、昭和45年度事業計画の中に、教材委員会メンバーが発表されております。そのときの記録をそのままご紹介いたします。

昭和44年行事報告

5. 出版・その他

昭和44年度会員名簿

就職全科（教材委員会編・出版昭晃堂）

昭和45年度事業計画

5. 教材委員会

委員長 五十嵐（東工大付）

理事長 井上（墨田工）堀越（小石川工）森安（田無工）山口（蔵前工）

宮島（安田学園）山田（関東商工）岡登（関東）白石（市川工）

高橋（吉）（神奈川工）高橋（一）（神奈川工）加藤（川崎市立）

福馬（大宮工）

となっています。

さらに遡ると、昭和36年の『建築教育ニュース』には、《演習書委員会》の名称がみられます。また、初期の「建築教育ニュース」を読みますと、本会が発足した当時から、会員の先生方が生徒のための学習手びき書や指導書作成に熱意を燃やされていた様子が伺えます。まさに、教材づくりが教材委員会の歴史であったことが強く感じられます。

本会が創立50周年を迎えるにあたり、教材員会としてあらためてやらなければいけないことを考えさせられた次第です。

編集委員会をふりかえって

東京都立墨田工業高等学校 古賀 昌之

本研究会の編集委員会は「会員名簿」を総会時に「建築教育ニュース」を11月発行・送付業務を担当しています。それまで担当されていた加藤尚（川崎市立）、堀越喜与志（小石川工）、松本延夫（葛西工）先生方の後を引き継いできました。

1987～ 古賀昌之（東工大附工）池田幸正（川崎市立工）遠藤勇（東京工）中尾太郎治（葛西工）

1989～ 古賀（墨田工）池田 遠藤 大間俊彦（関東第一高）中尾

1991～ 古賀 池田 遠藤 大間 鈴木健（葛西工）

1993～ 古賀 遠藤 大間 菊池貞介（市川工）鈴木

1994～ 大間 遠藤 菊池 古賀（墨田工）鈴木

1999～ 鈴木（田無工）伊藤和生（葛西工）遠藤 大間 武田明広（市川工）古賀

建築教育ニュース

建築教育ニュースは本研究会の年間活動の記録が中心の会報誌で、次のような内容で構成されています。

- | | |
|---------------------------|--------|
| 1. 会長あいさつ | 会長 |
| 2. 前年度事業及び会計（決算）報告 | 事務局 |
| 3. 当年度事業計画・会計（予算）及び役員名簿 | 事務局 |
| 4. 当年度総会、研究協議会報告 | 大会事務局 |
| 5. 夏期研究協議会体験報告 | 参加者代表 |
| 6. 4分科会活動報告（製図、計画、構造、施工） | 各分科会主査 |
| 7. 製図コンクール運営委員会報告（審査結果報告） | 委員長 |
| 8. 資格取得推進委員会報告 | 委員長 |
| 9. 各県の建築教育の現況（教育活動報告・紹介） | 各県理事 |
| 10. 事務局ニュース・報告 | 事務局 |

平成4年より各県ごとに建築教育活動の報告・紹介をしていただいております。初年度・石川・山形の2県から始まり現在は毎年4県掲載し、2巡目に入っています。

H4 石川・山形 H5 北海道・埼玉・新潟・福井 H6 岩手・千葉・富山・愛知

H7 青森・群馬・神奈川・静岡 H8 茨城・宮城・長野・石川 H9 北海道・福島・東京・岐阜

H10 秋田・山形・新潟・福井 H11 岩手・栃木・千葉・愛知

会員名簿

昭和55年東日本建築教育研究会創立30周年記念事業として記念誌とともに現行名簿の体裁の会員名簿が発行された。当時名簿の発行は毎年ではなかったが昭和61年、建築教育ニュースとともに名簿も毎年発行の機運が生まれました。当時普及し始めていたパソコン・プリンタを使って30周年名簿の体裁で委員が入力し写真製版用の原稿をつくり、印刷屋に印刷・製本を依頼し現在に至っている。昭和62年版より広告を掲載し、本会の発行予算を補っています。

担当者も交代していき、建築教育ニュース・会員名簿の継続と一層の充実を期待しています。

資格取得推進委員会

埼玉県立大宮工業高等学校
長 島 佳 久

東日本建築教育研究会に「資格取得検討委員会」（委員長・岡田義治）が設置されたのは、1993（平成5）年6月の茨城大会であった。建築系では、過去に二級建築士の学科試験の一部を在学中に受験できないか、という課題に取り組んだ経緯があったが、当時、建築系学科生徒が在学中に取得できる専門的な資格は皆無であった。一方、土木系ではすでに土木施工技術者の実施が決定しており、建築系も追随する形で建築施工技術者試験の実施に取り組むべき、という声もあった。

翌年、全国建設業協会を窓口として建設省と協議した結果、同省から①高校生の試験を実施する機関があること、②試験実施の要望書を提出する高校側の窓口が一本化されていること、という指導を受けた。

そこで、社会人対象の建築施工技術者試験の実施機関である建設業振興基金に高校生試験の実施を要望した。しかし、建設省と振興基金双方に、建築系の先生方の本心は建築士資格の指導である、という先入観があった。そして将来とも安定した受験生の確保と採算性、さらに高校生の合格の可能性を模擬試験などの結果から客観的な数字で示すことが求められた。

資格取得検討委員会は、事務局とともに全国高等学校建築教育連絡協議会（全高建教連）を立ち上げ、組織の一本化を図るため、西日本工高建築連盟や中国、四国、九州各地区の高校建築教育研究会に働きかけて、274校（当時）の組織・会則・役員をまとめ、1994年9月1日から事実上活動を開始した。そして、施工技術者試験に関する教員の意識調査（回答212校）、建築系の当時の最上級生約13000名の生徒を対象にした意識と進路調査（回答者10,568名）を実施した。その結果、約80%の教員がこの試験の指導を行い受験させる意思を表明し、生徒も約90%が受験すると回答した。この背景には、建設系の生徒の約70%が就職し、その66%が建設会社の施工部門に進むという実態があった。

次にこの試験に参加する生徒の合格の可能性を推測するため、建設業振興基金から過去の問題の提供を受け、分析して生徒用の問題を作成し、1994年12月～翌年1月にかけて全国の各学校182校（6794名）が参加した模擬試験を実施した。その結果、平均正答率44%、少し指導すれば約30%以上の合格者を出せる、という生徒の実態を関係機関に報告することができた。

1996年2月には、施工技術者試験＜高校生試験＞の実施について4科〔土木・造園・建築・管（設備）〕合同会議が建設省で開催され、すでに実施されていた土木（1996年）、造園（1994年）に加え、同年12月から各試験を同一日に実施して合理的に課題を解決する方針が示され、試験会場も当初10～20都市程度から50都市にまで拡大された。

今、ファイル20冊余りに及ぶ当時の記録を見返して、建設省、建設業振興基金、全国建設業協会、全工協、事務局校・葛西工高、西日本工高建築連盟事務局校を行き来し、資料の作成と分析そして会議を繰り返した日々を思い出す。その回想には、いつも当時の東日本建築教育研究会々長・吉村義弘先生と同事務局長・松井貞二先生が登場する。話がうまく進展した、と感激したり、逆戻りしたと残念がっては暖簾を潜った。吉村先生は、私は建築の専門家ではない、と呟きながら人一倍熱心にこの試験の実施に尽力された功労者である。現職で急逝されたことが残念の極みであり、ご冥福を祈るばかりである。

なお、この建築施工技術者試験の実現に向けた、当時の初期の動向は、全工協「工業教育」1995（平成7）年1月号P.35～39及び同11月号P.75（トピックス）に掲載してある。

* これより以降につきましては、平成9年度より資格取得推進委員長を引き継ぎました長島が執筆させて頂きます。

平成9年3月 『一本の電話から』

はっきり何時だったかは思い出せないが、年度も押し迫った頃、都立蔵前工業高校の堀内先生から突然学校に電話があった。聞くところによれば、前委員長の岡田先生にご栄転のお話があり、資格取得検討委員長の後任に、私をどうかというお話であった。私としては、これまで委員の一人として岡田先生と一緒に活動は行ってきてはいたが、私以外にも適任者はいるのではないかとということで一度はお断りした。しかし、その後も各方面から働きかけがあり、実力不足を認識しながらも委員長に就任することを了解した。

平成9年6月 『第47回 長野大会にて正式に委員長へ就任』

長野大会までは、前委員長の岡田先生が全て対応して頂けると思っていた私は、新役員への改選後、突然演壇に上がって下さいとの言葉に正直なところ非常に当惑した。さらに、就任の挨拶など何も考えていなかったところへもってきて、「委員会報告も含めて何か話して下さい」と言われた時は、もうどうしようもなく絶体絶命という感じを受けた。今でも、東日本の先生方約200名を前にして、緊張のあまり足がガクガク震えたのをつい昨日のように覚えている。

平成9年6月以降 『住民票の提出免除を要望』

委員長就任後、最初に頭を悩ませたのが、試験出願時の「住民票」の扱いであった。これについては、第1回目の試験時からその「提出」が問題とはなっていたが、その後も全国各地から問い合わせが相次ぎ、「生徒のプライバシー問題がある」等の意見を多数頂いた。そこで、土木、造園等他の施工技術者試験の担当の先生方とも連絡を取り、平成10年5月、全国工業高等学校長協会より試験実施団体の「建設業振興基金」に対し、正式に提出免除の「要望書」を提出して頂くことが出来た。しかし、そうした支援の甲斐もなく、結果としては、「今後も住民票の提出が必要」との回答が同年6月に全工協へ寄せられ今日に至っている。

平成10年6月 『委員会名称を「資格取得推進委員会」へ変更』

平成5年の第43回茨城大会での委員会正式発足以降、岡田先生を中心に「資格取得検討委員会」の名称で様々な活動を続けてきた。しかし、平成9年12月の「第2回建築施工技術者試験」の実施を契機に、もはや資格取得の検討をする段階から資格取得を推進する段階へとこの委員会も変わってきたのではないかと意見も出された。そこで、平成10年6月の第48回北海道大会にて正式に委員会名を「資格取得推進委員会」と改称することとなった。

平成11年6月 『平成8年度 第1回試験合格者の追跡調査を予定』

平成8年度の第1回「建築施工技術者試験」を受けて合格した生徒は、上位資格である平成12年度の「2級施工管理技術検定試験」の受験が可能となる。本委員会としては、生徒がこの「2級施工管理技術検定試験」に合格してはじめて、「建築施工技術者試験」を導入した意義が達せられるものと考えている。そこで、最終的に「2級施工管理技術検定試験」に合格した生徒を対象に、追跡調査を行い「建築施工技術者試験」の今後の改善と建設業界での認知度の向上に役立てたいと考えている。

製図コンクール運営委員会

関東第一高等学校 塩 澤 泰

はじめに

全国の工業高校生を対象とした「全国工高製図コンテスト」(主催 ㈱・トンボ鉛筆)が昭和45年(1970)から実施され、建築設計製図の技術向上のため、多大の成果をあげてきました。ところが、主催者の都合により、昭和56年(1981)に第12回で中止することになりました。

そこで、せっかく実ってきた生徒の設計製図に対する関心と意欲をとぎすことなく、継続することを「製図分科会」が中心となり協議した「実施案」が理事会(昭和57年<1982>2月12日)で承認され、昭和57年(1982)よりの研究事業として継続することが決定し、赤地龍馬先生を委員長とする製図コンクール運営委員会が発足し、課題作りと審査を担当することになりました。本年(平成12年<2000>)で「製図コンクール」も第19回目を迎えることとなりました。

実施に当たって

第1回(昭和57年<1982>)実施については、運営費について「見切り発車」的な面があり、第32回(1982)総会群馬大会の製図分科会の協議会では「コンクール参加費を徴収したら……」の意見もありました。

しかし、國兼光由会長(蔵前工高校長)のお骨折りにより、全国工業高校長協会の、また、白石四郎常任理事(市川工高)のお骨折りにより、㈱建築資料研究社からのご援助によりスタートすることになりました。

そして、入賞者には「賞状」と、副賞として「学用品」が、入賞者以外の者にも「賞状」と「学用品」が参加賞として授与されました。また、入賞校には、月刊誌「住宅建築」が発送されました。これら「賞状」以外のものは、総て㈱建築資料研究社の好意により寄贈され、今日迄継続されております。尚、平成9年(1997)からは、CAD製図コンクールを実施することとなり、今年で第5回目を迎えることとなりました。

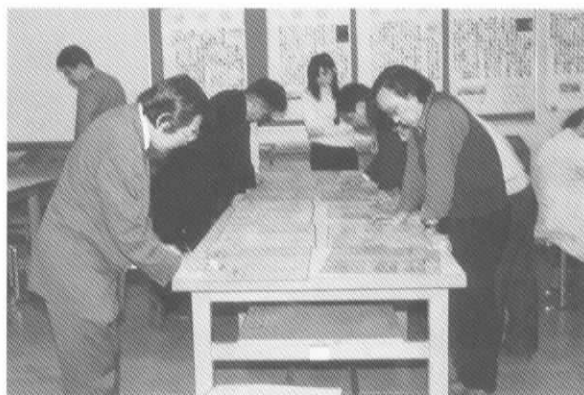
ところで、運営委員会のメンバー構成は、第1回(昭和57年)から第4回(昭和60年)迄は製図分科会委員が担当しましたが、第5回(昭和61年)以降は、各分科会より2名計6名を追加した形で構成することとなりました。課題は、例年4月1日の総会案内発送と同時に各学校へ送付し、11月上旬に応募締切り、11月中旬に審査を終了、12月上旬に審査結果・賞状・賞品・返却図面を発送しております。私が製図分科会委員として参加したのは、昭和59年からですが、この16年間ご協力いただいた、第1回から11回迄委員長を勤められた赤地龍馬先生、第12回から17回迄委員長を勤められた土田裕康先生はじめ多くの委員の先生方に厚くお礼申し上げます。又、この「製図コンクール」の実施に「はずみ」をつけてくださった、全国工業高校長協会、および、第2回以降も引き続き、ご協力にご賛同をいただいている、㈱建築資料研究社に対し厚くお礼を申し上げます。また、応募作品の提出に絶大なるご協力をいただいている全国(会員校および会員校以外)の諸先生方にも厚くお礼申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます。



第7回(平成元年度)審査風景 平成元年12月(蔵前工高にて)



新田委員会 平成6年2月(東工学園下田寮にて)



平成 11 年度審査風景平成 11 年 11 月
(都立蔵前工高にて)

第 1 回 (昭和 57 年度) 発足時の製図コンクール運営委員会の委員

國 兼 光 由 (会長 蔵前工高校長)	大仁田 拓 三 (市川工高)
森 安 四 郎 (副会長 田無工高)	土 田 裕 康 (田無工高)
五十嵐 永 吉 (副会長 東工大附工高)	遠 藤 勇 (東京工高)
高 山 英 一 (事務局長 蔵前工高)	角 田 勝 男 (向の岡工高・定)
委員長・赤 地 龍 馬 (墨田工高)	白 石 四 郎 (市川工高)
土信田 達 雄 (川越工高)	落 合 弘 (藤沢工高)
加 藤 尚 (川崎市立工高)	諏 佐 真 一 (蔵前工高)

第 12 回 (平成 5 年度) の製図コンクール運営委員会の委員

委員長・土 田 裕 康 (蔵前工高)	
計画分科会 大 間 俊 彦 (関東第一高)	村 川 孝 三 (日工大付東京工)
構造分科会 西 村 文 雄 (川越工)	福 住 英 毅 (神奈川工)
施工分科会 小 池 逸 郎 (北富士工)	千 葉 一 雄 (小石川工)
製図分科会 赤 地 龍 馬 (田無工)	小 沢 宏 (墨田工)
金 井 孝 雄 (前橋工)	菊 地 貞 介 (市川工)
古 賀 昌 之 (東工大附工)	酒 井 健 一 (向の岡工)
塩 沢 泰 (関東第一高)	角 田 勝 男 (神奈川工)
福 島 勝 (日工大付東京工)	松 本 重 昭 (大宮工)

第 18 回 (平成 11 年度) の製図コンクール運営委員会の委員

委員長・塩 澤 泰 (関東第一高)	
計画分科会 大 間 俊 彦 (関東第一高)	岩 上 成 輝 (川崎総合科学高)
構造分科会 大久保 健 (葛西工)	青 柳 昭 (市川工)
施工分科会 伊 藤 彰 人 (鶴見工定)	館 谷 知 久 (安田学園)
製図分科会 古 賀 昌 之 (墨田工)	福 島 勝 (東京工)
筒 井 斉 (向の岡工)	菊 池 貞 介 (市川工)
角 田 勝 男 (神奈川工)	長 島 佳 久 (春日部工)
金 井 孝 雄 (高崎工定)	黒 崎 利 之 (真岡工)
土 田 裕 康 (蔵前工)	諏 佐 真 一 (小石川工定)
遠 藤 悟 (田無工)	橋 本 政 美 (昭和第一学園)

東日本建築教育研究会のあゆみ

* (理)：理事長名、(会)：会長名、(事)：事務局長名

年	会長および 事務局*	研 究 会 の 活 動	文部省、全国工業 高等学校長協会	社会の動き
昭和 26 年	(理) 蔵前工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 浅野 三郎	11.6-7 本会設立総会(東京・若葉荘にて)「関東地区 建築教育研究会」と称す。 ○「建築計画」(文部省)の教科書委員の決定。 主として浅野・岸田・山田先生が執筆。	○文部省「建築計 画・設備」教科 書発行を計画	7. 朝鮮休戦会談 開始 9. 太平洋安全保 障条約、サンフ ランシスコ講話 条約
昭和 27 年	(理) 蔵前工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 浅野 三郎	2. 教科書対策委員会(市立川崎工高にて) 5. 16-17 総会・研究協議会(県立沼津工高にて) 「教科書、資格教育の問題について」 ○産振設備基準についての意見聴取(参加約 30 名、 宿泊 熱海荘)		10.23 十勝地震 (M8. 3)
昭和 28 年	(理) 蔵前工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 浅野 三郎	2. 産振設備基準修正調査 2. 14-15 関東・関西・東海地区建築課程研究協議会 (県立沼津工高にて、参加約 50 名)「産業設備基 準」 5. 教科書対策委員会(都立蔵前工高にて) 6. 25-26 総会研究協議会(県立高崎工高にて) 「視覚教育・教科書編修の問題について」(参加約 40 名)(宿泊、水上奥利根温泉) 7. 教科書対策委員会(実教にて)会誌発行 9. 13-14 研究会・都内見学会(若葉荘、参加者約 60 名) 会名を「東日本建築教育研究会」に改称 6. 26 近畿連盟と合同の教科書委員会 7. 27 開催(執筆分担決定、実教出版にて)		8. 18 「高等学 校の定時制教 育および通信 制教育振興 法」公布 10. 13 「学校教 育施行令」公 布
昭和 29 年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 浅野 三郎	2. 6 見学会：東京都体育館(斎藤謙次先生説明)、 講演会：「リミットデザインについて」小野薫先生 (若葉荘にて) 6. 11-12 総会・研究協議会(豊野工高にて、宿泊、わたり温泉) 6. 会誌発行 10. 15 見学会：鉄道会館(八重洲口駅舎) 東京都庁舎、講演会：「桂離宮について」(藤岡通 夫先生)、「構造」後藤一雄先生(東工大付工高にて)	構造力学(実教) 発行	12. 鳩山内閣成立 朝鮮復興特需で 不況克服
昭和 30 年	(理)(蔵前工高校長) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 蔵前工高 森安 四郎	5. 19-20 総会・研究協議会・見学会：(県立宇都宮工高 にて)(宿泊、鬼怒川温泉) 10. 会誌発行 10. 1 伏見理事長、墨田工高校長となる。 事務局、都立墨田工高、宇都宮先生	建築計画(文部 省)発行	12. 石橋内閣成立 この年、神武景 気おこる

年	会長および 事務局*	研 究 会 の 活 動	文部省、全国工業 高等学校長協会	社会の動き
昭和 30 年	(事) 墨田工高 宇都宮 新	10. 18 見学会：NHKテレビホール見学、講演会 (蔵前工高にて)：「海外の建築」狩野春一先生 11. 演習書編集委員会 構造力学演習書 (昭晃堂) 発行		
昭和 31 年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6. 7-8 総会・研究協議会「実習に関する研究発表」 (県立高田工高にて) (参加約 60 名) (宿泊、妙高 ホテル) 7. 第1回標準テスト (建築材料、構造力学) 実施 7. 8. 9 演習書編集委員会 11. 17 見学会：羽田空港ビル 会誌発行 建築法規学習書 (昭晃堂) 発行	11. 10 高等学 校工業「学習指 導の手びき」建 築課程編発行	この年高天原景気
昭和 32 年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6. 9-10 総会 (東京・若葉荘にて) 見学会：リーダーズ・ダイジェスト社、法政大学、 東京駅 9. 研究発表会「計画実験」(県立弘前工高にて) 文部省 研究指定校としての研究発表を兼ねて行なわれた。 この会にて「学習指導の手引き」建築科編発表 第2回標準テスト 構造計算 (実教) 発行	11. 11 中央教育 審議会「科学技術 教育の振興方策 について」答申	10. ソ連人工衛星 打ち上げ成功 株式暴落、鍋 底景気に落ち 込む
昭和 33 年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6. 総会 (県立甲府工高にて) 11. 研究授業「構造力学」 宇都宮先生 (墨田工高にて) 11. 15 第3回標準テスト	7. 28 中央教育 審議会「教員養 成制度の改善 方策について」 答申	9. 26 狩野川 台風 12. 東京タワー 完成
昭和 34 年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6. 総会 (県立川越工高、宿泊、飯能) 11. 研究授業「造形」中村先生、「構造」山田先生 (東工大附工高にて) 講演会：「海外の建築について」(加藤六美先生)	12. 産振設備基 準改訂協議会 (近畿と合同)	1. メートル法 実施 この年岩戸景 気
昭和 35 年	(理) 墨田工高校長 伏見 三郎 (事) 墨田工高 宇都宮 新	6. 5-6 総会 (県立神奈川工高にて、宿泊、湯本) 9. 研究会 (都立小石川工高にて、都研究指定校、視聴 覚教育研究発表を兼ねて) 講演会：「ライトの研究」山本学治先生 建築工事積算演習書・建築法規演習書 (昭晃堂)、 建築製図上・下 (実教) 発行	3. 31 教育課程 審議会「高等学 校教育課程の 改善について」 答申 10. 15 「高等 学校学習指導 要領」を告示	1. 日米新安保 条約調印
昭和 36 年	(理) 静岡工高校長 中江 斉 (事) 静岡工高 関 淳一郎 小石川工高 岡登 五郎	3. 31 伏見理事長勇退 6. 5-6 総会 (県立静岡工高にて、宿泊、三保)、理事 長中江先生 (参加 40 校、70 名) 12. 1-2 講習会「計画実験」(東工大にて勝田研究室、 参加 44 校、70 名) 見学：日比谷三井ビルの設備、日本生命ビルの特 殊潜函工法とハイテンションボルト工法	8. 30 「高等専 門学校設置基 準」の静定	4. ソ連人間衛 星に成功

年	会長および 事務局*	研 究 会 の 活 動	文部省、全国工業 高等学校長協会	社会の動き
昭和 37 年	(理) 静岡工高校長 中江 斉 (事) 静岡工高 関 淳一郎 小石川工高 岡登 五郎	6. 1-2 総会 (県立郡山工高にて、宿泊、磐梯熱海) 11. 講習会「構造実験」建設省建築研究所にて、出席約 70名 建築構造 1. 2 (実教) 発行	3. 31「技能教育 施設の指定等 に関する規則」 制定	9. 若戸大橋開通
昭和 38 年	(理) 静岡工高校長 中江 斉 (事) 静岡工高 関 淳一郎 小石川工高 岡登 五郎	5. 30 総合・研究協議会・研究発表 6. 1 (県立水戸工高にて、宿泊、大洗) 参加 59校、80名 見学：東海村原子力研究所 8. 17 近畿工高連盟と連絡会開催 (県立静岡工高にて) 11. 講習会「音響実験」東大生産技術研究所 NHK技術研究所 (東大石井先生)、参加 約 70名	10. 19 中央産業 教育審議会「高 等学校におけ る産業教育実 験・実習施設、 設備の基準の 改善について」 答申	1. 北陸地方豪雪
昭和 39 年	(理) 静岡工高校長 中江 斉 (事) 静岡工高 関 淳一郎 小石川工高 岡登 五郎	5. 23-24 総会 研究協議会 (県立市川工高にて、宿泊 木更津) 参加 64校、102人 10. 20-21 講習会：「設備実験」(虎の門共済会館にて、 早大、井上先生) 参加 58校、67人 見学：代々木オリンピック競技場、虎ノ門病院	「学習指導要領 の手引」(建築 科編) 発行	6. 16 新潟地震 (M7.5)
昭和 40 年	(理) 静岡工高校長 中江 斉 (事) 小石川工高 岡登 五郎	6. 5-6 総会 研究協議会 (県立新潟工高にて、宿泊、 とやの観光ホテル、参加 70校、109人) 11. 30 講習会：「防水工事」「TILT-UP 工法」 12. 1 千葉大、波多野先生、日本住宅公団関係技師 見学：田島応用化工、作草部団地 (西千葉) 参加 36校、62名	2. 30「産業教育 振興法施行 規則」の一部 改正、施設、 設備基準の 改訂 11. 10 産業教育 80年記念式典 挙行	3. 三井霞が関ビ ル起工式
昭和 41 年	(理) 静岡工高校長 中江 斉 (事) 小石川工高 岡登 五郎	6. 11-12 総会・研究協議会 研究発表 (県立古川工高 にて、宿泊、鳴子温泉、参加 60校、95人) 11.25-26 講習会：「超高層建築」(鹿島建設技術研究所にて) 三井不動産、山下壽郎事務所、鹿島建設技術研究所 (出席 80名) 見学：鹿島建設技術研究内、三井霞が関ビル、 参加 59校、95人	10. 31 中央教育 審議会「後期中 等教育の拡充 整備について」 最終答申	8. 中国文化大 革命 9. 24-25 台風、 24、25号
昭和 42 年	(理) 向の岡工高校長 富塚 信司 (事) 田無工高 森安 四郎	6. 2-3 総会 研究協議会 (県立前橋工高にて、宿泊、 伊香保温泉、参加者 117名) 「建築教育の問題と改善の方向について」 11. 24-25 講習会：「基礎構造・土質実験について」 (建設省建築研究所にて)、岸田英明先生外、第3、 第4研究部員、見学：建築研究所、パレスサイドビ ル、「総合事務所建築の計画、施工について」日建、 林昌二先生外、設計部員 建築設備、建築史、建築計画 (実教) 建築設備演習、建築構造演習 (昭晃堂) 発行 2. 25 高等学校工業科「学習指導の手引き」建築科編発行	8. 1 理科教育産 業教育審議会 「高等学校に おける職業教 育の多様化に ついて」答申	

年	会長および事務局*	研究会の活動	文部省、全国工業高等学校長協会	社会の動き
昭和43年	(理) 向の岡工高校長 富塚 信司 (事) 田無工高 森安 四郎	6. 7-8 総会研究協議会 (県立宇都宮工高にて、宿泊那須温泉) 「建築科の多様化について」中江先生 11. 21-22 講習会:「万博の施設について」(蔵前工業会館にて)、万博協会建設部次長林光夫先生 見学:国際貿易センター、日本鋼管、国立博物館(東洋館)、参加100名 3. 1 高等学校工業科「学習指導の手びき」建築科資料編上発行	4. 12 文部大臣から教育課程審議会あて「高等学校教育課程の改善について」諮問 7. 13 工業教育会館地鎮祭	4. 3 三井霞が関ビル竣工 5. 16 十勝沖地震 (M7.9) 8. ソ連・東欧軍チェコ侵入
昭和44年	(理) 向の岡工高校長 富塚 信司 (事) 田無工高 森安 四郎	3. 6-7 総会・研究協議会 (埼玉県秩父、秩父鉄道有隣クラブにて)、参加150名 「学習指導要領の改訂」総則編について、各分科会(製図・実習・計画・構造) 11. 21-22 講習会: (工業教育会館にて) 「改正建築基準法について」水越義幸先生 (建設省) 「学習指導要領総則編の改訂について」関口先生 見学: 東芝科学館、京王プラザ、旭ガラス、日本鋼管	建築測量(実教)発行 6. 10 高等学校工業科「学習指導の手びき」建築科資料編中・下(文部省)発行 3. 新工業教育会館完成	1. 23 能研テスト廃止
昭和45年	(会) 鶴見工高校長 長谷川光次 (事) 田無工高 森安 四郎	4. 5-6 総会・研究協議会 (県立山形工高にて)(宿泊、よねや旅館) 「学習指導要領の改訂」建築科編について、各分科会(製図・実習・計画・構造) 11. 27-28 講習会: (工業教育会館にて) 「電子計算機の利用について」小倉正士先生 見学: 東海ビル、京浜急行ホテル(建設現場) 東芝科学館、電子計算機の実績(日立、芝電商事)	造形(実教)発行・建築会社就職全科(昭晃堂)発行 5. 6 「高等学校学習指導要領案」発表 10. 15 同告示(48年度実施) 10. 24 中学生の高校への進学率発表、全国平均82.1(44年度79.4%)	
昭和46年	(理) 向の岡工高校長 富塚 信司 (事) 田無工高 森安 四郎	7. 28 東日本建築教育研究会創立20周年記念式典(社会文化会館にて) 7. 29-30 総会・研究協議会 理事長制を廃止、会長制度をとる(会則変更)	3. 13 文部省、特殊小中学部の新学習指導要領を告示 5. 28 「国立及び公立の義務教育諸学校等の教育教員の給与等に関する特別措置法」公布	5. 6 京王プラザ営業開始

年	会長および 事務局*	研 究 会 の 活 動	文部省、全国工業 高等学校長協会	社会の動き
昭和 47 年	(会) 鶴見工高校長 長谷川光次 (事) 田無工高 森安 四郎	6. 2-3 総会研究協議会(秋田県) 新学習指導要領による教育課程の編成 8. 2-4 施工部会主催「施工実習の指導法」(横須賀市 立工) 11. 17-18 講習会:最近の鋼構造について(工業教育会館) 見学:成田空港(東京国際空港)、検見川団地 建築実習(1, 2)(実教出版)発行	7. 3 教員養成 審議会「教員 養成の改善 策について」 建議 10. 5 学制 100 年記念式典	
昭和 48 年	(会) 埼玉県立玉川 工高校長 池田 壽男 (事) 田無工高 森安 四郎	5. 1-2 総会・研究協議会(茨城県土浦市)「教育課 程の編成と実務上の問題点」 見学:鹿島臨海工業団地 11. 16-17 講習会:「製図指導上の問題点」 竹中工務店、仁木設計事務所 見学会:新宿副都市、その他 建築構造(実教出版)発行 建築計画(実教出版)発行	9. 25 「筑波大 学法成立」 11. 21 小・中・ 高一貫教育を 図るための新 教育課程審議 会発足	石油ショック
昭和 49 年	(会) 埼玉県立玉川 工高校長 池田 壽男 (事) 葛西工高 松本 延夫	6. 7-8 総会・研究協議会(愛知県名古屋市) 「産業教育の改善に関する委員会審議の経過をめぐ って」 見学:犬山城、明治村 (製図・実習・計画・構造) 8. 7-9 施工部会主催「施工実習の指導法、実技教育」 (於盛岡工高)	2. 25「学校教育 の水準の維持 向上のための 義務教育諸学 校の教育職員 の人材確保に 関する特別措 置法」公布 5. 27「教員職法 制化法」成立 12. 9 三木内 閣、永井道雄民 間文相誕生	
昭和 50 年	(会) 埼玉県立玉川 工高校長 池田 壽男 (事) 葛西工高 松本 延夫	7. 6-7 総会・研究協議会(千葉県成田市) 「工業教育の改善、専門科目の最小限教育内容につ いて」 見学:成田空港 8. 21-22 計画部会主催(於小石川工高) 「計画実験・実習の指導法(日照、換気、音響、空 調)」、ミサワホーム総合研究所見学 建築設計製図、建築施工、建築構造設計(実教出版) 発行 プレハブ住宅(コンクリート編) 16mm映画	4. 28「短期大学 設置基準」公布 7. 15 文部省、 小・中・高校の 主任制の法制 化発表	
昭和 51 年	(会) 葛西工高校長 遊佐 五郎 (事) 葛西工高 松本 延夫	5. 28-29 総会・研究協議会(山梨県富士吉田市) 「基礎実習の実践と問題点」 8. 23-24 構造部会主催(於田無工高) 「材料、構造実験・実習」「コンピューター講習会」 建築史(実教出版)発行	1. 10「専修学校 設置基準」公布 3. 1 主任制度 化施行 12. 18 教育課程 審議会「教育課 程の基準の改 善について」答申	

年	会長および 事務局*	研 究 会 の 活 動	文部省、全国工業 高等学校長協会	社会の動き
昭和 52 年	(会) 葛西工高校長 高橋 豊次 (事) 葛西工高 松本 延夫	6. 10-11 総会・研究協議会(東京九段会館) 「教育課程の改善について」 「産振法、設備基準の改訂による運用上の問題点」 6. 20-21 製図部会(於東工大付工高) 「透視図のかき方、着色実技」 建築の基礎問題(市ヶ谷出版)教材委員会発行 建築資料集(実教出版)発行、 建築実習(1, 2)改訂版(実教出版)発行	5. 2 大学入試セ ンターの発足 7. 23 文部省、 小・中学校新 学習指導要 領告示 9. 22 文部省、 全面改定の 教科書検定 規則、検定基 準を公布	
昭和 53 年	(会) 葛西工高校長 堀 重雄 (事) 葛西工高 松本 延夫	6. 10-11 総会・研究協議会(青森県青森市) 「学習指導要領の改訂について、建築科科目の統合」 8. 18-19 「教材の作成と視聴覚教材の指導法」(於東京 工大)	6. 17 中央教育 審議会「教員の 資質向上につ いて」答申 10. 1 教育大学 (上越、兵庫) 開学	
昭和 54 年	(会) 葛西工高校長 堀 重雄 (事) 葛西工高 松本 延夫	6. 8-9 総会・研究協議会(栃木県鬼怒川) 「改訂学習指導要領の問題点」 8. 20-21 施工部会主催(於横須賀市、三浦ドッグ社員寮) 「安全教育について」	1. 13 第1回共 通第1次学力 試験実施 4. 1 養護学校 の義務制実施	
昭和 55 年	(会) 足立工高校長 堀 重雄 (事) 東工大付工高 五十嵐永吉	7. 29-30 総会・研究協議会(札幌市内ホテル東急イン) 「新教育課程と工業基礎・工業数理について」 記念講演会「北海道の建築」(北海道大学助教授越野 武先生) 研究視察:札幌市内の建築物の見学 30周年記念誌発行	4. 25 40人学 級法案可決 11. 25 文部省、 校内暴力等の 防止対策を通 知	
昭和 56 年	(会) 蔵前工高校長 國兼 光由 (事) 蔵前工高 高山 英一	6. 12-13 総会・研究協議会(長野市内長野ホテル) 「新教育課程と学習指導について(工業基礎・工業 数理)」 8. 20-21 講習会「照明の基礎・光源と照明設計」 (於中央工学校田端校舎) 見学会: NHKホール、東京電力KK、大塚支社	6. 11「放送大学 学園法」公布、 中央教育審議 会「生涯教育に ついて」答申	
昭和 57 年	(会) 蔵前工高校長 國兼 光由 (事) 蔵前工高 高山 英一	6. 11-12 総会・研究協議会(群馬県草津市) 全建プラザ 「新教育課程について」 8. 6 講習会(於日本光学横浜工場) 「建築測量に関する実技演習並びに工場見学」 第1回製図コンクールの実施	5. 6 文部省 「新高校教育 課程編成状況 調査」結果発表	
昭和 58 年	(会) 蔵前工高校長 國兼 光由 (事) 蔵前工高 高山 英一	5. 20-21 総会・研究協議会(富山県東砺波郡庄川町) 「越中庄川荘」 「工業基礎・工業数理の実践報告」 講演会「建設業の今後の展望と建築教育」 8. 9-12 建築科目に関するパソコンの実技指導と実技 演習(参加者81名) 第2回製図コンクールの実施	11. 22 教員養成 審議会「教員の 養成及び免許 制度の改善に ついて」答申	

年	会長および 事務局*	研究会の活動	文部省、全国工業 高等学校長協会	社会の動き
昭和 59 年	(会) 墨田工高校長 楠見 善男 (事) 墨田工高 井上 満	6. 15-16 総会・研究協議会 (岩手県盛岡市ホテル東日本) 「工業基礎をどのような計画のもとにどのような内 容で指導したか」 「工業数理における一考案について」 「パソコンについての実践報告」 映画発表「躍進田無工高・卒業生はいま」 9. 1-3 講習会「建築施工実習研究協議会」(於向の岡 工高) 第3回製図コンクール	8. 8 「臨時教育 審議会設置法」 公布	東西ドイツ統一
昭和 60 年	(会) 墨田工高校長 楠見 善男 (事) 墨田工高 井上 満	6. 7-8 総会・研究協議会 (高山市民文化会館) 「工業基礎の授業について」・「建築技術者に必要な 実習内容に関する調査のまとめと分析」・「パソコン を利用した教育内容と、その指導について」 8. 1-3 「パソコンの実技演習」(於日本工業大学) 第4回製図コンクール	6. 26 臨時教育 審議会「教育改 革に関する第 1次答申」提出	
昭和 61 年	(会) 墨田工高校長 加地 正義 (事) 墨田工高 佐藤 賢吉	6. 6-7 総会・研究協議会 (福島市磯坂温泉ホテル聚楽) 「建築科における情報技術教育はどのように計画・実施 したらよいか」 「建築製図の指導法について」 8. 1-2 「建築計画・設備の実験実習」(於蔵前工高) 東京芸大「奏楽室」移築工事現場見学 第5回製図コンクール	6. 4 文部省、 中等教育改革 の推進に関す る調査研究協 力者会議を設 置	
昭和 62 年	(会) 小石川工高校長 加曾利政男 (事) 小石川工高 松田 紘	6. 12-13 総会・研究協議会 (石川県片山津温泉「ホテル ながやま」) 「透視図の学習指導について」 「コンピュータによる室内環境測定」 研究視察:「那谷寺」「九谷焼資料館」「成巽閣」 7. 31-8. 1 実習・実験「鉄筋コンクリートばりの構造 実験」(安田学園高等学校) 見学: 清水建設KK技術研究所 第6回製図コンクール	8. 20 臨教審解 散	
昭和 63 年	(会) 小石川工高校長 松村 篤躬 (事) 小石川工高 松田 紘	6. 10-11 総会・研究協議会 (埼玉県産業文化センター) (大宮ソニックシティ) 「CAIによる建築設計の実践と効果」 「木造実習」二階建住宅の実践 8. 4-6 「建築施工実習の実践指導について」 (東京工業高校、赤倉研究所) 第7回製図コンクール	4. 1 文部省、 単位制高校を 制度化	
平成 元 年	(会) 小石川工高校長 松村 篤躬 (事) 小石川工高 松田 紘	6. 9-10 総会・研究協議会 (静岡県静岡市観光ホテル「松園閣」) 「赤外線映像装置による温度測定と外壁診断」 「関市立体地図の製作ならびに提示用CAIの開発」 研究視察「登呂遺跡・同博物館及び岸沢銑介美術館」 7. 25-26 「設計製図の指導について (CADの実技演習 と建設会社での利用状況」(埼玉県立大宮工業高校) 参加 45 名 第8回製図コンクール		昭和天皇崩御 皇太子明仁親王即 位、新年号平成と なる 横浜ベイブリッジ 完成 サンフランシスコ 地震 (M6.9)

年	会長および事務局*	研究会の活動	文部省、全国工業高等学校長協会	社会の動き
平成2年	(会) 田無工高校長 清水 守男 (事) 田無工高 赤地 龍馬	7. 25-26 総会・研究協議会(神奈川県、湯本ホテルおかだ) 「川崎市におけるインテリジェントスクールの試み」 「コンピュータを授業にどう取り入れたらよいかへCADの実践を通しての試案」 創立40周年記念式典 記念講演会「わが国の耐震建築理論」 (東京大学名誉教授 工学博士 梅村 魁先生) 40周年記念誌発行 6. -8 夏期研究協議会講習会「建築施工実習研究協議会」 「透視図の着彩と添景の実技演習」(於:東京工高) 第9回製図コンクール		
平成3年	(会) 田無工高校長 清水 守男 (事) 田無工高 本間 正明	8. 5-6 総会・研究協議会(宮城県ホテル松島「大観荘」) 「新しい設備を活用した「課題研究」の実践について」 「現代住宅と重要文化財「我妻家」との比較」 「卒業設計の実践」 7. 22-23 夏期研究協議会(計画分科会神奈川県勤労会館) 「建築法規」「建築史」講習並びに見学会(横浜の近代建築) 第10回製図コンクール		新都庁舎落成 雲仙・普賢岳土石流発生 ソ連共産党解散
平成4年	(会) 田無工高校長 清水 守男 (事) 田無工高 本間 正明	6. 12-13 総会・研究協議会(新潟県月岡温泉ホテル「清風苑」) 「建築設計におけるFCAIの実践報告」 「課題研究の実践報告」 研究視察「豪農の館」北方文化 7. 27-29 夏期研究協議会(施工分科会・越生高等学校軽井沢研修センター) 「木造・S造・RC造・測量実習」の実技講習会 第11回製図コンクール	学校週5日制 スタート	沖縄本土復帰 20周年 ミニ新幹線「つばさ」開業
平成5年	(会) 葛西工高校長 吉村 義弘 (事) 葛西工高 松井 貞二	6. 10-11 総会・研究協議会(茨城県「大洗パークホテル」) 「専攻科に関する実践報告」 「課題研究の実践報告」 研究視察:「好文亭(偕楽園)」「弘道館」 7. 27-28 夏期研究協議会(構造分科会・葛西工高) 「振動模型の製作とそれを利用した模型実験」の実技講習 第12回製図コンクール		北海道南西沖地震 (M7.8)
平成6年	(会) 葛西工高校長 吉村 義弘 (事) 葛西工高 松井 貞二	6. 16-17 総会・研究協議会(山形県天童温泉「滝の湯ホテル」) 「地方都市における建築教育に関する報告」 講演会「風土と建築」本間利雄先生 7. 26-28 夏期研究協議会(製図分科会・新潟県六日町白銀山荘) 「間伐材を使用したログテーブルの製作」 第13回製図コンクール		不況型倒産最高となる 日本人初の女性宇宙飛行士向井千秋 スペースシャトル コロンビアに乗る 関西空港開港 北海道東方沖地震 (M7.9)

年	会長および 事務局*	研 究 会 の 活 動	文部省、全国工業 高等学校長協会	社会の動き
平成 7 年	(会) 葛西工高校長 吉村 義弘 (事) 葛西工高 松井 貞二	6. 8-9 総会・研究協議会(千葉県「ホリディ・イン 東武成田」) 「建築施工技術者試験の指導法について」 「建築と子供達カリキュラム」(アメリカ・アンテー ラ教授) から学ぶもの 「歴史的建築物の実測調査及び模型製作」 7. 27-28 夏期研究協議会(計画分科会・川越工業高校) 「建築法規・建築史講習並びに川越の町並・文化財」 見学 第14回製図コンクール		阪神・淡路大地震 発生(震度7) 地下鉄サリン事件 国内で生れた日本 人の子供数118万 7,067人で過去最 低
平成 8 年	(会) 蔵前工高校長 北島 敬己 (事) 蔵前工高 堀内 仁之	6. 6-7 総会・研究協議会(愛知県「名古屋国際会議 場」) 「単位減に伴う教科指導法」について 「紙を生かした課題研究の取り組み」 「本校におけるCAD教育」 「建築積算の指導法について」 「建築教育におけるマルチメディア」 「私の環境論」名工大名誉教授宮野秋彦先生 7. 2-9-30 夏期研究協議会(施工分科会・神奈川工業高 校) 「建築施工」に関する講習並びに見学会 第15回製図コンクール		病原性大腸菌O- 157 発生
平成 9 年	(会) 蔵前工高校長 北島 敬己 (事) 蔵前工高 堀内 仁之	6. 12-13 総会・研究協議会(長野市「ホテル国際21」) 「厳選に伴う内容の整理」 「善光寺の歴史と建物」 研究視察:「冬季オリンピック施設」 7. 24-25 夏期研究協議会(構造分科会・田無工業高校) 「教科学習及び学習補助教材としての学習ソフトの 製作」 第16回製図コンクール		秋田新幹線開通 香港中国に返還 長野新幹線開通 東京湾アクアライ ン開通 消費税5%に引き 上げ
平成 10 年	(会) 蔵前工高校長 北島 敬己 (事) 蔵前工高 堀内 仁之	6. 11-12 総会・研究協議会(北海道「ホテルライフオ ート札幌」) 「厳選に伴う内容の整理」 「北海道の建築教育」 研究視察:「北海道開拓の村」 8. 4-5 夏期研究協議会(製図分科会・市川工業高校) 「JW-CADの基本操作の体験と授業への活用」 50周年記念事業特別委員会設置 第17回製図コンクール		明石海峡大橋開通 長野冬季オリンピ ック

年	会長および 事務局*	研 究 会 の 活 動	文部省、全国工業 高等学校長協会	社会の動き
平成 11 年	(会) 墨田工高校長 稲見 辰夫 (事) 墨田工高 小沢 宏	6. 17-18 総会・研究協議会(秋田県「秋田ビューホテル」) 「21世紀の建築教育のあり方」 講演会「思春期の心の理解」山崎友丈先生 「建築教育実践」 研究視察:「みちのく小京都角館」 7. 23-24 夏期研究協議会(計画分科会・蔵前工業高校・ 鹿島K I ビル) 「建築設計」・「建築史講習並びに見学会」 「江戸東京博物館・浜離宮庭園」見学 8. 4-5 製図分科会自主開催(蔵前工高) 「JW-CADの基本操作の体験と授業への活用」 第18回製図コンクール	新学習指導要領 告示	
平成 12 年	(会) 墨田工高校長 原田 昭 (事) 墨田工高 小沢 宏	7. 26-27 総会・研究協議会(栃木県鬼怒川温泉「ホテルニュー岡部」) 創立50周年記念式典 記念講演会「世界文化遺産日光東照宮の謎」 (日光東照宮補宣、総務部長高藤清俊氏) 50周年記念誌・製図コンクール作品集発行 8. 7-8 夏期研究協議会(施工分科会・石川島技術教 習所研修センター) 「クレーン特別教育講習会」 第19回製図コンクール		

東日本建築教育研究会創立 50 周年記念事業に協賛していただいた方々のご芳名

ワタナベスタジオ
オクダ建設
株式会社文化堂
千葉県建設業協会
岡建工事(株)
東日観光(株)千葉支店
千葉日建工科専門学校
測機社茨城
上條建設株式会社
望月建築事務所
帯広建設業協会
池田林業(株)
一品堂書店
クレハ建設(株)
千葉測器
建友会
(株)三晃商会
かゆう堂
すずりょう
錦興業株式会社
網走建設業協会
積和建設埼玉(株)
細小路工務店
千代本興業株式会社
クレス横浜
北沢建設株式会社
有隣堂
(株)KMS
松本事務機株式会社
高千穂精機株式会社
石原建設株式会社神奈川支店
写真みなかわ
千葉工業大学
浅野工学専門学校
新太平洋建設株式会社
北島建設工業株式会社
日向建設株式会社
田中工務店株式会社
茨城県立つくば工科高等学校
新潟建設業協会 三条支部
株式会社山下商店
多摩プラス株式会社
武藤工業株式会社
千葉経済大学付属高校同窓会
株式会社塚本油店
株式会社現代建築研究所
ミドリ安全株式会社藤沢支店
株式会社イトコー
(有)はんざき建築事務所
(株)川田建設工業
(株)宇佐美建設
(株)丸い伊藤建設

株式会社大畑建築設計
黒沼建築設計事務所
株式会社久慈設計久慈
(株)フジタ横浜支店
(株)フジタ昭和学園工事事務所
(株)吉川工務店
佐賀組
匠建設
池田建設株式会社
池田菅野建築事務所
杉山組
株式会社フソウシステム研究所
茨城県立大宮工業高校建築科
株式会社オーム社
財団法人能代本建設業協会
有限会社鈴義
株式会社サンエス
株式会社青島設計
日進堂
(有)原田紙文房具店
三洋株式会社
(株)ジェッツ
(株)備前苑太陽ワーキング
能代山本地区設計事業共同組合
大成建設株式会社工事作業所
日本旅行 熊谷支店
(株)八木橋
(株)兼立電工
太田マンションサービス

置賜建設(株)
相馬建築設計事務所
(株)西村組
(株)マルノ建築設計
(株)南建設
(株)吉川建設
(株)吉田工業
(株)北日本測機
織物問屋 佐幸商店
(株)サイカツ
有限会社レモン
大友建設(株)
株式会社岡田工事部
東栄商工株式会社
株式会社モリケン
中豆建設株式会社
東海理機株式会社沼津営業所
桜井スタジオ
川島建設
松島機材(株)
(株)杉浦組

青森市建設業協会
株式会社エムアイエム
財団法人岐阜建築工業会
(株)鴻池組 浦和営業所
(株)中井住研能登営業所
小倉建設(株)
(株)中多工務店
(株)大河原建設
(株)木下建設工業
(株)平井組
(株)岡山工務店
長尾建設
(株)日伸建設
北海道苫小牧工業高等学校
株式会社武田製図機械製作所
敬愛学園高等学校
ピース(株)
株式会社オーシマ
丸一工業株式会社
昭和土建株式会社
合名会社河村文開堂
まるひ建設株式会社

金原株式会社
榊原設備工業株式会社
竹内建築株式会社
秋田建築設計事務所
株式会社高山書店
株式会社朝文堂
中亀建設(株)
昭栄建設(株)
昭和建設(株)
(株)勝栄建設
マルチコントラクター協同組合
日建学院
三教株式会社
テクノビジョン
花井製作所
潮田高之
ツシマ店舗
和興建設
修永設計工務
石川衣料

ここに掲載させていただいたご芳名は事務局で把握させていただいたものです。ご芳名を掲載しなくてもよいと言われた方々、又把握しきれずに掲載に漏れたご芳名があるかと思います。責任はすべて事務局にあります。ご寛恕をお願いします。

ご協力有難うございました。

編集後記

平成10年7月13日、第1回編集委員会を都立蔵前工高で開催。その後7回の会合を重ね、平成12年5月25日、都立墨田工高での編集委員会を最後に編集を完了した。

この記念誌の編集の基本方針は、40周年記念誌の方針を引継ぎ、1) 50周年を礎に、近未来に向けて発展を続けようとする姿を表現する。2) すべての会員校が参加できる内容とする。3) 写真・図・表を多くし、文章はできるだけ少なくする。4) 内容の構成は41～50周年の10年間を中心にまとめ、必要に応じて、40周年以前のものも加えることとした。

特に研究会のあゆみについては、昭和26年から今年迄の50年間の内容を掲載した。今回、事務局が蔵前工高にあることと、副会長ということで、編集委員長を仰せつかったが、幸いにも、40周年記念誌編集に際しては、当時の副会長兼編集委員長であった古谷先生のもとで、山崎・大庭両先生と編集作業にあたったことが今回大変役に立ったと思われる。編集委員は、それぞれの職場での校務、さらに各分科会のまとめ役としての仕事を抱えながら、研究会の業績を将来に残すべく、使命感と奉仕の精神を持って作業に当った。各委員の誠意あるご協力のお陰で、この記念誌が予定どおり鬼怒川の大会々場にお届けできたことをここに記す。なお、ご協力いただきました、文部省佐藤義雄調査官をはじめ、歴代会長・多くの先輩方、加盟校の先生方に心より感謝の意を表する次第です。

(2000年5月 土田記)

<編 集 委 員>

土 田 裕 康 (都立蔵前工高)
山 崎 敏 弘 (県立神奈川工高)
松 井 貞 二 (都立蔵前工高)
菊 池 貞 介 (県立市川工高)
大 庭 孝 雄 (県立小田原城北工高)
大久保 健 (都立葛西工)
内 藤 美雪丸 (日工大付東京工)
堀 内 仁 之 (都立蔵前工高)
小 沢 宏 (都立墨田工高)

東日本建築教育研究会 50周年記念誌

平成12年7月11日印刷

平成12年7月25日発行

編集 東日本建築教育研究会 50周年記念誌編集委員会

発行 東日本建築教育研究会 (代表者 稲見辰夫)

印刷 有限会社 藤印刷
